

# 20周年記念号



西南学院大学ワンダーフォーゲル部

WONDERFOGEL

1980



西南学院大学  
ワンダーフォーゲル部

西南学院大学ワンダーフォーゲル部々歌

一、いざや 行かん 我らの仲間 三、いざや 進まん 我らの仲間

あの峰越えて 尾根越えて けわしい谷を 乗り越えて

明日の希望に 胸ふくらませ 若き命の 血潮を燃やす

若さあふる 青春満ちたる

あゝ 見よ 西南の渡り鳥 あゝ 見よ 西南の渡り鳥

二、いざや 歩まん 我らの仲間

路ははるかに 続けども

今の苦しさを 耐えて忍ぼう

力みなぎる

あゝ 見よ 西南の渡り鳥

# 卷

# 頭

# 言

— 二十周年記念に寄せて —

部長 新 谷 正 彦

我がワンダーフォーゲル部が創設二十周年を祝うことになりました。この二十年間に我が部員の足跡が日本全国に及びました。そして、ワンダラーの本質を真に理解し、心身共に鍛えぬかれた多くの部員を社会に送り出してきました。これらの過程は苦難の道でありましたが、今思い起こせば楽しい道でもありました。

我が部の発展過程で幾つかのエポックが存在しました。それぞれの時点で活躍された○B諸氏、特に創設期に苦勞された諸氏、十周年時に日本縦断の計画・遂行に参加した諸氏、佐賀ロードに情熱を燃やした諸氏、そして大学卒業後も精神的に、また経済的に現役諸君への多くのご援助をいただいている諸氏がおられなかつたら、今日に至る我がワンダーフォーゲル部の発展は、あり得なかつたでしょう。

人間の二十年目は成人となったことを祝います。すなわち、人間の能力の興隆期の入口に立ったことを祝うものといえましょう。では、我が部はこの二十年をして、何を祝えばよいのでしょうか。我が部の二十周年は、不謹慎は充分承知していますが、我が部の衰退期への入口であるかも知れないのではないのでしょうか。一般に伝統が出来上ると活力、創造力が消失し活動がルーチンワークとなり活動のマンネリ化が否めません。我が部においても活力が失なわれつつあるのではないのでしょうか。現役の諸氏にはこの点を充分に考えていただきたいと思えます。

私は我がワンダーフォーゲル部創設二十周年を二十年の伝統の上にワンダラーとしての新しい道を開拓することを誓う若き現役諸君を祝うものであると位置づけたいと思います。最後に、これら若きワンダラーの発展を暖かくご支援を賜わりますよう○B諸氏にお願い申し上げます。



## 二十周年記念に寄せて

O B 会長

66 期生 松 岡 正 満

春夏秋冬、日本には四季があります。それぞれに魅力のある、又、探究心をかきたてられる季節です。自然に親しみ、自然の中をさまよい歩き、又その土地土地の風俗、習慣等を知り得る事を、目的とするワンダーラーにとっては、好条件の揃った国です。この様な好条件のもとに生まれた、我西南学院大学ワンダーフォーゲル部も、早いもので、創設二十周年を迎える事になりました。昭和三十五年、松岡、徳永（六十三期生）諸先輩方の努力により、同好会として発足し、その後、昭和四十年には、体育会ワンダーフォーゲル部に昇格し、今日に至っている訳です。その間に九州学生ワンダーフォーゲル連盟を設立し、（初代委員長には、古川洋氏六十五期生）、九州連盟のリーダーとしての役割を果たしてきました。部創設十周年記念行事としては、北海道より九州までの「日本縦断ワンデリング」を行い又、二十周年記念行事としては、機関誌「路」の発行、現役への装備品の寄贈等を行いました。

O B 会と致しましても、会創設以来、特別な活動は行っていませんが、この二十周年を機会として、より充実した O B 会としての運営、活動を行っていく所存でございます。その一環として、O B 諸氏、又現役諸君との連絡機関として、事務局を設置致しました。（事務局長に高丘氏六十九期生）今後、どしどし御利用頂きます様、お願い致します。

現役も、以前に比べますと、合宿も多くなり、自然の中にとび込んでいく機会も増えていますが、一つ一つの合宿にも、各パートそれぞれに、研究課題を決め、有意義なワンデリングを行なう様に切に希望致しますと共に、今後のより一層の発展を期待致します。

## 二十周年記念に寄せて

81 期生 加 藤 淳

西南学院大学ワンダーフォーゲル部も、創立以来二十周年目を迎えることになりました。これも偏に、先輩方の努力の賜物だと深く感謝しています。

一口に二十年と言っても、それは非常に長い時間であり、組織が確立し歴史、あるいは伝統というものが形成されてくるようになると、創立当初の自由な空気、新鮮な考え方が次第に薄れ伝統を守ること、組織を維持していくことが重視されていくようになることは、やむを得ませんが、それに伴う弊害が起つてくることもまた事実です。ちょうど船が長い航海をしていくうちに船底にカキ等が着き、速力が落ち性能が鈍くなり、正常な機能が作用しなくなるのに似ています。そして、それを取り除く為に船がドックに入ると同様、我ワンゲルも二十周年という一つの区切りを機会に、クラブ創立時の頃を振り返り、先輩方は何を考え、そしてワンダーフォーゲル部というものを、どういった方向へ持っていくとされたのか、ということをもう一度見詰め直し、ともすれば組織重視になりがちな思考に新鮮な空気を吹き込み、それらを踏まえたいうえで、はじめて今後のワンゲル活動が以前にも増して発展していくものと信じます。そして部員各自が、その事を十分理解し、活動していくことを期待します。

最後に、この二十周年誌を発行するに際し、忙しい時間を割いて御協力して下さい、時には貴重な助言さえいただいたOB諸氏に対し、心から厚く御礼の言葉を申し上げます。

# 路

目次 = 20周年記念号 =

◇20周年によせて

部歌

二十周年記念に寄せて

二十周年記念に寄せて

部長  
OB会長  
現役代表

新谷正彦  
松岡正満  
加藤淳

ワンダーフォーゲル同好会創立の頃

63期

松岡博之

8

西南学院大学W・V部部长殿「祝ワンダーフォーゲル部」

63期

白田芳徳

9

ワンゲル万歳

64期

坂田正勝

10

創設期の思い出

64期

石田勝彦

12

初めての北アルプス

65期

竹本是是

13

雑感「ワンゲルから14年」

66期

松延士

14

10年前の「路」

68期

宮原照男

16

ワンゲルの後輩へ

69期

山本淳一

18

無題

70期

増原憲一

19

日本縦断北海道パート

71期

中村慎一

21

我、いまだ現役ノ

71期

三村久一

22

山の思い出

72期

高原真澄

22

燃える青春「関西合ワンの思い出」

72期

高丘素行

27

忘れていた山

73期

井上代子

31

バーワン報告書

73期

石田守幸

34

西新町「この非権威的な町」

74期

伊藤信利

36

遠く国、遠く山

74期

武川敏治

38

無題

75期

岩永好生

40

二十周年に寄せて	76期	阿部昭
二十周年に寄せて	77期	島戸和
無題	77期	水城明
赤石岳再訪	77期	山本隆
殉教の島	78期	長野子
連想ゲーム	78期	長野子
郷愁列車	79期	荒巻忠史
「佐賀一〇Kmロードレース」中止に関して	81期	荒巻忠史
20周年に寄せて	81期	宝蔵一
20周年に寄せて	81期	古賀一
四国サイクルツアー	82期	安武真吾
合宿後の一杯	82期	金水紀代司
ワンゲル1/20を過して	83期	北川邦光
つれづれに……	83期	藤田淑子

◇変遷

創立の頃	一号	松岡博之
S・W・Vの方針	二号	坂田芳徳
意見	二号	永原伸雄
これからの事	三号	吉村是忠
S・W・V現段階についての一偏見	三号	竹本伸雄
ースポーツワンデリングと関連して	三号	柴田正幸
全日合ワン	四号	堀田勝久
九合ワンに参加して	四号	井上須美子

関西女子合ワシ	八号	68期	八尋洋子	76
春合宿Aパート(台湾)	五号	68期	曾根本昭	78
道標立て		68期	富本真一	91
新人歓迎		70期	山本淳一	93
ワシゲル雑感	六号	65期	古川洋	95
女子ワシゲル		69期	富沢美樹子	97
山登りの本質と単独行	七号	71期	杉原健次	99
山登りは観客席のないスポーツ				
関西合ワシ				
忍苦	八号	72期	田中秀哲	100
暑かった、きつかった、嬉しかった		73期	中島倫子	103
十周年記念日本縦断				
移動パート報告書	九号	71期	中村慎久	105
訓練合宿回想録		72期	三田達子	108
私の試験期ワシゲル	十号	74期	才田啓子	109
頼りなげなモノローグ		77期	宮川和彦	112
スキー合宿	十一号	78期	長野律子	113
秋の強化で得たもの		79期	椎葉ゆり子	115
冬山の旅	十二号	80期	松下克也	116
雑記帳				
活動報告				
西南ワシゲルフォーゲル部規約				
OB名簿				

# 20周年に 寄せて



## ワンダーフォーゲル

### 同好会創立の頃

63期 松岡博之

野球部に入ろうかなあと思っていたところ、当時の創立者の一人である橋本忠彦氏（現アドグループ社長）が「立教大学でワンゲルと言うものがある。我々も作ってみないか。」と話を持ちかけ、それに中島和宏氏が加わり三人で話し合った。

企画は、すべて橋本氏が考え学内のキャンパスに美術部員の腕を借りて素晴らしいポスターを出したところ、百人近い人が第一回の集會に出席したが、我々は二年生になつたばかりだったので、三、四年生には遠慮してもらい、一年と二年生すなわち六十三期と六十四期で構成することになりました。

今、考えてみると、いとも簡単に出来た訳です。そして同好会費を毎月百円位にして、徴収は学内の芝生に集まっている時に預かったり、集會の都度集めることにしていた

が実に大ざっぱなものでした。とにかくモノモノやっているとといった感じでした。

そのうちに第一回の合宿をすることになり橋本氏に全てまかせて計画は出来たのですが、会長の当人が健康を害してしまったので、代わりに私が実行することになったのですが、どうして良いのかわからず、ままよ、ピクニック気分で行こうと思ひ、そのムードで押し通しました。

当時の部長は篠崎先生で随分お骨折し頂き、自動車部同好会の二階の小部屋を、お世話してもらいました。つまり会員の集まる場所が学内の芝生からワンダーフォーゲルの名を付けた部屋となつて格があがつた訳である。

坂田、貴様ワンゲルをつぶすとかノと大声を出して本人を驚かせたのは昭和三十六年、坂田芳徳氏に会長を交替して間もなくでした。坂田氏は我々の時より会計も、しっかりしていたし、企画も素晴らしかつたけど、他の運動部の人々に「ワンゲルは今やっていることで十分だ。特別にクラブを作つてやる程のことでもないのではないか。」と言つていたのを聞いてカチンと来ていたからである。だが、山岳部に対して、やや劣等感めいたものがあつたようにも思ふ。

その後は古川氏にバトンタッチされて彼の政治的とも言うるか情熱が突つて同好会からクラブへ昇格したと言うこ

とを何年か後に人伝に聞きました。

当時のことで忘れてはいけなひのは、女牲軍の地味な活躍です。宇野、伊藤、瀑布川の上級生と高木、苑田等の下級生が実に不平も言わずに頑張ったと思います。

合宿の思い出として印象に残っているのは南紀、対馬のことなど様々あるのですが、その中でとりわけ印象深いのは九州縦断で、山岳部顔負けの岩登りをやって立派な実績を残したという事です。同好会を預かる私はチャランポランにやっていました。廻りのメンバーは真剣に活動して会を盛り立て、古川氏という優秀なリーダーが現われるまで、よく御協力頂いたことに今だ、感謝の念に耐えません。

## 西南学院大学 W V 部部长殿

祝ワンダーフォーゲル部

63 期 白 水 簿 二

ワンダーフォーゲル結成20周年おめでとうございます。当時(35年)同好会として結成し、その後部昇格と現役並びに卒業生の努力に依り発展したことを嬉しく思います。

卒業して16年、最近年のせいアルバムを出しては青春時代を、当時を甘くなつかしく顧みています。若かつた頃の思い出を語るには当時の仲間と会い親しく話しながら第一の青春時代を謳歌しています。こういう機会は高校(朝倉)が殆んどで大学となるとゼミ(船越ゼミ)の同期生の集まりと総会ぐらいでワンゲルの仲間とは音信不通で会うことがない。この記念事業を機に連絡がとればと胸をふくらませていきます。

当時ワンゲルが結成されたのが二年生の時で(昭和35年)最初に行ったのが野北牧場に20名(女子3、4名)位で行った様に記憶しています。その時の夏期合宿で、鹿児島・霧島、えびの高原、人吉經由で八代まで球磨川を歩いて下ったことがあります。ここに同封の写真は結成二年目、日向神ダムで一泊し御前岳、釈迦岳を縦走した時の写真です。丁度雨の日で皆ズブ濡れになりました。役に立てばと思ってお送りします。

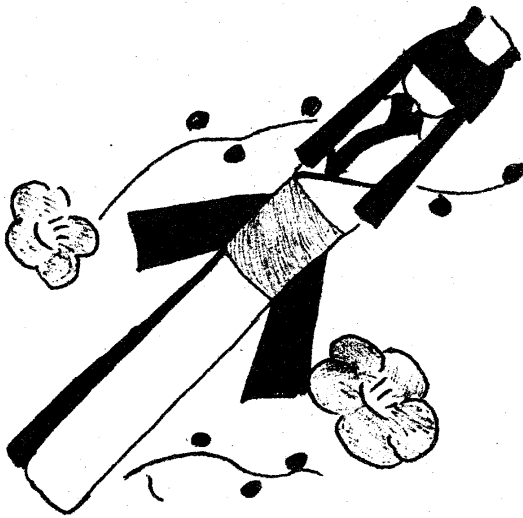
現在は自然に触れることなく、旅行で車中から見るだけで一歩奥深く自然を見ることはありません。去年の四月、15年前ワンゲルで行った霧島、林田温泉に行きましたが、当時の面影はなく九重・阿蘇と違った山、樹木を見て自然の雄大さに新ためて魅了させられました。

最近会社でも野山を歩く会が出来、ペンを取るちよつと



前に勧められたところです。今、野山を歩くと、いつても、  
ルフで一日緑の中に溶け込み、緑の清れいさに満喫してい  
ます。後はボールを追いつスコアを気にしながら・・・。  
又、自然と仲間を確かめたい！

以上で当時の思い出と近況を報告し筆を置きます。益々  
ワンダーフォーゲル部の発展と御活躍を心より御祈り致し  
ます。



## ワンゲル万歳

64期 坂田芳徳

二十年、改めて月日の経つ速さに嘆息して居ります。社  
会人となって日々、苦事に忙殺され、混濁と流俗に埋没し  
切っていた私にワンゲル後輩諸氏の熱筆が、後ろを振り向  
く事さえ臆していた私の目を洗ってくれました。

私がワンゲル同好会なるものに（当時、私はワンゲルの  
意味をまったく知らなかった。）入会したのは、さわやかな  
春風の吹く松の下であった。集会は講義のない教室また  
は芝生の上と所を変え、同好会創始の六十三期先輩の熱弁  
に聞き入ったものでした。

会に必要な道具は全て六十三期創始の橋本氏、松岡氏の  
私有物、もしくは借り物といった有様でした。そんな中か  
ら私達は出発したのです。対馬歩荷、南紀歩荷、今想い出  
しても楽しかった事ばかり、しかし数多くいた六十四期生  
も一人減り二人減りして、一年を経た春には私を含めて三  
人となった淋しい時期もありました。それからというもの  
私は同好会をもっと大きくしたい、テント、機材、部室が  
欲しい。その為には多くの新入会員を加入させ、会費を導  
入し、組織を整備し、頭デッカチと言われても、自分達の

為だけではないワンゲル同好会を創り上げる事に夢中になりました。勿論将来、他の体育クラブに負けないクラブ作りとクラブ昇格を夢見て、当時サブとして六十五期の古川君と共に、時には激論、冷戦、和解の繰返しの中を突走ったのです。未熟な二代目に、皆さんよく協力してください。そんな中から同好会旗、バッヂ、会歌が生まれていったのです。講義中、一心にバッヂのデザインに就けり、後でノート写しに慌てたのも、又、高校時代音楽部に所属していた事から出来た粗々しい会歌を、米倉東筑高校音楽教諭に助けを借り、作り上げたのもこの頃でした。その会歌が、今も後輩の諸氏に歌いつがれている事を知り、胸の詰まる思いです。ありがとう。私の学生々活の大半を費やし、若き日々の情熱を注いだワンゲルが立派に成長し、若き後輩諸氏が力強く育っているのを知り嬉しく思います。

気懸りだったこの原稿を書いている今頃、諸君は夏季合宿の真最中、リーダー、サブの苦勞、諸氏の健闘が目に浮かぶ様です。数多くの歩荷の中で一番印象に残るものは、霧島合宿と九州合同ワンゲルです。霧島合宿では九州縦断という快挙を、九州合同ワンゲルでは我西南学院ワンゲルの他校を圧倒する員数と、きれいに揃ったユニホームに隊列、九州ワンゲル会のリーダーたらんと息込んでいた私、それにサブの古川君、全てが熱に想い出としてよみ返って

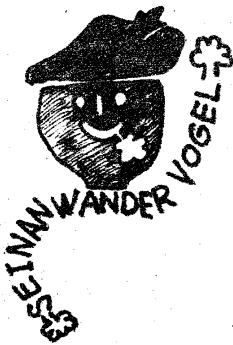
参ります。三代目として古川君にバトンを渡し、部昇格を見る事なく学院を去った私ですが、悔いるものはありません。

六十三期生が、生み出したものを六十四期生が手足を付け、六十五期生以下が肉付けをし成長させ、今諸氏等が充実させているのですから……。

社会に出てこれまで知らずでここまで人生を歩けたのもワンゲル体験があつたからこそと今思う。夏季合宿の成功を祈ると共に、後輩諸氏の今後の健闘を期待してやみません。

最後に、ワンゲルの原点を忘れることなく、心と身体を鍛え、貴重なる青春を昇華して下さい。

ワンゲル万歳!!



## 創設期の思い出

64期 花 圃 正 芳

私達が同好会的なものを初めて作ったのは確か、昭和三十七年頃だったと思います。六十三期生の橋本、徳永、松岡氏等を中心とし、これに六十四期の坂田、庄島、磨島、古賀君等が加わり女性メンバーも六十三期生中に四、五名程度居られた様ですが、お名前は失礼ながら失念しております。

当時、中央の学校では既にW・V活動は活発化しておりましたが、九州ではまだ知名度が低く、ローマ字のイニシャルだけを見ると車のワグンを連想したものでした。

最初の活動は志賀島までのサイクリングと云うささやかなもので、当時まだ車の少なかった国道三号線を銀輪を連ねて走ったものでした。その後、体育会加盟を合言葉に、九州各地で合宿を致しましたが、一番印象に残っているのは三十八年夏の合宿で、初めて北アルプスに行った事です。借物の装備を背負い二週間位の日程で穂高から燕まで縦走しました。帰りには金がなくなり、庄島君と二人で飲まず食わずで帰って来た記憶があります。

“人間”とは良く云ったもので人の間と書きます。私達

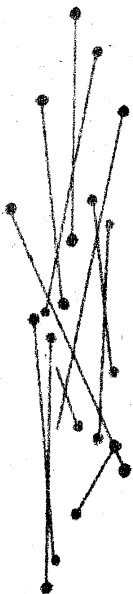
は社会に出ると好むと好まざるに拘らず種々雑多な人の間で生活する訳です。人と人との関係にも様々あります。親子、夫婦、親戚、職場、学校、サークル等。けれども、親戚、縁者を除き、俗に云う同じ釜の飯を食った仲間程、生涯を通しての長い関係を得られるものはないと思います。

学校、職場での成績や出世を気にした白々しい関係から解放され、単に人として対等に付き合えるからです。戦争経験のある人達の戦友会程、親密なものはないと聞きます。自分を越えて生死を共にしたいという赤裸々な人のつながりがあったからだと思います。

こういう意味で私達が経験した自然の中での大鍋のカレーライスは大きな意味があったと思います。

聞く処によれば現在は、体育会に正式に属し大いに御活躍されているという事、ご同慶に堪えません。

今後とも後輩達の為にも、九州地区W・V活動の先駆者として、益々ご発展される事をお祈り致します。



## 初めての北アルプス

65期 石田勝彦

「初めての北アルプス」ということで原稿を書くように頼まれ、これは適任ではないなと思つたので、二人程あつてみたが、「お前はヒマだから」というみよな理由でことわられた。幸か不幸か、この夏穂高行を計画していたので、まあ歩きながらでも昔のことを思い出してみようと考へ、引きうけることにした。

50年の秋に12年ぶりで穂高に行つた時は、とくに松本と上高地間のあまりの変り様におどろいたが、今回も新装になつた松本駅にビックリ、勝手を言いくさであるうが、思出のある場所はあまり變つてほしくないな、などと考へながら上高地へ向つた。

サブザック一つで、しかも中味の三分の一近くはウイスキーという気楽な山行から、昔のことが思い出せるのかな？自分で首をひねりながら、明神池で遊び、徳沢で休み、横尾山荘で一泊。

もちろん、当時は山小屋なんてとんでもない話で、ピニロン混紡と称する重いテントをかつき上げて使つていた。

食事にしても、当時の献立表を見れば、それでもないが、

記憶としては、三日目くらいからは米とジャガイモばかり食わされたような気がする。

二日目は穂高岳山荘までの上り、あの時は涸沢までの半日行程であつたが、重荷を背負つての上りはしんどかつたな……。この原稿を依頼した一人と話をした時も、「おい、あの時は俺とお前で、バテッコしたな」というように、ただ、ただ、山に來たということに対する後悔のみの半日であつた。

涸沢小屋のテラスで昼食をとりながら雪溪をながめてみると、当時のことがいろいろと思ひ出された。涸沢をベースに雪上訓練、東稜からの北穂、北尾根を通つて前穂、槍への縦走、さらに燕への縦走とかなりハードなスケジュールであつた。私個人にとつては、バテたり、顔にやけどをし、体調をくずして途中で下山したりで、惨たんたる山行であつたと言わねばならぬが、今になつてみれば、みようちに心に残る山行であつた。

当時に比較して10数キロ重くなつたからだで、ザイテングラードの急登を、ゼエゼエいながら山荘までたどり着くと、水の中で冷されているビールが目に入った。まさに隔世の感である。さつそくビールを片手に小屋の前の石垣にのぼる。

キザな言い方をすれば、あの時我々をこの山にかりたて

たものは何であつたらう？、少なくとも言い出しつべの一人が私であつたのには違いないが・・・この原稿を頼まれた時の注文にもあつたが、「なぜ北アの合宿をしたのか」。答えとしては「何とかと煙は高いところ上る」としか言いようはないのであるが、ただ、あの頃は、西南学院大学ワンダーフォーゲル同好会が、今日の西南学院大学ワンダーフォーゲル部を目ざしてスタートした最初の年であつたとだけは言えそうである。

この山行に先だつて七月中旬には、おりからの豪雨をついて、S W Vとしては初めて、全部（会）員を集めた合宿が九重坊ケヅルにおいて実施された。

## 雑感

— ワンゲルから14年 —

66期 竹本 是

松岡から突然電話をもらつた。ほんとにしばらくぶりだ。そういえば最近、出張のつれづれに電車や飛行機の窓からボンヤリ外を眺めた時など、よくワンゲルのことを思い出したりする。仲間にも久しく会ってないが、従つて消息も余り知らないが、みんなそれぞれに大いに、ますます元氣

にして健在なのだろう。

早いものだ。数えてみれば、ワンゲルを出てからやがて15年目となる。

電話の内容はこうだつた。「創部20周年」につき、何か原稿を送れ、金も少し都合しろ。」と。

かつての山男らしく無愛想な程単刀直入、単純明解（快）であつた。僕は2つ返事で了解する。

それから数日、ボチボチという気持でペンを取つてみて気がついた。何を書いて良いのか全く見当がつかない。

最近、この種の雑感を記すことなど、とんと御無沙汰だし。こんなはずじゃなかつたと、2、3日は少し憂うつに過すこととなる。

そんな日の夕方、いつものように地下鉄に乗つて六本木に着いた時、二人のハイスクールのお嬢さんが元氣よく乗り込んできた。一人は白人の可愛い子、もう一人は明らかに東洋人の顔だが米国かどこかで育つたのだろう。二人共きれいな英語で、そして大きな声で、クラスの仲間か何かの話に夢中だつた。車内は比較的すいていて静かだったので彼女らの声は隔々迄響きわたり、否応なく耳を傾け続けることになつた。と、突然。東洋系の方が「そうなのよ。そこが傑作なんだわ」と、はつきりした日本語で合つちを打った。僕は意表をつかれた感じ。白人の方も「でしよ。

だから私も困っちゃって」と、これまたきれいな日本語の両方を実に巧みに、又、正確にミックスさせて楽しそうに語り合い続けた。彼女ら程、自由自在に、しかも両方の言葉にまったくのよどみのない会話を交わす人を目のあたりにしたのは初めてだった。少なからず驚いた。

そして、日々の仕事の事を思った。もし、あの8割位の言葉のあやつりが出来たら、どれ程今の自分に好都合なことだろう。彼女らは環境と体験にしても、いわゆる努力の延長線上にその8割のあやつりは、はたしてあるものだろうか。つまり努力すれば何とかなるものだろうか？自問してみた。翌日、そのことを会社で、隣りの部屋の同僚に（英語の達者なやつ）聞いてみた。返事は予想した通りあつてなかった。「それは努力の可能性の中にあるよ。当然だよ。」

「やっぱしネー。」僕は溜息まじりにうなづいた。

またしても、ここにやる気があるなら頑張ってみな、越えてみな。といった調子の1つの手ごわいピークを知らされるハメになった。

ワンゲルから丸14年、いわゆる社会人としての生活も、つまるところ、こういう越えねばならないピークをつぎつぎに示され、そのピークの前で、ただただオドオドしたり、立ち止まったり、勇気を出して全うしてみたり、横っちょに行ったり、逃げたりそんなことの連続だったように思う。

そしてそのことは、これからもずっと続けて違いない。そうなる、何てことはない。僕は今だワンゲルをやっているようなものだ。

ザックかついで博多駅まで行く迄がまずきつかった。汽車に乗り、目的地に着いて歩き出すと、もう初日からの20km程度がぎりぎりのがまん辛抱だった。道がちよつと登ってくるともうアカン。只々、帰る日のことだけを考えた。そうしているうちに、いやが応でも一つのピーク、一つの尾根に到達し、それを越えていった。逃げて帰ることだけはしたくなかった。いい経験だったと思う。だからワンゲルの今の現役の人達は実に良いことをしていると。まじめに辛抱して欲しいと思うし、勇気を出してトライして欲しいとも思う。そうしているうちに一つのピーク、二つ目のピークを越えていけるだろう。いつか名もない美しい高原にたどりつけるかもしれない。

思えば先輩達につれていってもらったあの頃の菅平はきれいだ。諏訪高原・北八・美しの塔あたり。九州もいい。秋の祖母・傾。九住から牧の戸への尾根道。そんな心地よいワンデリングの時は、きまってスローテンポの草原情歌が聞えていた。

今のワンゲルはわからない。少なくとも草原情歌ではないだろう。サダメサシか陽水あたりか。これも古いのかも。

一回、合ワンにでも参加して、その辺の雰囲気を直接確かめてみたいとも思う。僕らの頃と、そう変わらないのかなあ・・・？どつちでもいい。

こうして久しぶりにベンを走らせワンゲルの事を思い出している、それだけで一瞬の清風が胸もとを通り過ぎた感じ。非常に心地良い気分になってきた。

今回はこの辺にしよう。さあ明日から、また出張が続く。金沢あたりだ。

僕のワンデリングは幼くも懐しくも、まだまだ続いている。



## 10年前の「路」

68期 松延 越士

20周年記念の部誌に原稿を書けと福岡の西原や高丘から電話があった。連休の前日(11月2日)に新橋の焼肉屋で同期の曾根本や堀田と飲み、乍ら当時の想い出に花を咲かせた。曾根本に借りた「路5号」や台湾遠征のアルバムを実に10年ぶりに読み返した。その中で今改めて読み返すとハッとするような言葉がある。

巻頭の辞の、当時部長を担当していた徳重先生の稿である。

「今のワンゲルでは、頑張れ!!ファイト!!といったありきたりの叱咤激励はあっても、心のこもったいたわりの言葉はあまり聞かれないような気がします。

ゲームやスタンプに笑い興じることはあっても、自然をたたえる欲びは薄れているようです。同じ部屋に出入し、同じ山に登ることはあっても、共通する問題をとりあげて、共に真剣に考えようとする努力は避けられているようにみえます・・・」

部の責任を持たされた三年の夏合宿では、富本をSとし、全員9人で、谷川・越後三山を歩いた。

新人の伊藤の雪溪でのスリッブや、二年の高丘のヒザ故障等、トラブルはあったが、比較的順調に進んでいた。

7月26日、連絡地二居で、女性パーティーの部員離脱の報を受けた。その時の卒直な印象は、「最後の三年の大切な夏合宿を、メチャクチャにして何ということだ。この馬鹿めが！」という気持であった。煮えくりかえるような気持のまま、野返湖で7月31日に集結し、帰福した。

その合宿の私の報告（路5号）の末尾に、以下の文を記している。

「今合宿に、我々は一つの問題を与えられた。ある二年生女子のパーティー離脱事件である。このことについては、各人が帰福後、反省会その他で、自分なりに考え結論を出したことと思う。団体生活の中でこの様な自分勝手な振るまいはタブーであり、それが他人に及ぼす影響がいかに大なるかを考えなければならぬ。

今回のことを良き反省材料として、二度とこの様なことが起こらぬようにしてもらいたい。」

「二度とこの様なことが起こらぬようにしてもらいたい。」ではなかったのだ。「二度とこの様なことを起こさぬ為は何をすべきか。」だったのだ。

集結地でこの問題をとりあげ、皆で徹底した話し合いをやったか？帰福後、うわべだけの処理ではなく、この問題の

発生した素地を探り、メスをいれ本質を把握したか？

離脱した本人と会い、当時の彼女の気持ちを相手の身になって考え、そうなった背景を理解したか？

一年生、二年生女子部員の一人一人と会い、相手の考え方や気持を充分理解し、お互いが納得する努力をしたか？

「否」である。

適当な反省会で、お茶を濁し、もうこの問題は解決したとまったくの一人よがりの解決で満足していた。

そうではなかったのだ。問題の本質は深く、まだ問題の与えられたチャンスもタイムリーなものだった。

徳重先生の、「共通の問題をとりあげて、共に真剣に考えようとする努力」は、まさしくこのことを指適されていたものと思う。

この秋、日本中を興奮させた日本シリーズ広島・近鉄戦の最終戦の翌々日の日経新聞のスポーツ欄で、優勝した古葉監督は、勝利の過程をふり返って下記のように述べている。（原文のまま）「6月初旬の中日戦で、早目の降板命令に腹を立てた先発の高橋里が、ロッカーの鏡を砕いた。鏡割り事件”元はといえば、リリーフ江夏のひき立て役になりがちだった先発グループの不満の表れでもあった。徹底した話し合いがもたれた。出来かけたミソは埋まったばかりか、江夏の大事な役割がいつそう選手間に認識され、

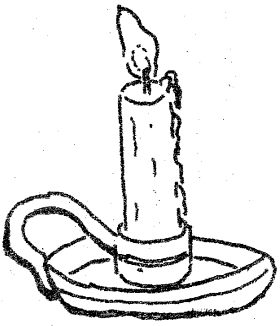


かえってこの事件をきっかけに、チームが一本化した。」  
どこでも同じことなのだ。

ワングルでも、プロ野球でも、会社の中でも。2人以上で  
目的に向かつて行動や仕事をする場合に発生する不協和音  
には注意深く目を向け、問題点を徹底して掘り下げ、た  
きあい、納得して再び方向を同じにして進んでいく。

これは普遍的で、いつの時代も変わらない。簡単なこと  
ようだが、複雑で骨の折れる仕事だ。私も学生時代のこの  
経験を生かすよう常々、努力している。

こんなことを「略」は、10年ぶりに思い出させてくれた。  
素晴らしい思い出が一杯詰まっているこの本を、みんな  
今後も大切に育てていただきたいと念じています。



## ワングルの後輩へ

69期 宮原照男

大学生活を通して、まがりなりにもやったものと云えば  
ワンダーフォーゲル部に在籍していたことと、少々遊んだ  
ことぐらいです。

現在、山登りもせず、遊びもせず、日夜(?)商売人(米穀店)として努力致しております。この部に入った時から最後までやめずに頑張っておりました。この部に入った時から、  
してやってきました。一年、二年の間はその決意がたく、  
しかし三年、四年になるにしたがって何かわからなくな  
てきました。

現役時代に「ワングルとは」、「山岳部との違い」など  
と楽しい学生生活を過ごさせていただきました。私も遅ま  
きながら社会的に米屋の存在価値について考えてみます。  
君達もワングルについて、よい思い出になる様に、大いに  
議論して下さい。



# 無題

70期 山本淳 一

つい仕事の忙しさに潰されていたことと、生来の筆不精の為に、なかなかペンを取る勇気が湧いてきませんでした。が、それでもとおっしゃる後輩達の熱意に頭をたたかれた思いでペンを取りました。

私にとって山というものは筆舌につくしがたく、幼稚な表現力しかもたない私にとっては、その十分の一や百分の一でも表すのが難しい位です。しかし、今の私の心のすべては、山によって形づくられたといっても過言ではないと思います。山を知る前から山を登り終えた卒業を通して、僅かながらの自己の内部では意識革命はあったものの、ひ弱な自分というものから、とうとう抜け出すことはできなかったような気がします。一年の時、レンガボッサでそのレンガの重さに負けて、人知れずそのレンガを捨てた自分、それがバテて正直に名のりのできなかつた自分、又、二年になり自分の体力のなさをずるさでカバーしようとした自分、又、三年になり自己の存在感のなさに勝手にクラブから離れて自分の専門に逃げこんだ自分、こんな自分ばかりの四年間で自分に自分が何度となく嫌気がさし、

もう一度だけ自分をためしてみようと思うたびごとに挫折し、かえって自分を苦しめる結果となってしまうたものです。そんな時いつも頭に浮かんでくるのは、鼻水をたらし、手と足を地面につけながら登った仙丈岳です。必死の思いで、又、意識もほとんどないままに頂上に着いた時、ある先登からよく頑張ったといわれ止めどもなく流れたあの涙です。もし、あの時の止めどもなく流れた涙がなければ、私はクラブを続けていなかっただろうし、今の私の心のようにならなかつたような林の中のこもれびのように、やさしくやわらかな光を誰にでも限りなく投げかけたり、心ない人の中に踏みこじられても、自己の純粹さだけは失うまいとする忍耐力などは、心の片すみで忘れさられていたことでしょう。

又、私は山で一生の財産を手にすることができました。それは、何人かの素晴らしい仲間達で、一年に一回出会っては、過去の素晴らしき思い出ばかりでなく、将来に対する希望などを短い時間の中で語り合っています。それこそ、人間の極限の中で知り合ったので言葉などは無用に思えます。あるのはお互いを気づかうやさしさだけです。しかし、このようになるまでにはそれこそ大変でした。一年の時は、相手が先にバテることを願い、二年では、相手より少しで、山に対する知識を吸収する為に競争したり、又三年にな

ると、自己の主義主張を通そうとして気まづく喧嘩状態になつて、相手の顔をみるのも腹立たしく、自然と部屋から足が遠のいたりしたものでした。しかし、お互い問題があると、すぐ集まつて真剣にそれを考え、何とか解決策を見つけていったものですが、それでも一年の時、クラブの雰囲気に負けて何人かは私達から離れて行きました。涙で知り会つた仲間なので、何となくすぐ私の心の中で、これだけはなくしていかなくてはと思つたりしたものでした。本当に、この一年の時は今から思い返しても苦しみの連続でした。山に金を出して行つても景色を見る余裕などはまるでなく、苦しみしかないような合宿の連続でした。その中でも特に私の心に残っているものは、南アルプスに行つた合宿でした。私達一年は、40kg以上の荷物をもたされ、私などは初日からバテと涙の連続でした。一度などは石でつまづいたことや、バカ尾根で7〜8時間、日の当たらないう所をもぐらのように、涙だらけになり顔も衣服も見分けがつかなくなり、その上顔ときたら倒木で傷つけ血だらけになり、その血の上に泥がついたようになったことや、北岳の稜線で水をくみに下におり、5・6時間大鍋を手にかかえたままふらふらになりながらもどつてきたことが、今だに断片的に心に浮かんできます。そんなつらい合宿でも、特にしてやつたりと今だに、にやつと笑いがこぼれる出来

事がひとつあります。それは、二年、三年が大キジを並んでうつていると、なんとそこに短大の女学生の、一団が近づいてきたのです。私は、責任上知らせようと思いましたが、一年生の苦しめられている立場から知らん顔をきめました。結果は……。

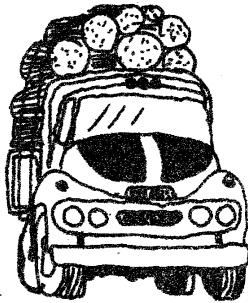
このように苦しいことばかりの連続でしたが、テントの外をのぞくと雲海の中に、朝日のあつた富士の景色や、お花畑の中の浅い湖の中に写つたトムラウシ（大雪山系）の姿や、私達を圧倒してしまひそうな位鋭くそびえたつた山々の姿、すいこまれていきそうな位深い谷、あるいは川を渡渉する時、向岸にクツを投げたつもりが、川にその靴を食べられた友の顔、一年の時、唯一の自由時間になる大キジでの同級生との雑談、三年の時、十勝岳（大雪山系）に登っている、登っていると思ひこんでルートを進んでいくと、結果的には、一番下に降りてしまつた自分の地図読み甘さなど……。

こういつたすべての経験をさせてくれた両親や、山の素晴らしさを手にとつて教えてくれた先輩方や、色々な相談のつてくれ、時にはきびしいはげましなどを与えてくれた同級生達に、今は感謝の念でいっぱいです。こういつた暖かい人々に恵まれた私は、本当に幸せであり、この暖かさ、何よりもかけがえのないものだと思つていきます。西

南ワンゲルの長い歴史の中で、今年はひとつの区ぎり目と  
のこと、本当におめでとうございます。これは、クラブを  
創立してくれた先輩、そのクラブを大事に大事に育て、次  
の世代へと手渡していっ、た人々の目にみえない努力のお陰  
で、このようにクラブが発展していっただんだと思えます。

どうぞ、これからも永い発展をしますように心からお祈  
りします。

どうぞ、後輩の皆様、クラブを大切に育てていって下さ  
い。それでは、西南のアホウ鳥が大きく羽ばたきますよう  
に。



## 日本縦断北海道パート

71期 増 永 憲 正

旭川から稚内までのコースを三人でひたすら歩きに歩い  
た記憶が今なお強烈に脳裏に焼きついています。あるとき  
は水平線上の国道をあるときは熊が出そうな小路をそして  
ゴール手前の砂浜をファイト・ファイトと連呼しながら頑  
張りながらも遠くへ浮かぶ利尻富士の雄大な姿をハマナス  
の花をよく覚えてます。一日一日を頑張り通せたのも終わ  
った時に飲むあの水のおいしさでした。確かポリタン半分  
は「ゴクン・ゴクン」と一気に飲んでいました。一番いや  
な時は朝起きるけだるさでした。三百三十キロを歩き通し  
た自信は社会に出ても貴重な体験として生きているよう  
です。

やはりワンゲルの最大の魅力は長期間、寝食を共にする  
人と人のつながりだったと思います。極限の状態で人間を  
見れることも知れません。私の青春の大部分を費やした  
ワンゲルも今なお現役の方々の絶えまない連絡にはいつも  
嬉しさでいっぱいです。

御無沙汰ばかりして申し訳ありません。S・W・Vの  
繁栄を心から御祈り申し上げます。

# 我 いまだ現役！

71期 中 村 慎 一

時の過ぎゆくのは早いものである。私が西南学院、いやワンダーフォーゲル部を卒業して以来、もうすでに八年にもなるうとしている。というのは、私の学生生活のほとんどがワンダーフォーゲルを中心に動いていた。

今、目を静かに閉じると、大雪、アルプス、祖母、久住、筑紫山系の峰々、シマリス、ニッコウキスゲ、雷鳥、そして、共に歩いた山仲間の笑顔がめくるめく、あたかも昨日の出来事のようにまぶたに写る。

現在、私は仕事上でも多忙であり、日曜日でも出勤している状況であるが、(しかし、麻雀と酒を飲む時間はある。) 週に三回はトレーニングを欠かさない。このようにして、これから先いつでも登れるように備えているのである。これはまた、夢のまた夢のばかばかしくもおろかな事であるが、昔と同じメンバーで、同じように若返り、同じような山行がしたいなぞと思っているのである。

卒業して以来、毎夏、七二期生や福岡近在の者と連絡をとりあって、久住山行を催している。今年の夏も久住の山頂に集合した。中には、山川のように美人で気のいい奥さん

と、可愛らしくてチャールミングな二人の娘さんを同伴していたのもいたが、その他のほとんどの連中(高丘、原田、石田、野田)は、嫁さんのきてがないので、しかたなく一人できていた。その晩は、久々に星を仰ぎ、盃をかさねながら清々しい歌を心ゆくまで合唱した。

その中で、やはり、「海女の子供」が、一番のついていたようである。合唱を終えてその余韻にひたっていた時、隣の暗がりですり込みをしてきた静かで奥ゆかしい一人の山男から拍手があった。

## 山の想い出

72期 三 苦 達 久

山の想い出は数多い。その中のいくつかを書いてみたい。かけだしの頃の話。一時の気の迷いが出来心で山など全然興味がなかったにも係わらず、ワンゲルに入部した私は最初に連れて行かれたのが一・四バーワンでした。テント設置も終り、沢の水を使って食事の準備にかかりました。私は驚いたものです。「何て不潔な、水道の水を使わないなんて！」

少し慣れ親しんだ頃の話。一〜二年にかけて山はどこに登っても新鮮な感動を与えてくれた。たおやかな万年山、

九重の山並み、緑したたる中を鮮烈に流れる祖母の沢、初めて雪を踏んで登った宮ノ浦岳の冬、そしてその中で友との友情は信頼は深まり、今でも当時の山と友情は美しい思い出となってよみがえります。一年の夏合宿、北海道は利尻、40㍻近くの荷物をかついでの登りは相当にきつく私は完全にバテあがってしまっていた。その時同じ一年の藤が倒れ、二、三年の往復ビンタ、ドタ靴キックのいかにもなく気を失いかけていた。いや、ケイレンさえ起こしていた。哀れな一年は寄添いあつてコソコソ話、「アイツが死んだら合宿は中止になるぜ：」

岩登りを始めた頃の話。とにかく岩登りは面白かった。重たい荷物を必死になつて担いで歩くのよりは、はるかにスマートでカッコ良く、いささか女にモテそうな気がした。生死をかけた緊張感は、生きていくことの実感、生命の燃焼を感じさせた。岩登りに精進し自信満々であつた私は、あるグレンデを登っていたのです。オーバーハンクの途中で一瞬、記憶が途絶えた、そして彼方で人の叫びが聞こえた。「落ちたぞ」私は思わず叫び返した、「誰が落ちたぞヤ」しかし、それは声にならなかつた。あごと右手、左太腿部を骨折した私は全治半年の診断を受けた。そして、私も墮ちることを知つた。おまけに入院のおかげで後期試験を受けられず留年するハメとなつたのである。

続いて墮落の話。明星山「みょうじ」と読む糸魚川の近くにある石灰岩の大岩壁です。連続登攀を目指し、荷は重たいが心は軽く、秋の日射しを浴びて快適に攀じていた。最後の難関、大オーバーハンクをまさに乗り越えようとしていた時、バキーンという音と共にハーケンが抜け空中に投げ出された。一瞬落ちながら考える、「下のハーケンで四メートル位の墮落で止まるはず」、しかし止まらない。再び思う。「チクショウ、バートナーの奴、昼寝をしていやがるのか、岩に当たつて大ケガでもしてみろ、締め殺してやる」。十メートル位の墮落で空中に大きく揺れ動きながら止まった。私は宙吊りのままバートナーに声をかけた「金沢で一杯、おごるよ！」

張り切っていた頃の話。とにかくやたら気合が入る頃はあるものです。谷川岳一ノ倉沢衝立岩雲稜ルートを12月下旬、猛風雪を突いて登り、第二ハンクの上で10センチ位の足場に立つたままビーバグした為に足は1度の凍傷になつてしまった、その一週間後、痛い足を引きずりながら、現在でも日本唯一の六級ルート、当時はずば抜けたものとして定評のあつた黒部奥鐘西壁岡山ルートの冬期初登を狙つて出かけたのです。我々は当時の常識を覆えて、アプローチを雪崩の巣、厳冬の黒部川にとつた。靴とズボンを脱いでブリーフ一枚で川の中を歩き、行き詰まると素足で雪

の中を腰までラッセルして再び川へ、の繰返して来々と目的地に着いたが壁を一目見ただけでシッポを巻いて逃げ出したくなる。壁は、オーバーハングには大氷柱を垂らし、スラブは雪とベルグラがベッタリ、すさまじい形相で我々を迎えてくれた。しかし、我々にはシッポが無いので登りにかかるといっても簡単に登らせてくれない。第一に宿泊地が悪い。常に当たれば死にそうなる氷のブロックが落ちる為、オーバーハングの下でしか泊まることができない。ブランコという道具を使って、まさに公園のブランコそのままに腰をかけて空中に揺れ動きながら酷寒の一夜を過ごす訳です。食事はお湯を沸すのが精一杯、寝袋は当然使えない。体はちぎれそうに痛いし、足はとうに感覚がない。絶えず胴震いしながら、それでも疲れも手伝ってウトウトでもしようものなら、仲間がねたんですぐ突き起すのです。寒さと仲間との罵り合いも二晩過すとさすがに限界が来て、三日目、あまりにも難しい壁に腹が立つて「チクショウ、殺すならサア殺せ」と聞きなおり滅茶苦茶に登って、マア何とか登壁し、下降が今思い出しても身振いする。夜間のヘッドランプなしという劇的な懸垂下降15、16ピッチを普段の生活態度が良いせいでしょう、幸運の連続、麻雀なら連続役満という感じで切り抜け無事降り着いたのです。が、その時、三日目を登りながら岩登りって面白いなと思

ったのが印象的でした。

忘れ物の話。山では何か必ず忘れものをするもんですが、これは忘れものが少し多かつた時の話です。北アルプスの錫杖岳前衛フェースアルンゼという所に二月初旬出かけたのですが、パートナーの話ではラッセルしても半日位で壁の基部まで行けると言うのが、別に怠けた訳でもないのに全んど一日かかってやっと着いたのです。夕闇せまる頃、壁の下でビバグすればいいのに何となく登り出して、1ピッチ(40m)上で氷を削ってビバグすることにしました。です。ツェルトをかぶって、ほつと落ち着き、さてコーヒーでもと思ったところ、お互いにコンロを持って来ておりません。いや、食糧さえ持って来いていないのです。厳冬の北アルプスというのに冗談じゃないぜとお互いブツブツ言いながら、水も飲めず寝ることにしたのですが私はザックを見てビツクリ、寝袋も持って来ていないのです。寝袋を広げようとしているパートナーを見て私は言いました。「オレは今日、ビバグの練習の為寝袋は使わんぜ」彼も行き掛り上、「オレもそうしよう」お互い寒い晩でしたが、私は何故か満足でした。翌日は快晴、私は快調に登りました。パートナーは、アイゼンを落して不調でした。最後にオンナの話。その1。ネパールはカトマンズ山から降りて来ての話。隊が解散して、またカトマンズにゴロ

ゴロしていたのです。普段は金が無いので安ホテルの大部屋にいたのですが、何故かその日は連れがあつて当然に奮発して個室へ。彼はその頃、電気をつけてするのが趣味だとかで裸電球をつけっぱなしのままです。努めておられますと、ちようどその姿勢での目の高さに穴が2つあつたそうです。その穴から目玉が2つ光っております。彼はあわてずウイソクしますと目玉が1つ穴を譲ってくれました。そこから覗きますと隣部屋のベットが下に見えます。そこでは矢張り彼の部屋と同じ光景が展開していたそうで、彼は片目で覗き片目で目標を見ながら無事、努めを果たしたそうです。

隣人は声の調子からしてイタリア人であつたと彼は主張しております。尚、穴の角度の関係からベッドでの全貌は把握しかねたと残念がっております。

その2。バキスタンの人喰い山ナンがパッパット(8125m)のディアミール壁を登りに行つて失敗しての帰り、彼はある村で現地人と仲良くなりました。それで話のついでに日本からはるばる持参したヌード写真を彼らに見せますと、何しろ女は肌はおるか人前に顔も見せない回数のお困柄、驚愕して喜びました。その時の会話、「日本人の女は何時も裸なのか?」、彼、「ソウダ、日本人の女は何時もポインポインヨ!」バキスタン人の目が喜びに輝きます。「ヨシ、俺は何年かかつても金を貯めて日本に行くゾ

!」彼はその男に貯蓄の目標と喜びを与えたのです。引き続きその男は、ヌード写真を一晚貸してくれと頼みました。彼は、その男に翌日、次の村に案内してもらつてもいいのです。出発が早いのでどうなるか結果が分かっていた彼は断りました。しかし、懇願する男に折れ、出発時間だけは守ってくれと頼んで貸したのですが、当然、その男がフラフラしながらやつて来たのは翌日の昼過ぎでした。尚、そのヌード写真の一枚は日本人は彼が最初で最後であろうと思われる村に家宝として日夜、いや夜だけ役立っているはずです。

最後に。私は何故、山に魅かれるのだろうか。登攀、そこには生と死が隣合せの緊張感が続く、それは人為的に作り出した限界状況である。異常な意志の集中感、日常の環境や生活の中では意識することもない感覚がある。その中に私は肉体と意志をもつて生きていることの実感、精神の自由な揺りを感じる。それは一瞬のキラメキかもしれないが、自分の存在感を思う。雄大な自然の描く広大な絵に見とれ、ただ訳もなく空白の時を過す。無限に広いとも思われる空間の中に溶け込み、永遠の時の流れを感じる時、社会の秩序や制約から解放された自由な私を見る。青臭い一笑に付されるかも知れない。社会の繁雑な生活の中に埋没し自分の殻に閉じこもり平安な日々を送る時、私の山



は本当の想い出となるでしょう。

## 山 女

72 期 原 田 真 澄

「山女」このタイトルを見てこの頁を開いた人には、誠に申し分けないが、私は山の女について書くつもりはさらさらない。もっとも私自身、山の女に対しても縁がないせいかもしれないが……。

さて、この「山女」はヤマオンナではなくヤマメと読む。女性のことではなく魚の話なのである。彼女のことを簡単に紹介しておこう。彼女は都会の喧噪を嫌い山の奥深い溪谷に棲んでいる。サケやイワナと親類筋にあたる。サケは溪で生まれ海に下って大きくなり、また生まれた川にもどって産卵するという不思議な習性をもっている。彼女ヤマメは何かの原因で海に下れなくなり淡水にとどまっているもので、降海するものはサクラマスと呼ばれてかなり大きく成長する。

私と彼女との出会はずい分昔になる。彼女に逢いたいという想いは、川釣りを始めたときから想い続けていた。でもなかなか実現しなかった。ワングルに入部してからも、その想いは消えることはなかった。彼女に逢いたくて一年

生の時北海道で合宿が行なわれたので、終了後釣りバーワンを計画し実行したことがあった。場所は人跡未踏の地とまではいかないが、知床半島北部のルサ川だったと思う。釣道具等は全て網走駅留にしておき、合宿終了後、勇んで一年生同志五人だけで知床に向かった。釣り登る途中菅林署の人から、「熊に気をつけなさいよ。」と言われても、耳をかさなかったというよりピンとこなかったたのであろう、さして気にならなかった。餌は彼女等の好物のいくら（さけの卵）をつけて流してみたが、いっこうに当りはなかった。やむなく川虫を取って、それで流すと飛びついてきた。あとは入れ食い状態だ。飽くほど釣れた。焚火を囲み、くしざしの塩焼にして食った。実にうまかった。食っても食っても食いきれなかった。それで味噌漬けにして持って帰った。しかし、彼女はヤマメではなかった。北海道特産のオシロコヤという魚だった。そのことはだいぶ後から知った。ワングル生活の中で釣りバーワンを計画したのは、これが最初で最後だった。

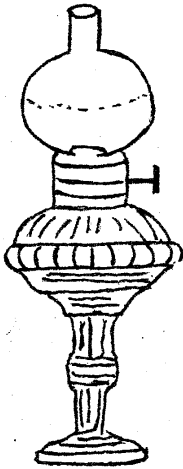
山へはずいぶん登った。想い出に残る山行も数々あるが、とり分け溪谷が好きになった。

私は汗かきである。特異体質かと思うほど汗が出る。そうすると必然的に水が欲しくなる。恥ずかしい話だが、Pににかくれて水をしかも田んぼの水さえ飲んだことがある。

水とまちがえガソリンを飲んだこともある。溪谷が好きになつたのも、これらのことが起因しているのかも知れない。溪谷にいと実心がなごむ。何とも言えない安心感が漂つてくる。緑々としたエメラルド色した淵を見ているだけでいい。そこにヤマメがいる。

水面に湧きたつ朝靄の中、まだ小鳥も鳴き出さない。身もひきしまる寒さでのヤマメとの対話に我を忘れる。

今は十月、ヤマメは産卵期を迎え盛んに就餌するが、終わると体力を使い果たしやせおとろえて、体色も黒くサビてくる。そして、長くつらい冬をじっと耐える。この期間には禁漁となり、我々も彼女等を見守つてやらねばならない。解禁になる春先の溪へと思いを馳せ、彼女にめぐり縫えることを夢みつつ筆をおく。



## 燃える青春

— 関西合Wの思い出 —

72期 高 丘 素 行

SWVがとうとう20周年を迎えた。長いようで短い20年我々はちょうどその中間の世代にあたる。創立当時の野武士的な精神がちよっぴり残っている頃であった。65期、69期の大先輩やすぐ上の上級生と接すると、その迫力に圧倒されていたものである。我々72期はそんな時期に入部し、色々な面で成長していったと思う。友との交わり、山への憧れ、苦しい練習……。練習中のボッカの時「このボッカが終つたら絶対、ワングルをやめて河鹿ギターに入部しよう」と思っていたのが、終了後の鍋の中のおつかき永にだまされて、知らず知らず居残っていたようである。まるでクモの糸にからまっていく哀れな昆虫みたいなものであった。段々と生活も変わっていった。

入部当初は、まず授業を受け、休み時間か、休講の時、部室に行っていたのが、5月、6月頃になると、まず部室に行き、そのまま、午後までギターで歌ったり、ゲームをしたりして過ごし、夕方頃練習をし、そして先輩にたかっ

て「喫茶ボンコアン」、パチンコをし(当時はまだ「麻雀」という世界一面白いゲームを知らなかった)、一年の下宿している奴の所で、「ワンゲル論」や「人生論」を顔を見せ、真赤にして叫ぶように議論していたのである。

部屋に立っていると、(当時は人数が多く、一年生は、椅子に座れる身分ではなかった。)、いろいろな先輩の面白い顔を見ているだけで飽きず、結局、「授業」という二文字は完全に頭の中から飛んで、回って回る状態であった。後々になって考えても、一年生の頃は最高に面白かった。すぐにカッコつけたがる二年生。生活感漂う三年生。大人のムード満点の四年生。初めは「どこのオジサンかいな？」と思った五年生。特に四年のメッチェンの先輩は、どこか妖艶なムード、やさしい年上のお姉サマ的雰囲気話しかけてこられ、我々純情な一年生が、一通り、夏、春の合宿を経て、愛後の階段も口笛吹きながら登るようになって、先輩が入部する頃になると段々生意気になり、世襲のように「カッコウ」をつけたがるようになってくるのである。合宿や、練習でも自分が他人よりも目立たないのが気に入らないようになり、それぞれ、他人とは違った分野で活躍するようになってくる。「ランニングでは他の二年には負けん!」とか「うんにゃ、俺はボッカでは一番!」とか、「地図読みでは俺!」とか「めし炊きは俺にまかせ

エノ」、更にエスカレートして、全然関係ない分野でも、頑張る奴が出てくる。「俺は歴代の記録を更新し、ついに食器八杯の飯を食った。」とか「俺は去年の十月から今年の夏まで風呂に入った事がない!尚、この記録は現在もまだ続行中である!」とか「やとガソリンをストリートで飲む事に成功!」とか、まあ、思えばくだらぬ事を一生懸命にやっていたもんだ。まさに「心意気は天を突く」の通り、その勢いは留まる所を知らなかった。そのように皆、目立ちたがっていた頃、関西合Wの話があり、九州のワンゲルの代表として、S W V が参加する事になったのである。メンバーは、三年の引卒者として、これ程、目立ちたがっている人はない、という有田重則氏。当時、彼は「西南のアリタ」として、その名は全九州のワンダラー達から「恐怖のアリタ」の別名通り、恐れられ、敬遠されており、まさに我々の統卒者としてピットマンコ存在であった。氏の場合、「西南のアリタ」としての、関西への華々しいデビュー戦でもあり、その張り切りようは、まさに「ハタチの朝立ち」であった。さて、その有田氏に引き連れられる我々は、まず、次期主将の地位を不動のものにした山川信夫氏。苦味走ったその風情がたまらないと、短大のメッチェンがおおいに騒いでいるという彼(昨日、彼の家で焼肉を御馳走になったので……)次に、とぼけ眼鏡の

江島栄二郎氏。長い足、長い体、長い手、実にカッコ良い。

(人に言わせると「まのびしている」と言うが：。)

次に、西利正氏、彼は「有田氏亡き後は彼ノ」と言われる程、その個性は強く、個性が強すぎるゆえに、他人からは「アホ」とか「バカ」とか「単純」とか言われていた。

(カワイソー!) 次は、原田真澄氏。彼は、実にワンゲル史上、初めて「ガソリンのぐい飲み」に成功した貴重なワンダラーである。その人柄は、まさに温厚というか素朴というか堅実というか、ノロマというか、ジレッタイというか、とにかくイライラする男である。(何のこっちゃ?)

最後に私。当時、S W V においては、弟の私が気力・体力共に充実の真最中である二年生、兄の方は、フンベツ盛り、向学心にあふれた五年生であった。まさに高丘兄弟の独壇場であり、「名家の血筋」が改めて再認識されている時であった。以上、総勢6名、二〇〇二一才の若者達は、九六九年十月吉日、例によって「ガンバツてこいよ」「根性で行けよ」「たっぷりクソして来いよ」他々様々な激励を差し入れとして、一路大山へと出発したのであった。尚、この文章は、一九七九年七月に書いたものであるので、日時、場所、その他、実際とは多少くい違っている事もありうる。なので十年の長い年月に免じて、お許し願いたい次第である。実際の所、今、一生懸命、昔のパンツや写真をひっぱり出

して、記憶を掘り起している所なのである。

山陰本線のナントカという駅で降り、合W用の専用バスに乗り、大山の麓の鏡ヶ成キャンブ場に着いた。まあ、なんと華やかな色彩ノ赤、黄、青、黒、橙、茶、色んな制服を着た若者達が大勢、大勢。開会式が始まり、実行委員のキビキビした挨拶。ちよっと軍隊調という感じがしないでもないが。盛んに「ゴツァンノ」という言葉が飛び出していた。これは関西のワンダラーの流行らしい。さて、いよいよパート分け。我々の共通の思いは唯一つ。「タノムから自分のパートに美人がいますように：。」期待と不安に包まれながら、我々はパートへ。さて、ここで話は変わるが、結局、最後には、原田氏が、京都美人とネンゴロになり、「おつき合い」をしていたらしいが、又又、結局はフられたらしい。氏は、「俺がフツたのだノ」と言い張り、十年後の今も、手紙と、写真をさも重要な証拠でもあるかのごとく、我々の前に並べて力説しておられるのを後記談として付け加えておこう。(相手の女の子も今は29才になっいて、誰かのオカミサンにでもなつとるのも知らず：)「過ぎ去った過去は美しく、現実には厳しいートルストイ」尚、原田氏は、今年30才になるが、今だに独身である。話がとんだ方向に進んだが：。私もいそいそと自分のパートへ行つて、ニヤリノ、いました、いました、カワイ子

ちゃんが。彼女は、帝塚山女学院の短大のメッチェンで、最近のタレントでいうならば、石野真子風の、実においしそりなお嬢さんであった。私は早速、「東大ワングルの高丘です、コンニチワ！」と自己紹介をしようと思つた矢先にさつと割り込んで真子ちゃんと話をし始めた男がいた。実に凶々しい思である。その後の自己紹介で、このSWVの八十一期の都原によく似た下品な男は、大阪電通大のナントカカントカという事がわかつた。私と、この都原ヤロウは、思わず目線が縫い相方からの激しい闘争心が真中でぶつかり、火花を散らしたのであつた。曰く、「この九州の田舎WVが！」「なんか、この標準語も喋りきらん言語障害男が！」私のバートのPLや三年、四年、その他実行委員他がテントの中に居たのに、十年経つとまったく思ひ出せない。我がバートは、このカワイイ真子チャンと、下品な都原ヤロウとそれに私の3人を中心とすすめられ、いき、3人で、ガンガン騒いだ事だけが妙に心に残つてゐる。合Wの一泊二日は、雨になり、楽しみにしていた大山登山は、ついに出来ず、なんと、ずっとゲームばかりをしていたのである。真子チャンの隣りには私が座り、チャツと向こうを見ると、ちゃんとあの都原ヤロウも真子チャンの隣りに座つてニヤニヤ笑つてゐる。何とスケベな男であらうか。何やかやとゲームをし、夜になつて、私の最も

恐れていた「ディスクッション」が始まつた。短大のメッチェンが「二年しかないので充分なWV活動が出来ない」と言つてゐた。更には、「政治活動とワングル活動は共通か？」とか「現在の活動状況は？」とか。質問が来た。「九州を代表して来られた西南大の場合はどうですか？」と聞かれ、「えーっ、私達は、まだ創立して十年しが経つていませんので、歴史のある関西のWVの活動をしっかり見て帰りたいと思います。」と一応、社交辞礼を述べておいた。内心、満々たる自信を秘めつつ……。やつとミーティングが終わり、またまた、ゲームをやり、ついに徹夜である。朝になり、真赤な目をしつつバート解散。真子チャンが、私に握手を求めつつ、「お手紙、ちょうだいネ。」と言つたつ。私も、「今夜、君の夢の中で逢おうネ。」と言つておいた。(何しろ十年前の事なので、そんな事もあつたかいな？という気持ちで……。)

閉会式が終り、いつものあの見るのも飽き飽きした顔に逢つた。一泊二日の間、逢わなかつたのに妙に懐しい。なぜか皆、大阪弁になつてゐる。有田氏などは、完全に「関西のアリタ」になつてゐる。流石である。完全な〇〇としか言ひようがない。

段々と博多弁に戻りつつ、米子駅のそばの映画館で、鶴田浩二、村田英雄、北島三郎主演の「桜盃仁義」を観た。

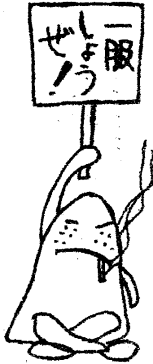
非常に泣かせる映画で、映画館から出ると皆、真赤な目をしていた。山川氏は例によつて顔をしかめながら涙を拭いている。西氏と有田氏は、館内でオイオイと泣いていた。

「仁侠に生きる男」の影響か、館を出る時は皆少し、肩をいからせていたみたいである。背中に寂しさを出そうとしよう。有田氏が「皆アー、故郷、博多に帰ろうぜ！」と一声かけた。（菅原文太風に……）

五人の学生さんは、ザックを肩にひっかけて米子駅に向つて歩き出した。胸には来年の活動というでっかい夢をふくらませながら……。

〔追記〕

文章の中になりフイクションに近い形容があります。尚、映画館の中で私以したことをお詫び致します。尚、映画館の中で私以外の5人が泣いたことと、原田氏がフラレタ事は事実であります。



（完）

## 忘れていた山

73期 井上 加代子

一九七五年秋の暮れ、私はロンドン郊外を走るバスに乗っていた。バスはポブラ並木に沿って走っていた。朝からの雨はやみ、その日の最後の陽光が輝いていた。私は夕方のそよ風にポブラの梢が揺れ、沈みゆく夕日の中できらきら輝いているのを見た。その時自分がどんな気持ちでいたのかよくわからない。すると私の横にすわっていた四十がらみの日本人女性が誰にいうともなくつぶやいた。

「いつだったか山で沈む夕日を長い間、じっと見ていたことがあったわ。夕焼けがあんまりきれいだっただもんだから。私、どうしても動けなくて。どのくらいそこに居たのかわからない。友達が呼びに来てね。ぼんやりしている私に「一体どうしたの？」と云って——。」

そして彼女はため息ひとつして付け加えた。

「だめだなあ、私は、いつまでたつてもあまいわ。そのまま黙ってしまった彼女の、年にしては深いシワの刻まれた横顔をみつめたけれども何も云えなかった。そして彼女のつぶやきを聞いたその時、私の内にははつきり郊外の黄昏ゆく光の中のポブラの樹々が印象づけられたのを私

は感じた。と同時に、私の脳裏に浮かびあがってきたのは赤い赤い夕焼けに染まる日本の晩秋の山だった。(ああ、あの山、山の友だち……)

同じく、山で夕焼けをみていたら涙がこぼれてしまった。という友人を私は知っている。その話を聞いた時、何だかとても嬉しかった。彼女の純粋さが損われていないと思つて。いつまでもそんな彼女でいてほしいと心からそう思つた。

山とか、ワンゲル仲間とか、それらが与えてくれたものは何なのだろう。かつてよく一緒に歩いた友人と話す時、暗黙の了解とでもいっただものがお互いにあると感じる。殊更、口にしないで通じあう、わかっている何かがある。大学時代のワンゲル生活、それは長い人生においては、ほととの一時期の出来事。けれどそれは今日の私達の本質的なものをつくっているのかもしれないし、生活態度、人生観、心情、いろいろなものの基本となっているのかもしれない。たとえ一瞬であれ、それが完璧なる瞬間であるならば。

今の私の生活には、完璧なる瞬間の幸福というものもたらされることはめつたに無いというより、ほとんど無いといつてよい。(もつともつい最近、人生に対しては前向きな姿勢でいた方が楽だと思つたようになってきたから、この瞬間が訪れる機会は増えるかもしれないが、それはここ

ではしておくことにしよう) そうだ、たとえばあの頃の事に関して私の心に巣くう何かがあるとしたら——日々の喧騒、煩わしさの中に居たとしても、ゆらゆらと浮かぶ遠い記憶にふと頭をもたげさせる何かがあるとしたら、それはワンゲル時代の友人にもあることだろうか。

当時の日記を読み返してみた。

何もかもが、昨日のことのようによみがえってくる。何と恥にみちた日々だったろう。何という幼さだったろう、けれどこれがあの頃の私だ、これが私の全てだった。

今だつて私はとても未熟な人間であるのだけれど。

もう山に登ることもめつたになくなってしまった。(みんなはどうだろうか……)

先日、誘いを受けて市房に登った。友人の職場関係の集団の中に混じつた。

山里に降る星も、紅葉した樹々も、よくひらけた展望も、山に行くことは変ることない自然の美しさを与えてくれるだろうに、違つていた。つまりそこに居たのはワンゲル仲間ではなかつたから。具体的に細かいことを挙げて違いを説明しようとは思わない。ただ、あの人たちに解つてもらえただろうか。厳かに沈みゆく夕日を友と肩並べて心ゆくまで見つめている時の気持ち、一日の行動を終えて、テントの中でろうそくの灯を囲んで語りあう時の気持ち、

肩にくいこむキスリングの重さ、等々……。  
解ってもらえただろうか——。

“ああ、あの頃は良かったなあ”と想い出することができるのは、やはり確かに幸福な時代であったのだ。私は想い出に促われていたくはないけれど、そういう想い出を持ち得ることはとても大切なことだと思う。

これからの私、大したことは起こらないかもしれないし、けれどもひょっとしたら今までよりもっと素晴らしい青春（まだ……なのです）の日々が待ち受けているかもしれない（何しろ私は今、前向きなのです）。けれどワンゲルのごとは決して——忘却の彼方に去ることはないでしょう。願わくば、後輩の皆さん、ワンゲルを永遠の青春の場とすべく、生命を燃して下さい。

その山の名も

山のすがたも

山にふる雪のことも

わたしは忘れていました

その山に 雪がふる頃になって

あたらしい まぶしい朝がくる頃になって

わたしは思い出したのです  
やっぱり山にめぐり逢ったと

まいばん わたしは

凍った道や 長靴のかかとや

通りすぎた あの林の思い出を

薪にくべ さまざまな炎にして

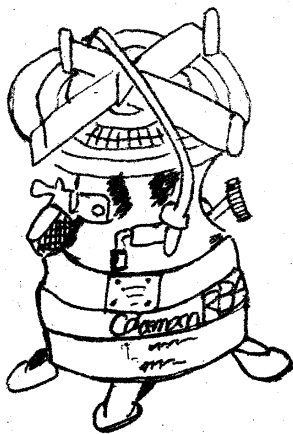
みつめてきたけれど

ながい間 忘れていたのです

その向こうに 山が佇んでいたことを

その山に 雪をふらすことを

（忘れていた山 岸田衿子作）





## パーワン報告書

73期 石田守幸

パーワン届

日時 昭和五十四年八月十三日〜十四日。

行程 九重山系で法華院温泉に最短コースであり、しかも高低のあまりないところ。

メンバー表

71期 中村慎一

72期 山川信夫夫妻、他子供二名

72期 原田真澄

72期 高丘素行

73期 石田守幸

75期 野田英作

決行条件

雨が降らないこと。昼は程好く暑くテン場にてビールのうまいこと。美人のメッチェンが来ていること。

パーワン報告書

決行当日は絶好の天候にて、雨男の異名を取る小生も皆

のほろくその非難を受ける心配もなくなり、心も軽ろく愛車である三菱ギャランスーパーデラックススペンツSSSを集合場所である牧の戸峠へ向けひた走る。エンジン快調にて予定時刻より一時間早く到着。廻りを見渡すとそこは北アルプスのお花畑と見惑うほどのメッチェンの一団。その方向をじつと見ているとその後より野田君が満足そうな顔をしてキジ場より出現。当方興奮しながら仕方なく声をかける。当の野田君はそういう事も全く意に解さず、いつもの元気そうな頑丈な体に微笑の法則とは程遠い笑い顔で近づいて来た。ヨウノヨウノの簡単な挨拶を済ませ、我愛車の中で皆の到着を待つ。ハードな運転をして来たため早くも腹が減ってきたので自分のは後に残し野田君のにぎりめしを先に食べる。やがて中村先輩が麻雀疲れの顔で到着。最近の平和マンション雀荘における戦績などを話している。と山川ファミリーを先頭に原田先輩、高丘先輩がいつもの顔で到着。山川家で準備した食糧や原田先輩、高丘先輩が準備した装備を醜い争いの中で全員に分配し、やっと出発する。中村先輩の軽やかな足どりに比べ、小生はゴルフで鍛えてあるはずの重い足を引きずりながら沓掛へと向う。原田先輩はと見ると早くも滝の汗で地面が濡れる程に落としながら続いてくる。何度も何度も上を見上げながらやつと沓掛へたどり着き、現役の時とは程遠い豪華版にて昼食。

長い休み時間の後、行き交うメッセンに疲れを忘れ久住分かれへ到着。ザツクの番をしたかつたが久住山頂での記念撮影の主役が居なくなると困ると反省し山川さんちの澄江ちゃんに手をひかれ、スローペースによるピストンを済ませる。久住分かれから北千里へ下り一気に法華院へと思つたがそれは昔の話。ガクガクする膝を笑顔に隠し、冷えたビールの話などしながら夕闇せまる法華院へ降りる。取るものも取りあえずビールを五本購入。一気に飲み干すこの甘さ。昼の残りのひじきなどつまみながらも三本。夕飯は昔より言い伝えのキジ飯。高丘先輩の音頭にて年寄り山へ芝刈りに若者は川へ水汲みに行く。先輩諸氏の作る飯盒飯に遅れは取らじと小生と野田君は山小屋にてカレーを作る。カレー粉が少なくて水っぽいところは塩・コシ・Iを使い往年の腕にて完成。御飯の歌もどかしく武器を取る。星空のもとに角瓶二本。かの有名な久住高原、ミネラルウォーターの原産地。水割りの旨さもまた格別。二杯三杯と重ねるうちに当然山の歌。レパトリリーの広い高丘先輩・原田先輩に引きずられながら忘れた歌はサラムをほらばりながら聞きほれる。風呂場の湯を使う音に振り返ればそこは女風呂。ぼんやりながらもシルエット。山川先輩の奥さんの目を気にしつつも、ちよつと振り返りつつ杯を重ねる。

普断の日には決してないようを時間に目を覚す。外は朝霧の中に沈む坊ガツル。二日酔いの目をこすりながら小屋の前に佇む。坊ガツルでは一人二人とテントの側を動き出す。やがて一筋、朝餉の煙が立ち昇る。二つ三つ。朝霧もいつの間にか消えてゆき三俣の山頂を朝日が照らし出す。赤茶けた三俣の斜面を赤と黒とに分けた一つの線が少しづつ裾野に降りて来た時、突然大船の稜線を越えて来た光が目を射る。その光で坊ケツル一帯は一挙に朝を迎える。

我パーティーの皆もいそいそと起き出し朝の仕度。そこには現役当時のあの忙しさはもうない。原田先輩はゆつくりと煙草に火を着け、山川先輩は子供を操す。痛む足を引きずりながら朝飯の準備。昨晚残った飯盒一本と新しく飯盒一本炊く。冷えた飯より味噌汁にぶち込んで雑炊にしようという声に賛同し一本は雑炊にする。食わなくてもパテる心配がないということは何と愉快な事であるうか。思い思いに朝食にはしを着け子供の食べる姿を見て笑いこぼげる。長い準備の末、昨日通った道を北千里へ向け出発。一本取るごとにポリタンを回し飲み。北千里へ出てほつと一息。ポイスカウトらしき少年の一团が通り過ぎるのを見つと見やる。トポトボと足を運びやつとスガモリ。ここから牧ノ戸峠まではしんどいなと言ひ話の時、中村先輩と野田君が長者原まで車を廻して来ようと言ひ勇氣ある発言。

皆感謝しながら後姿を見送る。二人が久住分かれから西千里を経て牧ノ戸峠から車を廻して来る間、こちらはスガモリ小屋でゆつくりと休憩をさせていた。ここでもまた缶ビールを講入。小生は高丘先輩の飲み残した分もいただき約三本。いい気分にてちよつと昼寝としゃれこむ。暑い日射しの中で安眠ともならず子供の遊びに仲間入り。思はず時間が過ぎ、そそくさとカレ場を長者原へと下る。酔いも手伝つてか、カレ場に苦戦。やつとの思いで長者原に到着。そこにはもう中村先輩と野田君の皆を待ちわびた顔。もう一度牧の戸峠から残した車を廻送して一路福岡へ。途中でどこで昼飯を食べようかという話になり、高丘先輩が豊後中村駅前の大衆食堂にうまい豚汁があるという発言。小生も昔食べたことを思い出しそれに賛同。ドンブリ飯に豚汁、それに野菜いためと冷奴。おかずが全部出る前におかわり一回。大満足にて帰途に着く。

同行の皆さん、どうもお世話になりました。また来年もよろしく御願ひします。

## 西 新 町

— この非権威的な町 —

74期 伊 藤 信 利

私が福岡を語る時、まず最初にあげる名前は、この町である。高校を除いてこの町に学び、八年間この町で生活したわけであるから当然のことかも知れない、しかし、そういう思い出のようなものに捕われず、この町の持つ、「押しつけのないイメージ」、それでいて、どこかブライドのあるところが好きで、この町の名前を口に出してしまふ。

東京に住んで五年、通勤電車の混雑の中、揺られながら東京と福岡の比較などをやってみる。福岡という町は、抽象的で且つ得体の知れない東京の文化を否定することが出来る。及いは、否定している数少ない町の一つではないのかと思う。しかし一方、それを住民レベルで捕えると、極めて独善的という傾向を持つ面に於いて共通している。博多っ子、江戸っ子に代表される彼等は、歴史的な誇りでも持っているせいであろうか、地域社会での文化の担い手と自負しているのであるうか、威文高は自己主張が目について仕方がない、たとえば、彼等の間では、「祭り」が極め

て高い地位を占めている。

「自分達は祭りが好きだ、祭りはルールなしのバラダイスだ」、などと極めて自己中心的な論理を持って正当化し行動する。このことは、第三者から見ると、甚、迷惑なことで、そこに許容の入る余地はないと考える。これが、博多っ子、江戸っ子の持つ共通点であり、祭りのもつ華やかさと、その影にひそむ陰気さであると思う。又、互いに、共通し背反する側面を持つからこそ、福岡人は、東京の文化そのものを、否定し、咀嚼しようとしなかつたのかも知れない。

しかし、同じ福岡市の中で西新町については、威丈高さのかけらも感じられない、少なくとも、私は、この町の中から、他を否定し圧迫するようなムードを披み取ることはなかつたように思われる。あの野菜売りのおばさん達に、あの大通りの商店のおやじに、又そこを樂しげに歩く学生達に、權威、押し付けを感じることはなかつた。

このムードは又、西新町に「祭り」が根づかないことにも証明されるのではなからうか、同じ福岡ということで、私の子供の頃、「どんたく」や、「山笠」の真似馬を試みた愚か者が居るには居た。(おそらく祭りのもつ華やかさを商売に利用しようとしたのだろう)しかし、それは、ほんの数年で頓座したように記憶している。多分、旧来の

「祭り」が持つ權威性、陰気性が否定されたのであろう。最近になつても尚、西新町に祭りが復活した話は、聞いけません。

權威に対して決して決して、体を張って抵抗しようとはしないが、しかし、その權威を呑みこんで、いつのまにか、それを權威でなくしてしまふ。この非權威的な町西新を、我々西南学院関係者は、正當に評価し、このエネルギーを吸収していくべきであると思ふ。

「西新町」この町こそ日本中で一番好きな町であり、西南学院大学体育会ワンダーフォーゲル部とともに、我が青春のメルクマールであると断言出来る様な気がする。

募る!! 「西新町」愛好会 (仮称)

・ 参加資格 西新町を愛し、この町を憶しむ者

・ 参加者 74期 伊藤信利 他数名

76期 小河滋宏

・ 行事 例年十二月三十一日、午後九時より

西新町で酒を飲むこと。

その他、特典多数

## 遠く国・遠く山

74期 武川 敏治

機が大きく旋回を始めた。薄茶けた土壌に黄土色の建物  
が、マツチ箱のように見え始めた。カトマンズの町が目前  
に迫ってきた。日本を遠く離れ異国の地に来たという実感  
が湧きあがってきた。

我々、といつても私と田中の二人であるが、この計画に  
踏み出したのはつい一ヶ月程前のことであつた。もちろん、  
ヒマラヤへの瞳がれば、随分以前からのことであつたが、  
そのヒマラヤが、単なる瞳がれの対象としてではなく、  
実像として感じられるようになったのは、七十二期三苦さ  
んのお陰である。

三苦さんより、ヒマラヤの話、及びトレッキングに關す  
る資料、そして経費等のアドバイスを受け、最初にトレッ  
キングを実行しようと思ひ立ったのは、四年になった頃で  
あつた。

時期は十一月頃としたが、あまり具体化しないまま断消  
えになつてしまつた。

一旦は断念したものの、冬休みに入り、未練を捨てきれ  
ず、一人でも実行する決意をし、田中に電話をした。今度

は、あつけなく話がまとまつた。

まず、期日は、お互いの都合により二月十三日出発とし、  
約一ヶ月間とした。コースは、検討の結果、初めてという  
不安もあつたので、比較的距離の短い、モディコラ内院、  
アンナブルナベースキャンプまでとした。

準備期間は約一ヶ月、わずか二人のパーティーである。  
そう短い期間ではなかつた。装備類は、ほとんど借物であ  
つた。

当初、一番心配したのは、シェルバ、ポーターの手配、  
トレッキングビザ取得等の現地での渉外関係のことである、  
もちろん、二人共海外旅行など初めての経験であつた。

この点は、三苦さんに詳しく事情を聞き、現地の知人等  
紹介してもらつたお陰で、あまり心配せずに出発すること  
ができた。

また、航空券は、有田さんに依頼して、普通より安く手  
に入れることができた。

こうして、香港、バンコックを経由して、今、その第一  
歩をカトマンズの町に踏み出したのである。

まず、三苦さんの紹介による中国人に会いシェルバを紹  
介してもらひ、そして翌日、出入国管理事務所へ行きビザ  
延長及び、トレッキング許可証を申請した。書類が整う  
までの数日は、シェルバとのコース打合わせ、及び買出し、

そして、カトマンズの散策で過ごした。

この国は、実に貧富の差が激しい国である。浮浪児が、昼間は、物をいかに旅行者の後をつけ回し、夜は、ポロをまとい路上に寝ころがっている。しかし、平和な町でもある、夜中に一人、町を散歩しても全く心配しなかつた。ネオンサインはもちろん、看板さえも目につかぬ寝静まつた街の夜空に、星影だけがばかに印象的だつた。

許可証の取得に三日ばかりかかり、すべての準備が整つたのは、当地着後六日目の二月十九日であつた。

翌二十日、早朝のバスにて、トレッキング出発地ポカラにと向かつた。

所用時間、約十二時間、非常につらい一日であつた。何しろ、廃車寸前の、まるでベニヤ板で作つたようなバスに、通常二人掛けシートに三人掛けである。それでも指定席だ。満員の車内は、訳のわからない異臭が充満していた。

ポカラ、標高八七〇メートル、アンナプルナ山群がどっかりと横たわり、流石にヒマラヤの国という感じである。殊に、夕映えに、その頂きを紅く染めて輝く、マチャブチャレの雄姿には目を奪われた。

ポカラにてポーター二名を雇い、翌日よりキャラバン開始である。

一日平均、七時間程の行程である。アタック一つである

ので非常に快調である。道もよく整備されている。毎日快晴が続く。

いくつもの美しい村々を過ぎてゆく、どこからでもマチャブチャレの頂を望める。神仰の対象として神の山と崇められているのも肯つける。当時、登山禁止になつていた。四日目、この地方で、最も大きく美しい村、ガンドルンに入る。さすがに涼しくなってくる。マチャブチャレ、アンナプルナの白い巨峰が眼前に迫つてきた。畑の緑とのコントラストが美しい。

更に三日程、モディ・コーラ右岸沿いに山道を登り、ヒンコーの岩小屋に着いた。標高三三〇〇メートルである。こんな所でさえ、ポーターは、毛布一枚にくるまり外で夜を明かすのである。

もう、樹木も少ない。冷たい岩肌が我々を威嚇するかのよう覆い被さってくる。黒い岩肌を雪溪から一条の白い糸が描かれている。前方には、V字型に区切られた空に白い峰々が望まれる。モディコーラ内院である。

翌日は、二時間程歩き、内院入口手前の川原にテントを張る。雪男探険隊の二十数名の日本人と出会つた。

翌朝、ピストン。三時間程で内院に入る。モーレンの上をアンナプルナに向かう。実にすばらしい、しばし絶句。アンナプルナ、マチャブチャレ、グレイシャードーム、ヒ

ウンチェリ、テントピーク、すばらしい山々に囲まれ、最高の気分である。標高およそ三八〇〇メートル、雪の着かない鋭い岩壁が青空を引裂いている。雲が湧き、風が流れる。あまりにも荘大な為、各々の山が非常に小さく見える。時が悠然と過ぎてゆく、時間と空間のあまりにもスケールの違う世界がそこにあつた。

そして、五日後、後髪を引かれながらもポカラの町に帰り着いた。山は雲に閉ざされ顔を見せない。キャラバンもこれで終わった。

ポカラを発つ朝、地平線より上がった太陽に、マチャブチャレの秀峰が美しく輝いていた。



## 無 題

75期 岩 永 好 生

ワンダーフォーゲルというクラブに入部した時のことは今でもまだ、しっかりと憶えている。まだ部屋がグラウンの横の長屋にあつた頃、私は学生服に身を固め壊れかかつたランタンの吊るしてあるのを扉の入口にみとめながらガラガラッと戸を開けた。プーンと汗くさい臭いがまず鼻についたが、部屋の長椅子に座っているオッサンみたいな人達の目が一瞬、私に注がれ私は一番近くに居た人に「入部したいのですが」と小さい声でつぶやいた。その人が誰であつたかも憶えていないくらい緊張していたが、その日から4年間ワンゲルの部員として活動したのである。私が一年の時は学生運動の全盛期でもあり体育会という立場と各個人の意見の相違が随分と臨時部会で討論されたりもした。

しかし、何といつても様々の合宿を通じての山々の想い出が頭にしっかりと残っているのは言うまでもない。

この夏、私は幸いに元クラブの先輩、伊藤氏、後輩の山本君と南アルプスに行く機会を得た。何せ各々仕事の関係で地理的に離れているので連絡をとり合つて計画をたてる

のが大変であつたが何とかそれともまもり静岡で待ち合わせる事にした。計画は南ア・南部縦走という大プランとなつてゐた。皆が昔の体力を信じたうえでの事であつた。ここでその山行の詳細は割愛するが、その計画が途中で大幅に変更されたのは言うまでもないだろう。しかしそれとは別に昔の仲間との登山は実に楽しかつた。こうやって皆が気軽に山に出かけていけるのもワンゲルで4年間培われた経験と連帯感があるのだと思う。今年私は九重に8回位南北アルプスに1回ずつとよく山に登つた。もし私がワンゲル4年間に何を得たかと問われた時、今こうやって山に登つてゐる事だと言わずにいられない。



## 二十周年に

寄せて

76期 阿部和昭

楽しく又苦い経験も段々過去のものとなる時に若干の淋しさを感じます。二十年の道程のわずか四年間関つたにすぎない訳ですが、ワンダーフォーゲルという一つの行動・思考の流れは形を変えながらも持続し、過去から未来へと受け継がれてゆくものと信じています。

當時を振り返る時、凡人の悲しさでしようか、結果論的に、ああすれば良かった、こうすれば良かったで多いに悔いの残る事も有りますが、出来る範囲での努力の結果であれば、多少の自己満足を感じている事も否定出来ない様です。

スケールの大きさや、高度の洗練された技術とは残念ながら距離のある組織体であつたとは思いますが、人間の原点とも言える肉体と思考力を鍛練するに充分な場を提供してくれたと確信しています。自然の雄大さ、厳しさ、美しさもワンゲルを通して知る事が出来た大切なものです。

私は下宿生活をしていた関係上、四六時中、金欠病で食



費にもしばしば事欠いていたので装備を揃えるゆとりなどあろうはずもなく、先輩諸氏から譲り受けた年期の入った装備で間に合わせていたので結構物を大事に使う習慣も出来た様です。またアルバイトも効率よくという事で、入学後最初にやったのが、五年（四年）生と行つた朝から深夜までの土方で、以後築港通いで生計を立てるきつかけとなつたものです。ついでながら、先輩のテレビを質に入れて飲んだ酒は実に美味でした。

我々の年代は過去を振り返るにはまだ余りに若すぎます。変に郷愁で振り返る事は不安定な自分自身を露呈する事になり、現在ワンダーフォーゲル部に携っている学生にとつて迷惑な事かも知れません。それでも数年前、自らが主役であつたワンダーフォーゲルというクラブが現存し、今後とも活発に活動を続けてゆくであろう事に喜びを感じる共に、多くの先輩、後輩、友人との出会いは掛替のないものです。中途で去っていった者の数が多いだけに、最後まで共に頑張つた仲間に一層の親近感を持つのもかもしれません。強化合宿・合同ワンデリングの九重連峰・夏合宿のアルプス・雪の屋久島・八ヶ岳・石鎚山・パーワンの阿蘇・祖母・傾。どういふ訳か個々の山に今でも個定観念があり、自らの経験からのみ、その山を感じ規定してしまふ様です。今登ってみれば大いに違つた感情を抱くであろうとは思ひ

つつも自らの怠惰を恥じるばかり・・・ともあれ二十年から三十年と西南ワンゲルの大いなる発展を祈るものです。

## 二十周年に寄せて

77期 島 戸 豊

卒業して早くも三年の年月が過ぎようとしています。

山とは、ほとんど遠ざかつてしまつている生活です。しかし、今でも、近くの犬鳴山に目が向き、登つてみたいなあと思つている自分に気づいたり、車で遠出をしたとき、何となく緑の山々に目を奪われてしまいます。

生活の合い間合い間に、学生時代の山の生活が心に蘇つてきて、苦笑したり、景色を思い出したりしています。

山との関係が全然といつていい程なかつた私にとって、ワンゲルでの生活は強烈でありました。

入部した日、生の松原まで走らされて、西山氏と二人でトポトポ帰ってきたこと。入部して七、八日で、宝満歩荷でした。そのとき、倒れて草にしがみついて、「もう、イヤダ。」と、思いながら、起こされて、最後まで歩いたときの複雑な気持ちと、死ぬようなきつさ。人間というものは、本当にバテたときは、開き直つてしまうものだ、と、悟つたのでした。

秋の強化は、さんさん脅かされていたので予想はついていたものの、やはり、一日は私が一番遅れてバテにバテた。

二日目の朝の一本目は、やはりバテていたが、十防から玄海灘の絶景を見て、心が晴れ、自分でも信じられないようなヤケクソの力が出たことを思い出します。

三日目の朝、私の武器が見つかりませんでした。また、夕食でも見つかりませんでした。そして、寝る前にソックスを脱いだとき、ソックスの中から武器がでてきたではありませんかノ私は狐につつまれた気持ちでした。

どうしてソックスの中に武器が入ったのか？今でも疑問ですし、一日中、ソックスの中に入れてまま歩いてきたことがショックでした。やはり、一種の興奮状態にあったのだと思います。三日目は、三瀬峠まで、夜の十時ぐらいまで歩き通しました。何とも壮絶な強化でした。

一年のときは、苦しみばかりでしたが、二年になり、山での楽しみが出てきたようでした。本当に自然に愛着をもちはじめたのは、二年の夏合宿の南アルプスからだったと思います。小赤石を谷を挟んで臨んでいるとき、無限ということ。悠久ということを感じたのでした。何とすばらしかったことか！

ワンゲルでの思い出は尽きません。友人のこと、先輩、後輩諸氏のこと、一一〇キロのこと、単独行のこと、山の

厳しさ、自然のすばらしさ、費用稼ぎのバイトのこと、山の歌、下宿生活：：。セ。。

現在では、仕事に追われて、なかなか山に登る機械はありませんが、時々、近くにあるキャンプ場に行ってノンビリしたり、犬鳴山系に軽装で入ってみたりしています。

時々、血が騒ぎ、「山に入りたい」と、思うことがあるのですが、その日の仕事を考えると、なかなか行く気になれないのが現状です。

ワンゲル創立以来、二十周年ということですが、やはり、この二十年の間に、社会も変化し、自然の中にもそれが顕在化していると思います。

自然に純粹に接し、大切にしていくなか育てると同時に、自然をみつめることで、社会構造の欺瞞、横暴を見抜く目を育てていって欲しいものだと思います。

社会に出れば、本当に厳しく忙しいものです。現役の皆さんは、若い力を鍛え上げ、友人と苦しいことを乗り越えて、すばらしい学生時代を築き上げていってほしいと思います。

## 無題

77期 水城忠明

77期という言葉を耳にすると、自然と山本隆一、井本、近藤、島戸、中村等の顔が浮かび、その背後に76期・75期、74期の諸先輩方の顔、さらにその陰から78期、79期の顔が浮かび上ってくる。その他に、色々な諸先輩・後輩の顔が思い出される。そうして浮かび上がった顔には、ひとつひとつの思い出が付着している。消そうにも消すことのできない思い出。身体に染み込んでしまった思い出。

汗と涙と血液が4キロのザックと合体して、骨の髄まで浸透している。これらのものが、大学時代四年間に自分の手で擱んだ財産である。この財産を基盤として、多くの人達が社会に巣立って行った。

これからも多種多様の財産を得た人々が巣立って行くことだろう。

このワングル20年の歴史の中で、私は四年間しかワングルに寄与していなかった。それどころか、ワングルの伝統を汚したのかもしれない。だが、それは過去の事であり、当時、自分なりに精一杯やってきたのだから、今は何も語るまじ。

私は卒業後も山を登り続けた。現役に比較すると、山行の回数も極端に少ないが、今年の二月の九住登山迄は、よく登っていた。その後、今日まで約9ヶ月山には行っていない。卒業して一〜二年間は、どの先輩も山に行かれるのではないだろうか。しかし、三〜四年と年月が経過すると、次第に遠のいて行く様だ。

現役時代の山行も楽しいものではあったが、卒業後の個人的な山行もまた違った楽しみがある。それを私は、今年の九住登山で満喫した。卒業後の山行は全て単独行であったが、初めて、ある先輩と一緒に九住に行けることができ、胸をときめかし入山した。その先輩は、私が現役の時、多大な迷惑をおかけした先輩の一人である。

仮に、その先輩の名前をガンエイさんと名付けよう。

ガンエイさんと私は、事前に綿密な計画を立て、全ての準備を整えていた。出発の前日、ガンエイさんが、どこから情報を入手したのか不明だが、「今日、現役の追い出しコンパがあるから、それに参加して景気をつけて九住に行こう。」と、言われた。私は、不吉な予感したが従う事にした。その結果、翌日予定した由布一号には乗れず、昼過ぎに車で九住に向かう破目となった。私の予感的中したのである。

大体、ワングルの人間は、現役の頃から時間にルーズであ

るのに、酒など飲むと尚更ルーズになることは火を見るより明らかである。

日の暮れた夜七時頃、法華院温泉に辿り着いたのである。この宿泊所決定の経過を一筆記しておきたい。

ガンエイさんは言われていた。「法華院温泉は空いているから、二人位どうにかなる。心配しないでええ。」と・・・私は、この言葉を全面的に信頼していた。ところが、受付に行くと、「今日は満員です。部屋はありません。」

夜の帳が降りて真暗になっているのに、更に私の目の前は真暗になってしまった。だが、そこはガンエイさん。口八調手八調で二人分の部屋を確保し、寝袋にもぐり込むことができた。

翌日のコースは、ガンエイさんの希望で、大戸越↓風穴↓黒岳ということに落ち着いた。

風穴までは残雪を踏みしめ、快調なペースだった。だが、山にドラマはつきものである。

風穴から黒岳山頂までは、急な登りが続く。そこでドラマは始まったのである。登り始めて数分後、ガンエイさんが急に立ち止まり、岩に手を置き、肩で息を始めた。私は愕然とした。と同時に、ニヤリとほくそ笑んだ。

周囲の動きが全て静止し、ガンエイさんの荒い呼吸だけが耳に入る。しばらくこの状態が続いた。やにわにガンエイ

さんが歩き始めた。かなりのスピードで・・・。

しかし、悲しいかな数分後また立ち止まり、肩で息を始める。そして、ゆっくりと頭を私の方に向けてきた。目はうつろで、髪は汗でぐっしり濡れている。そして、言われた。「きつかー。」と。私は嬉々とした。飛び上がって万歳をしたい衝動にかきたてられた。だが抑え、「本当にきついですね。ゆっくり行きましょーう。」と答えた。

その言葉で安心されたのか、元気に枝に掴まりながら山頂に到着した。山頂で休憩をし、帰途についた。途中、坊ヶツルから南ヶ池に行くゆるやかな道でも、ドラマは起きた。ガンエイさんが、急に立ち止まり、屈伸運動を始めた。「どうしたのですか。」と尋ねると、「足がつりそうだ。」と、弱々しく答えられた。私は嬉しくなってしまった。

現役の時と立場が逆になった様で、優越感を味わう事ができた。私は、大船に向かって心の中で叫んだ。「やっと、今迄の恩返しができた。」と、こんな形で恩返しができるとは夢にも思わなかった。だが、現実だ。それから小一時間程で長者原に着き、九住山行を終了した。私は、現役時代から数々の山行を経験したが、今回の山行程心に残るものは無いと思う。そして最後に、ガンエイさんが決意を込めて言われた言葉が印象的だった。「もう後輩とは山に行かん。」と・・・。

## 赤石岳再訪

77期 山本隆 一

南アの貴婦人と呼ばれる赤石岳の山行計画を聞かされたのは7月上旬でした。発起人は伊藤氏(74期)で、メンバーは岩永氏(75期)と私の3人パーティーで、静岡に8月12日の朝集合し一路、畑籬へ向った。コースは樺島一千枚岳一荒川三山一赤石岳一広河原小屋一釜沢一伊那大島です。南アは私にとって五年振りで、卒業以来、毎夏一人でも気楽に行ける北アを歩いていました。しかし、南アは仲々行けないし、またOBとパーティーを組んで山へ行けるのも、またとないチャンスと思つたからです。

五年間のブランクは南アの交通、小屋を変えていました。畑籬ダム一樺島一二軒小屋間にマイクロボスが二台も走っていて、荒川小屋も立派になつていた。私達が買ったバスポートは金二〇〇〇円也。このカードで小屋に一泊、マイクロボス、テントサイト一週間無料という便利なものでした。初日の行動は、やはり運動不足がたたり苦しい出発となつた。頼りは昔とつた基礎体力という、あやふやなものだけだつた。それでもガイドブックのコースタイムのよ掛位で縦走できて、ほつと胸をなでおろす始末だつた。

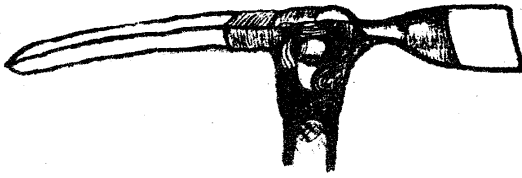
幸い4泊5日の行動中、晴天に恵まれて南ア全体、それに中央ア、北ア、八ヶ岳の山なみが遠望できました。特にこの山行中、印象に残つたのは最終日の荒川小屋一赤石岳一広河原一小波川下り一釜沢のコースで実動9時間余となつた事です。

赤石岳から釜沢まで高度差二〇〇〇メートルを下り、また小波川下りでは徒渉二十数回に及び、膝上まで水に漬つての大奮闘だつた。このコースは雑誌でも紹介される廻行コースとして有名です。本格的廻行地としては非おすすめします。ただし十分な準備が必要です。このハイライトで卒業以来忘れていた長い行動から生まれる充実感と自然の中で夢中になつて遊んだという、快良い疲労感を覚ええました。これは3人全員が強く感じた共通の意識だつたと思えます。

山行最後の夜、温泉に温まつた体に流し込んだビールに酔い、「俺は恵まれている。」と思ひました。ある人の言葉に「書齋の登山家になるな。」という言葉があります、出来るだけ、こういう機会を持ちたいと、年一回程しか長い縦走はできませんが、長く年をとつても歩き続けたいと思つています。

別れ際「来年また行こう！」という言葉が自然と出て来て何とも言えぬ感慨を覚えました。また一つ山行の思い出

が出来、現役の頃とは違った山行が始まったような気がしてなりません。



## 殉教の島

78期 長野律子

夕暮れの切支丹の島に降る雨は  
真椿を紅色に染める

いにしえの哀史の世界は遠けれど  
今なお聞える殉教者の声

異国情緒の南蛮寺にてたたずめば  
ジェロモの限りない愛情が甦る

潮流の沈黙のあとに残るのは  
幸福を知らずに朽ちた唐行きさん

夕暮れの天草の島に降る雨は  
蒼々と磯に寄せくる波々に消えてなくなる

世は常にアルメイダのごとく儂けれど  
浜木綿は、今日も静かに西海を見下ろす

## 連想ゲーム

78期 長野律子

食べたいものは  
黄金の受皿にのっている夢  
見たいものは  
女の肩にはえている翼  
聞きたいものは  
モノリザの声  
描きたいものは  
幸福色の盃  
触れたいものは  
孤独という名の黒い風  
欲しいものは  
パーミリオンのバステル  
知りたいものは  
気象台からの心模様

## 郷愁列車

79期 荒巻忠史

『郷愁列車』というのは詩人である尾崎喜八さんの言われたことばである。

尾崎さんは戦後しばらく信州富士見の森の中に住んでおり、たまに東京へ出て数日すごしていると、新宿から中央線が妙に郷愁をさそうようになり、その時にこんなことばを使われたという。

郷愁列車。思えば私にとって、鹿兒島本線はただの汽車ではない。山へ出かける時には、小倉から出発したこともあるけれど、博多駅から出ることの方がはるかに多かった。そのおもな発車時刻は、当然のことながら、そらで知っていて時刻表は要らない。

朝の七時二三分から深夜の零時五分まで何本か出る鹿兒島本線に何度も乗っては、山へ出かけた。それで、何時頃でも博多駅を通過して、そこに列車がとまっていると私は必ず一種の郷愁を感じる。

故郷というものがないわけではない。都会生活にもなじみは深く、街を歩くことも別に苦痛ではない。雑踏がいやだというのでもない。好んで街を歩かないと気持ち落ち

つかないという種族ではないけれど、少し長い旅から戻って来て、この街の灯を見ると、確かに戻って来たという感じをうける。

私の自宅は行橋市の郊外だけれども、アルプスあたりの山から帰れば、小倉で乗り換えるのが順であるが、この戻って来たという感じを味わうために、わざわざ博多まで乗って来たこともあった。これは仲間がいなくともするのでやっぱり都会に住む人間だと自分のことを思った。

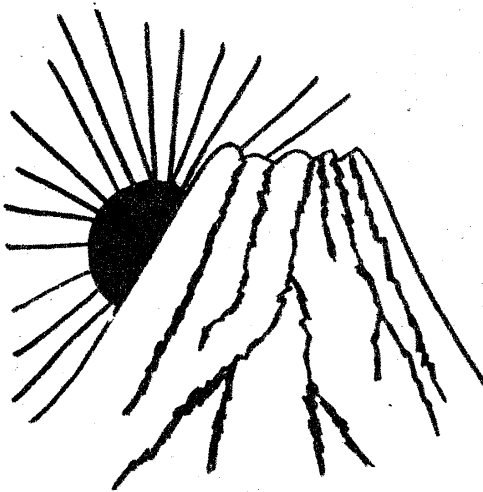
毎日毎夜、郷愁列車は博多駅を立って行く。それに乗りさえすれば、南アルプスや八ヶ岳、北アルプスの山々へつれていってくれる。どうして私はそれに乗つけないのだろうかと、電車を待ちながら不思議な気持ちになることさえあった。当たり前のことがさっぱり分らなくなること、ホームに立っているせいであつた。

博多駅も、私の現役の頃とは随分変わったけれどもその汽車に乗り込む気分は一向に変わらないことだろう。仲間をさがし、約束の時間より遅れてくる友達を待ち、見送りに来てくれるかもしれない者をそれとなく窓の外に待つて発車のベルを聞く。動いてしまえばもうこっちのものだというあの気分は少しも変わらない。

私はまた同じようにして山へ出発する友達を何度も見送り、ホームの端に立ってがくんがくと曲りながら出て行

く列車を見送った。羨しい気持ちを無理におさえていたのに、列車が出て行ってしまうと、自分を納得させる理屈がこんがらがってくる。ぶんと腹を立てたいのに、それが出来ない取り残された気分。私は自分が山へ立つ時、是非見送りに来てくれと、頼んだことはない。

彼らにとっても、これは郷愁列車なのだから。





## 『佐賀110kmロードレース』

### 中止に關して

西南学院大学体育会

第二七代委員長

荒 卷 忠 史

『佐賀一〇kmロードレース』/OB諸氏にとられましては、この大会には思い出深いことと思えますし、また、中止になったと聞かれました時には、非常に思われたことと存じます。

学生部より多年の運営上の問題を指摘され、当時のクラブ上の運営では、学生部の要求を満たすことができないと、79期執行部が判断をし、中止となりましたことは、もはや御周知のことと思えます。

当時のもようを体育会の委員長でありました私の立場から述べたいと思えます。

まず、学生部側より指摘されましたことは、本大会における責任の所在でありました。

過去八回の大会により『佐賀一〇kmロードレース』の名は、学内はもちろんのこと学外にまで知られる様になりました。

した。規模も大きくなりました。この様になってまいりますと、『佐賀一〇kmロードレース』は、ワングルの行事ではなくして、西南学院大学の行事とも言えます。大学の行事をワングルが手を濁しているといつても過言ではありませんでした。

この様になりますと、事故の際には、その責任はどこに転化されるか。もちろん学校側に対してであります。言うまでもなく、クラブにはその様な責任を負う権利能力はあります。

それ以前、学生部や教授方の間には、弓道部の筑後川事故や西南高校における持久走中の生徒の死亡事件等で、課外活動のあり方などにつきましても、かなり論議がなされていた様であります。実際、それ以前の学生部との話し合いの席におきましても、『佐賀一〇kmロードレース』の体育会主催、ワングル運営という声も出ておりました。

もちろん本大会が続けられていれば、そうなっていたでしょう。

次に、指摘されましたのは、参加者の健康管理の問題と交通量の増大に伴う危険性の問題でありました。この問題につきましては、医師の導入や健康診断書・各種保険の利用及び運営人員の増加等で、解決できるものと思われましたが、しかし、この様にエスカレートしてまいりますと、

クラブ員だけの運営ではあまりにも困難でありますし、また、『佐賀一〇kmロードレース』発足当初の主旨から大きくかけ離れてまいります。あくまでもその主旨に乗ったものでなければならぬと思います。

その後も、ワンゲル執行部、体育会、新谷部長先生、村上学長先生をはじめとする学生部の方々との話し合いがもたれましたが、双方の望む解決策は見い出せませんでした。クラブ内におきましても、より安全にレースが行なわれると思われる会場やまた、ロードレースに替わる行事等を検討致しましたが、いずれも妥当とは思われませんでした。

さて今後の、『佐賀一〇kmロードレース』の展望についてであります。上述の様な問題から考えますと、復活は望めそうにないのが現状の様であります。

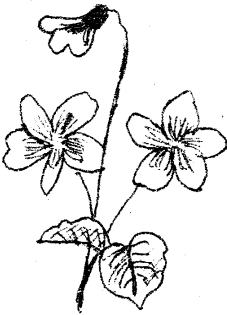
この様な行事は、運営側にとりましても許可する側にとりましても、一つの冒険の様なものではないかと考えます。組織の力とは何か。これは、その組織にとつて分かっているか、あるいは曖昧にしか理解されているかであります。そういう場合、その組織の力は、他人からしても曖昧にしか理解されていないはずで

す。極度の緊張を要求されている場所から去ったとき、それを振り返って、冒険をしたと思うことがあります。

危険なものに相對していたことは事実であります。体の全

体をそこにかけて片足をのせている岩は、崩れ落ちるかも知れない。しかし、確かめてそれに耐えたと判断したから乗せている。もちろん、不安はあります。すべてが完全な自信によつて行なわれているわけではありません。されば、冒険という言葉は間違えてはいないでしょう。『佐賀一〇kmロードレース』の様な行事のもつ危険性に向つては組織が、どういふ行動をして行くかは、登山のしかたにもあるように賭をするかしないかによつて二つに分かれるのではないでしようか。

文末になりましたが、第九回の『佐賀一〇kmロードレース』の開催に御尽力いただきました新谷部長先生をはじめ、諸先輩方に感謝致しますと共に、この『佐賀一〇kmロードレース』に替わる新しい行事として、夏・春合宿と共に遠征形式の『秋合宿』が、久保田主将以下80期生の執行部によつて始められたことを大変うれしく思います。



## 二十周年に寄せて

81期 宝 蔵 渉

二十年と言えば、現役部員が生後間もなくか、まだ生前であった。このことから考えると、いかに二十年間という歳月に、諸先輩方が零から我が部の存在を大学内外に識らしめたかを察するのは重すぎる。

ある教授に「ワングルは登山を主体とした活動を行なっている」と答えたら、「私は独逸でワングル活動をしている人と会って、いろいろと話をしたが、ワングル活動は登山が主体ではない。」と言われた。問答する時間もなかつたが、私は返事に困ってしまった。ある著名人の言葉に、「いかに伝統が大切であるかを認識している」というのがあった。確かに伝統は重んじなければならぬ。しかし、その伝統が時が経つにつれ、時代・世代に適わなくなることが必ず出てくるものである。その段階に於いて、執行部がどのように対処すべきか。勇気を出して、「新しさ」を吹き込むか。それとも、冒険を諦めて伝統だけを受け継ぐか。少くとも、二十周年という岐路に立って考えるのは、過去の実績を今後どのような形で活かすかである。

二十周年記念ファイヤーの準備とこの記念号作成の為に

OBと何回となく話し合いを持った。それによって感じられたことは、OB参加の行事は現役が奔走しても殆ど効果を上げない。これからのOB参加の行事は、もはや現役だけでは実行不可能である。やはり、OBはOB同志の絆や呼び掛けで動いてくれるものだ。OBの強力な組織力と意欲を仰がなければならぬ。

例年よりも、OBとの接触が高まった現在の状態を維持し、二十周年築き上げてこられた諸先輩方の努力と功績を損うことなく、同時に価値ある伝統を重責しながら、今後とも発展して行くであろう。



## 二十周年に寄せて

81期 古賀 栄 一

まず西南ワンダーフォーゲル部の創立が今年で二十周年を迎えるにあたっておめでとうと言いたい。しかし考えてみると自分がこのクラブに入部して来たのが、運命の巡り合せと言うか何んとも皮肉なものではつきり言って煩わしいものであった事は隠せない事実である。

この記念誌を作る前に我々81期生には色々な案があった。例えば日本縦断とか日本百名山の完登とか山小屋建設とか指道標の設置とか、でも実際問題としてこれらの案は金銭的にもちょっとスケールが大きすぎるので記念誌を作る事に決定した訳です。しかし考えてみるとこのクラブに入部した一年の頃は全く自分達には二年後にこういつた20周年という行事が待ち構えていようとは思いません、ただクラブに熱中していたので20周年という事を聞かされてもうそんなになるんかとただ驚くだけでした。しかし20年間というものは長いものです。私達の年代でみると自分らが生まれるか生まれる前にワンゲルが誕生した訳だから、創立当時の先登方はもう40に達した年頃となる。そこに大きな時代の差を見い出さずにはいられないだろう。

今まで20年間の活動内容はそう大きな変化はなかったと思うけれど創立されて現在まで至る過程には並々ならぬ先輩方の努力があったと思う。絶えず試行錯誤して悪いものを廃除し、良いものを取り入れてクラブの伝統を築いてきたこの過程に誰れしも重みを感じずにはいられない。

ここで少し話は変わりますが、西南ワンゲルと言ったらまず上げられるのが練習の厳しさでしょう。これは自他共に認めるところであります。この練習も昔と比べると内容的にはそんなに変わりはないけれど年々その厳しさがエスカレートしているように思われます。ほおを殴られ、えり元を引っぱられ、シャツを破られながらもなお引っぱり上げられ、あげくの果ては倒れて膝をすりむく、そして鼻水を垂し涙まで流す。しかし自分自身、よくこのクラブが続いたなあと感心しています。でもよく考えてみると、いかに殴られ、怒鳴られようとも練習後のあの爽快さは何なのか。またワンゲルのメインイベントともなる夏合宿ひとつを取り上げてみても成し遂げた時のあの感激は何なのか。これは自分だけでなく部員全員が感じた事でしょう。あるいはOB諸先輩方も当然感じられた事でしょう。これからもこの偉大な西南ワンダーフォーゲル部が何十年と続きより発展する事を祈っています。

## 四国サイクルツアー

82期 安 武 真 吾

我々は、以前からの友であるかのようにそれぞれ四国の旅を回想しながら語り合っている。自転車で旅をする者同志の間には、強い親近感が湧くから不思議なものである。

だから宿に荷を下ろし、まず最初に口を開く相手は、自然とサイクリストと決まっている。思い返すと色々な事があつた10日間であつた。

四国に上陸したのは3月7日の午前5時、まだ闇の中の松山港でいつ止むとも分からぬ雨に苛立ちながらベンチに腰を掛けていた。あの時の苛立ちは今もつてはつきり思い出せる。そしてその日、産大のS君といっしょに肩にタオルを引っ掛けて、暗い夜道をトポトポと道後温泉まで歩いて行つたのである。

とかく雨に泣かされたものだった。2日に1回の割合で執拗に降られ、その度に泥よけのない自転車は情容赦なく私の全身をズブ濡れにしたのである。(雨具は持ち合わせずウインドブレーカーでその代役を果たしていた)徳島<sup>H</sup>前の大坂峠の下りでは寒さに震え、生きた心地もしなかつたものである。

一転して、ジリジリと焼き付くような日を浴びながら、室戸海岸を快走すれば、海の青さが目にしみ、額からは汗がしたたり落ち、これがまさにサイクリングだと思つたものだった。また息遣いも荒々しく峠にたどりつき、待望のダウンヒルでは、ブレーキをかけずに、コーナーを抜けるスリリングな一瞬も私は好きである。

室戸岬から安芸市にむかう間じゅう、強い向い風に悩まされ、45kmを走行するのに3時間以上要した。徳島から岬まで強い風でスムーズに進んできただけにひどく苦しく感じたのだつた。対向からくるおじいさんの乗つた実用車は私の自転車を嘲笑うかのように風に乗つてリズムカルにすれ違つていく。その時、私はいっそのことくると向きを変え強い風について、室戸の<sup>H</sup>までもどろうかと思つた程である。

窪川の岩本寺では、(当然のことだが)ツルツル頭の坊さんばかりでひしめきあう浴場で、たつた1人長髪の私はひどく違和感を覚え、浴槽の隅で1人肩身の狭い思いをしていると、坊さん達がいつせいにお経を唱えはじめたので、驚いて早々に引き揚げていつたのである。でも廊下を歩いていると部屋で、坊さんがジャラジャラと騒々しく麻雀をやっている熱気(これはまさに熱気であつた)を肌で感じて、坊さんといえども、何ら我々と変わるところはないこ

とを知って、変な安堵感を覚えたものだった。

最も心に残ったものは、どんなにすばらしい風景でも、どんなに美味な食べ物でもなく、人の情であった。ラーメン屋にとび込んで、服から雨のしずくをしたらせながら、ガキガタと震えていると、すぐにストロウに火をともしていただいた。この時は本当にうれしかった。また食堂の主人が、見ず知らずの私を道後温泉にいっしょに行こうと誘って下さったり、宇和島の近くの農家の軒下で雨宿りをしていたら、沢山のみかんを下さったり。ほんの些細な心遣いでも、ひどく私にはありがたく感じたのである。そして多くの旅人と語り合い、多くの友を得ることができたのである。

我々の乗っているフェリーは間もなく、小倉港に接岸されようとしている。そして私の四国の旅も間もなく終わろうとしている。



## 合宿後の一杯

82期 金 水 紀代司

山行を終えた後で飲む酒ほど、うまく感じられるものはない。疲れのためか普段よりも酔いが早い。時にはコップ一杯のビールさえ飲めない時がある……。

アノノポリハキツカッタ、アノケシキハサイコーダッタナ  
ー等々。合宿の余韻を楽しむかのように語り合う。一人一人が山行を無事に終えた安堵感とやりぬいた充実感で自然と口も軽くなる。重い荷を背負い急坂を登る。だれも助けなくてやしないー自分の脚のみが頼りの山登り。急な登りの連続に負けそうになつた自分を思い出している者もいるだろう。岩蔭に咲いていた小さな花を思い出している者もあるだろう。そんな時だれもが焦点の定まっていない目で遠くをぼんやり見つめているような顔をする。最初の頃より口数が少なくなり各自思い思い、自分なりに回想しているのである。きつかったことも、今となっては懐かしい思い出、それさえ楽しかったことのように思い返されてしまふ。――汚れた身を椅子につけてタバコを吸いながら合宿をふりかえる、そして目の前には一杯の酒。こんな瞬間があるからこそきつい山登りも続けられるのかもしれない……。

## ワンゲル 1<sup>2</sup>0 を過ごして

83 期 北 川 邦 光

ワンダーフォーゲル部創立二十周年、おめでとうございます。今日、自分たち現役部員が活動できるのも、ワンゲルに熱心に活動されてきた諸先輩のおかげです。

さて、自分は一年間のあの苦痛な時を過ぎて、やっと待望の二年になったばかりです。一年前、ワンゲルの部室に来た時は、部の創立年数など全然知りもしませんでした。

そして、新人歓迎合宿の後で、今宿で二十周年記念フアィヤーがあると先輩から聞いて始めて知りました。

二十年と言うと、来年成人式を迎える自分ですので、生まれる前からあったことになりました。部室の入口に飾ってある「ワンダーフォーゲル部」の木彫りの板から、クラブの風格みたくいなるものが伝わって来そうな気がします。

諸先輩の方々も、たくさんの思い出深い事があると思われます。苦しかったこと、つらかったこと、またそのような事があるからこそわかる楽しかったことなど様々と思われます。そして、先輩、同輩、後輩と皆で励まし合ったことなど。ワンゲルは、正に「同じ釜のめしを食う」ので、部

員相互の結びつきは、他のどのクラブにもひけをとらないほど強いと思えます。そのような連帯感が社会にでても、きつと役に立つと思えます。

それから、上級生になると下級生を連れて山行するにあたっては、他人の命を預って責任ある行動をとらねばなりません。その責任感も社会には必要と思えます。

未熟者が偉そうに言つてと思われるかもしれませんが、自分も一年やってきて、ワンゲルに対して考えが変つてきました。だから、連帯感、責任感といったものが少しずつわかつてきました。

これから先の長い人生において、先輩方、どうか時に困難な立場、いやな立場に立たれました時は、自分がやって来たワンゲル活動を思い起こして、立ち向つて欲しい次第です。

今、自分がワンゲルの一部員として誇りを持てることに感謝します。



つれづれに。。。

83期 藤田淑子

何を書こうかしら……

もちろんクラブについて書かなければならないのだろうか  
れど。

一週間悩んだけれど、今の私は自分の心を文章にできない  
でいるのです。

山はすばらしい……でも辛う。

トレーニングは苦しい……でも必要不可欠なもの  
一人でいたい……それも淋しい時がある。

忙がしい毎日……でも皆の笑顔を見ているとほっとす  
る。

私の心の中の天びんが、ゆらゆら揺れながら、それでもし  
っかりワンデルの中へ埋まって行くのが見えます。

もつともつと考えなければならぬことがたくさんあるけ  
れど、今私が、クラブについて、はつきり書けるのは、そ  
れだけなのです。

友達を一人失いました。

私が今までクラブを続けてこれたのも、クラブの皆の励ま

しの他に、その人が勇気づけてくれていたからなのです。  
とても心配してくれていた人。

とても優しい人。

自分のことだけで精一杯だった私。

その人の心を一人じめしたかった私。

あの時、約束した穂高の石は、渡せないまま今も私の机の  
上にあるのです。

試験の結果がかえってきました。

もうさんざんです。

情けなくて、みじめでした。

でも不思議と後悔はしていません。

今、男子の中にポツンと入りこんで、再履習をうけていま  
す。頑張ろうと。

山で花を見るようになったからでしょうか？

今まで気づかなかった野の花に、目を奪われることが、多  
くなりました。

どの花も精一杯きれいです。

私もそうなりたいものだと思います。

一年生のメッチェンがまだ一人も入ってきません。



本当に信じられないことだけれど、最後まで入部しなかったら？。なんて考えると不安になります。  
本当に、本当に、今年の一年生はどうしたのでしょう？。



# ア ン ケ ー ト

二十周年記念誌のため、できる限り現役はもとよりOB諸兄の「声」を反映できるようにアンケートをとりました。人間それぞれ顔かたちが違うように、いろいろな御返答を載くことができました。西南ワンゲルの二十年間の歩みを知るうえで少しでもプラスになれば幸いです。

アンケートの質問内容は次の通りです。

- 一、ワンゲルに入部した動機は何ですか？
- 二、引退の時何を思いましたか？
- 三、好きな山を三つあげてください。
- 四、好きなメニューを朝、昼、夜、一つずつあげてください。
- 五、思い出に残った行事を一つずつあげてください。
- 六、(バーワン、合宿、コンパ)
- 六、どの程度の練習をしていましたか？
- 七、これからの西南ワンゲルに対する要望、期待を書きてください。
- 八、最後に、「ワンゲルとは何か」を一言でお願いします。

以上の質問に対する答を、数字ではなく文章にして掲載しました。

## ① 入部した動機は何ですか？

やはり何といっても一番の動機は「山が好きだから」というのが最も多いです。さすが、伝統を誇るS W Vであります。他には、他部の勧誘を逃れるために、とか友人の巻き添えを食い知らぬうちに入部していたなどありました。こういふところは今も昔も同じだなあと感じさせられました。それでは、アンケートより原文のままいくつか抜粋しましたので読んで下さい。尚、期と性別だけ付記致します。

### 70期、男

六月頃、友人が入部するからついて来てくれと言うので部室について行ったところ、当時四年生の松延氏から「君もついでに練習でもして行ったら？」とやさしく言われ、それならと練習に参加したため。「本当は入部したくなかったけれど山が好きで気持ちの整理ができた事で」入部。

### 72期 男

70期の先輩に強引に引きずり込まれた。

### 72期 男

①小学校の林間学校のイメージが良かった。②東京農

大WVのシゴキ事件及び九工大WVの遭難事件でWVを知り興味を持った。③北海道に魅せられた。④高校の時中途半端なクラブ活動をしたので4年間続けられるクラブを捜していた。

77期 男

中学一年の時、夏休みに学校から久住の長者原に一泊二日のキャンプに行きました。その時のキャンプ生活の楽しさが忘れられずにワンダーフォーゲル部もキャンプ生活に重点を置いていたのだと勝手に思い込み入部しましたが、その日の放課後の合トレで即、退部を決意しました。が、整理体操の後、部室に戻った時に差し出されたキリンレモンの味が忘れられずに四年間籍を置いてしまいました。

78期 女

高校時代に山に登った事があり興味があったこと、たまたま部室のドアが近くにあつて口のうまい先輩がいらっしゃったため。

78期 男

①応援団の追手から逃がれるため。②皆でソフトボールができると聞いたため。③カワイイ女の子がたくさんいそうながしたため。④自然を放浪したいがため。

以上が主なものです。入部の動機は当然の事ながら皆、

異ってはいませんが、それぞれ四年間をワンゲルに費したという事はやっぱり「山が好きだから」という一言に尽きるのではないのでしょうか。

②引退のとき何を思いましたか？

69期 男

出来るならば山に数多く行きたいが、これで終わりかもしれないと・・・。

72期 男

「『ファイト!』と叫びながら、山に登るのはもう出来ないなあ。」と考えた。山はもう行くだけ行ったなあ、と思っていたが最近になって「クソノあの山行っときゃ良かった」と思う事が多い。

72期 男

同期の仲間が夢の中で「もう一年やろう、もう一年・・・。」と言っていたのを思い出します。

73期 女

大学の思い出の大部分がワンゲルの思い出であるという事。又、クラブ生活に悔いはないという事。

80期 男

寂しかった。もうあんな山行はできないだろうと思うと本当に寂しかった。もう一度、一年生に戻りたいと

思った。本当にノ

引退という言葉には、それだけで何となく寂しさが感じられます。けれど、その逆にクラブに新しい顔が増えてまた新しい西南のワンダラーが育つてゆくのだと考えれば決して寂しさだけのものではないと思います。

### ③ 好きな山BEST3

#### ④ 好きなメニューBEST3

好きな山については、好みの相違が大きいものと思いましたが、そこは同じ穴のナントカというヤツでかたよつた傾向が見られました。並みいる名山の中から選ばれたSWVの三大名山<sup>1)</sup>は次の通りです。まず、普高き第三位は、微妙な差で太宰府の名峰、宝満山を抜き、久住山系と決定しました。大分に位置するのにも拘わらず、福岡に住む我々にとつても大変馴染みの深い山々が連なる久住山系の第三位は順当なところであります。次に栄光の第二位。九州の最も男性的な山塊である祖母・傾山系であります。これもまた当然なる結果でありましょう。そして、いよいよピッカピカの第一位、北アルプスの盟主たる穂高岳が輝きました。中には、「穂高を見ているだけで涙がこぼれる」とおっしゃる方もいて、やはり人気はピカ一でありました。

まとめると、一位、穂高岳、二位、祖母・傾山系、三位、久住山系。以上のように決定致しました。

それでは次にメニューのBEST3に参りましょう。食通のそろつたワングルのこと、仲々メニューにはうるさそうであります。ただ、全てに共通していることは安価で満腹感を充たされるもの、平たく言えば「質より量」ということで意見の一致をみました。

まず朝食の部であります。一日の行動の糧である大切な朝の食事のBEST3は、三位、めざし、二位、焼きそば、そしてBEST1は、みそ汁とごはんでした。日本人ですね。次に昼食の部。これは選択の余地なく、フランスパンが圧倒的な強さでオニギリを敗りました。朝食とは対象的な「日本人」ですねエ。そして最後に夕食はといいますと、三位、ハンバーグサラダ、二位、シチュー、一位は当然、「キジメシ」以外には考えられません。

このように、好きなメニューBEST3がそれぞれ決まりました。これをもとに一日の献立を決めると、朝、起床の声とともにネガクまなこでミン汁すすり、昼は、少い水とパン、そして夜にはとっぷり汁気のキジライス、といったところになりました。

## ⑤ 思い出の行事

### ⑥ トレーニング

ワングル活動の性格上、印象深い合宿なりパーワンの思い出はいつまでも忘れられないものです。四年間（あるいはそれ以上の人もいるでしょうが）の全てが思い出となりその人の青春であったと言えるかもしれません。だから、思い出に残った行事を自ら選出するのは、そういう意味では至極、困難であったように思われます。合宿とはまた違った雰囲気の中でパーワンについては、この本を読まれた人の心の中に思い出としてとっておいて下さい。合宿については、アンケートの結果によりますと、やはり夏合宿が一番思い出深いと答えられた方が多いみたいです。西南ワングルの二十年の軌跡を示すかのように、各代によって夏合宿の行先が違います。北は北海道から南は九州・沖縄まで西南の渡り鳥達は飛び回ってまいりました。これからも、その翼は四季折々の自然の中を力一杯羽々たいていくことでありましょう。

西南のこのような足跡を残す原動力は、やはりそのハードなトレーニングにあったと思われれます。トレーニングの場は昔も今もそれほど変化はありません。69期の方の答に

よりますと、日曜日以外毎日三時間程度、愛宕・海岸にてトレーニングを行っていたようです。そして80期になると週三日、一時間〜一時間三十分程度、愛宕・室見上流・生の松原・豊浜・大濠公園 etc.、というふうに若干の変化があるのみです。愛宕のあの坂は、これからも何十年にも渡って西南の渡り鳥たちの汗と涙とヨダレを吸ってゆくことでしよう。

### ⑦ これからのSWVに対する要望期待

この間に対する答はいろいろいただきました。でき得る限りこの欄にて特にこれからの後輩諸君に読んでもらいたいと思えます。先輩方の生のアドバイスですから。

「何やかと理念にこだわらず、現役部員の皆様の個人の意見を尊重して実践を第一に活動して下さい。勿論、ワングル活動の発生した西ドイツの青年たちの原点の発想を忘れずに！」

「西南学院大学のワンダーフォーゲル部員として、常に責任と誇りを持って行動すること。そうすれば人から笑われる様な事はないし、後から振り返ってみるときっと満足したものとなるだろう。」

「第一に仲間意識を尊重し、仲間意識が育つようなワングル活動を望むし、第二に西南ワングルの一つでもいいカ

ラーを持って欲しい。第三にそれぞれのクラブ員の個性が発揮できる場を保証し合うクラブであって欲しい」

「伝統なんかには捉われないことなく、自由に伸び伸びといろいろなことに挑んで欲しい。自然を愛する者として、その名に恥じるようなことでなければ、あなた達の好きなようにやってみて欲しい。」

「ワンゲルといっても登山が中心な訳であるから登山の一般ルールに従った常識ある登山を行って欲しいノもって個人山行を多く行い、自己の山に対する可能性をひき出して欲しい。」

「山だけがワンゲル活動の場ではない。伝統に使われるな。ワンゲル活動も全ての面において日々に変革していつて欲しい」

### ⑧ ワンゲルとは何か

二十年前に63期の先輩方が独自に始められた西南のワンダーフォーゲル活動も時の流れと共に変遷を重ねてきました。ワンダーフォーゲル活動とは一体何であるのか、ただ一つだけ言えるのは自然の中で人間がいかにか調和して生きていくか、というテーマを複数の人間同志協力して追い求めてゆきたい、それが我部の目的であるのではないでしょう。しかし、その目的のために何を行うべきか、今まで

の先輩方の足跡から少しでも目的達成に近づきうるようにと今回、アンケートを通して考えてみたいと思いました。

未来ある西南学院大学ワンダーフォーゲル部のために・・・。「ワンゲル」とは何なのでしょう。

「自然の中に足を踏み入れて体を思う存分動かして、自分を解放すること」

「ワンゲルとは・・・水との戦いであった（汗との戦いでもあった）。「兄弟」の集りである」

「大マラソン」

「自然に馴染み、自然にとけ込み、自然に親しむ」

「クラブ行事を遂行することも大事なことはあるが、自分の可能性を伸ばせる場所であると思う。故にワンゲルは自己に内在する無限の可能性を引き出せる機会を与えるものだと思う。」

「『生活』を引きずって歩いている現在から見れば、結局、『遊び』にすぎない。しかし、学生生活は『生活』を意識したものであってはならない。今の学生にはこういう人がなんと多いことか。自分は『遊び』に徹することができて幸せだったと思っている。どの合宿、どのバーワンを取ってみても真剣に『遊んだ』『生活』を考えるのは卒業してからで充分なのだ」

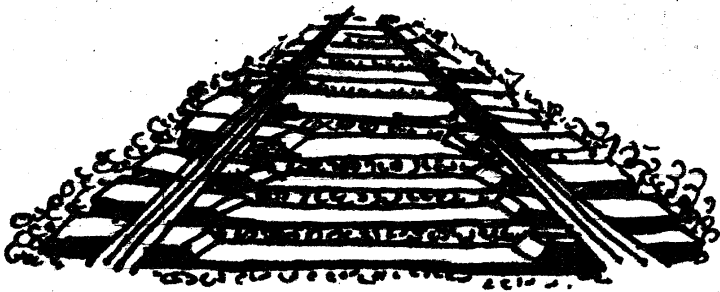
「翔べない渡り鳥」

「自分にとっては貴重な学生時代の表現の場だったし、  
ワンゲル自体については規定されない、いつまでも新しい  
活動や考え方のできる活動だと思ふ。その意味で新しい動  
きをやって行つて欲しい。」

「三段跳びのホップ、ステップ、ジャンプのステップの  
段階」

「『アホ』・・・人から何でわざわざあんな重いものを  
持つて登るのと言われ続け、今考えると『成程』とうなづ  
けるのだけれど、その馬鹿馬鹿しさが好きだったのですね。  
あの頃は、いやあの頃も。仕用もない事を一生懸命やる。  
すぐく、いいですね。」

ワンゲルとは何か、この間はおそらく正答を持たない問  
題であると思います。が、この永遠のテーマの解け口を追  
い求めてゆくのもまた一つの『ワンゲル』であるのではな  
いでしょうか。



# 變遷





## 創立の頃

63期 松岡博之

ワンダーフォーゲルが初めてのワンデリングを行ったのは、野北牧場でした。あの頃は、節句過ぎでしたが、気候のせいか忘れられた鯉どもが青空を泳いでいましたから、それはそれは平和でのんびりしていました。

だが、平和なんてこわれ易いもので、会の発足一ヶ月の心はこちらに集中。私もワンゲルの事を打ちやって、その学生運動に参加し、声を枯らして我等勝利のために頑張りました。そんな具合なものですから、野北の楽しかった一日を思い出さずなんて無理でございます。とうとう夏休みを迎えることになってしまいました。いやその時のあわてようといったら、言いようもございません。計画性がない上に、部則さえも作っていませんでしたので、会員の統制がとれようはずがございません。そのまま南九州ワンデリングに入らなければならなくなつて、山にも海にも不案内なリーダーが、面白くもない芝居を演じている役者のようにはたから見てみると腹立たしくなるほどでございます。こんな生れ方をしたのが我等のワンダーフォーゲルです。

生れ方の悪い子も育て方によつては、すばらしい大人になるそうでございます。立派になるためには教養を、そのためには脳神経が明晰でなければなりません。頭デッカチの子ぐらい不恰好なのはございませんから、それにふさわしい胴体を造り上げて下さい。今のところ手足の発達し具合がまちまちですから、よほど不満がありそうでございます。栄養がうまく行きわたっていないのでございましょうから、何か与えて下さい。そうすればきつと背だけが延びることとございましょう。大きな服を用意して待つています。

## S・W・Vの方針

64期 坂田芳徳

S W Vの方針を語る前に、ワンゲル精神とは何であるかを述べなければならぬと思う。言うまでもなく、S W Vの方針といったものもそこから生まれるものであるからです。

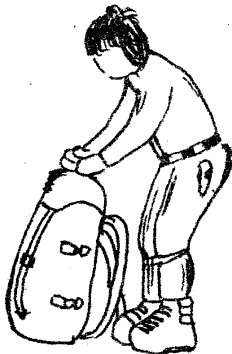
ワンゲル精神は近代文明の展開がもたらした人間性喪失と、伝統的文化の展開がもたらした人間性喪失と、伝統的文化の崩壊に対する自然人としての本能ともいうべき反発にあります。大自然の懐ろに飛び込み、自然の中に溶け込

んでそこから失われた人間性を復活せしめんとする所にWV運動精神の根源があるのです。そうしてWV運動の要素としては各地の風俗、習慣、文化に触れる文化的なものと、自然に親しみ健全な体力、即ち己が心身の練磨といった体育的要素が常にその底を流れている事は勿論であります。故にその活動形態がどうであろうと、その精神がWVのものであればそれはWVといえるし、又形態が例えWV的であつても精神がWVでないならば、それはWVとは言えないのです。

現在のSWVは創立当時の家族的雰囲気を主体とした集合体から体育的組織体への重大な過渡期にあります。その原因は会員の増加が必然的に組織的なものへと変態させて行くからです。ですから会の運営方針も最早、組織的に実施せざるを得ない様になり、年間の活動計画も定期的且つ長期的になつていったのです。が、ここで考えなければならぬ事は組織についてであります。即ち統制的、組織的行動は計画の面からは実に整然としていますが、ともすれば人間関係が機械的になり、個々の人間性の解放を目指す事が、おざりになる危険性を内在しているからであります。解決策はWV活動、練習を通じて苦勞を共にし広く自然に接し、チームワークの養成と個人の自覚に期する他ありません。そうして本来のWV活動を具体化し実施するた

めには、一人一人の理解と協調が望ましいのであります。SWVを愛する事が更により良きSWVへと発展させ得る唯一の道でありましょう。

SWV自体の技術的、体力的要素が未熟であるために、組織化を強調しすぎた傾向が確かにありました。しかしこれも誕生から成長への一つのプロセスとして認めていただけだいたい。SWVは一つの発展の流れに乗つて今後増々生れ出する悩みを経験するでしょう。体験の中から真のワンゲル精神が理解される様に、SWVも多くの経験を通して真の姿を現わすだろうと思う。これからのSWVは統制的、組織的且つ根底となる人間性解放を目指しつつ発展を続けて行きたいと思う次第です。



## 意見

65期 永原伸雄

「ワンダー・フォーゲル」とはドイツ語で「渡り鳥」を意味する。その名の通り、この部の目標とするところは、広く野外活動を通じて強健なる精神と肉体を形成すると共に、その団体行動・生活を通じて、「人の和」を養うことにあると思う。こういう主旨のもとに我々のクラブも活動してきたのであるが、ここに敢えてこれからの「ワンゲル」の発展の為に現在の活動のやり方に対して反省を求めたい。と言うのは、現在の我々の活動といえは、「山登り」のみにとらわれつつある感がなきにしもあらずだ。これでは、「登山部」と何等異なる場所がないのではないか。その為かどうかは知らないけれど、未だに「同好会」の名に甘んじているのではないか。我等のクラブは断じて「遊び」の為のクラブではない!!

先に述べた様を、しつかりした目標もある。野外活動を通じての「人間形成」、その一方法としての「山登り」は多に結構。しかし、やはり「登山部」とはその活動を異にするうえに於いても、ワンゲル独自の活動を展開していつてはどうだろうか。

聞くところによると、或る大学の「ワンダーフォーゲル・クラブ」は、文化クラブに所属しているそうだ。そしてこのクラブはワンデリングする地方地方の珍しい風俗、習慣等々を合わせ調べて行っているそうである。

我々のクラブも唯、歩くこと、安い費用であげること、山に登ることのみに取らわれず、それ等にプラスして「地方文化」というアカデミックな目的をもった活動を展開するよう努めていつてはどうであろうか。そうすることによつて「西南ワンダーフォーゲル」が「登山部」とは明瞭に区別され、ワンゲル独自の活動を展開出来るのではなからうか。

## これからの事

66期 竹本 是

クラブ創立四年となつた。今だ同好会ではあるが、ほとんどの運動部が力を弱くしてきた現在の西南において、活動部員、四十数名を数え九州連盟の本部校となり、その委員長も古川さんがひきうけるに及んで、今や我らクラブは九州においては最も活発なワンゲルクラブと成つてきているのである。活動範囲一つをとつてもその事は明らかだし、団体行動に徹した方針が、今後の合ワンの際、実践

行動において他校の人材より確かに心強い何かを持つてゐることは我らの耳にしてきたことである。しかし、心強いとはいつても、それは九州内だけにとどまる。中央の方にくらべたら、まだまだその差に目を見開くばかりである。四年と十数年の歴史、と言えばそれまでだが、何も彼らのごとくなるために、彼らが用したとおりの十数年を待つ必要はないのである。一年でも、半年でも早く、その充実に  
おいて彼らと肩を並べる程度の我がクラブにしようではないか。といつて、もちろん、現在の彼らの部のあり方が全ての面で正しいと思つてゐるわけではない。我々は今一度ワングルクラブの存在価値にまでもどり、それを正しく認識し、その上になつてクラブにおけるすべての行動を判断し規制し、そして我ら独自のクラブを作り直していく時にきてゐると思う。クラブ発展の最初の過渡期である現在実際問題として、装備部費などいくつもの手に重い問題が横たわつてはゐる。しかし、どれもこれも、つまるところ、部員各人のワングルへの熱意によつて、それへの解答は与えられる。各人の熱意である。やる気である。誰のでもない。我らのワングルなんだから。他の人が何と言おうとも自分だけは・・・。という風に我がクラブを愛そうではないか。好きになつたのならいくらでも、自分の意志を通して自分の好きをよりにクラブを動かそうではないか。



部員のそれぞれが、当たり前のだそれだけのことを思えば、それでいいのである。そうすれば、これから幾年たつても、我が西南学院大学ワングル部には「発展」以外のものはありえない。

## S・W・V 現段階 についての一偏見

1 スポーツワンデリングと

関連して1

65期E4 吉村 忠

現在我が部は沈滞期にある、と言えば反論する人も多いであろう。創立以来五年、着々と発展して来たかのごとき臆想を抱く部員は多数居る。確かに、表面的あるいは形式的な拡大は見られる。現に、部員数に於ても、部組織の面に於ても、又活動の規模に於ても、創設期のそれらと較べれば格段の相違がある事は明白である。しかし、精神面での発展は？と言えば、まだまだ生まれわたの幼児期の域を脱していないのではないか。ある時期に於ては、後述のごとき強い自覚が持たれ、形式的には統制の体系を整えんとした事はあつた。だが、今だに個人の意志が重きをなした規約は有つて無きがごとき現象を呈しているのが現状である。部員は組織の中にあつて、是が非でも自己の主張を貫き、自己の存在を顕著たらしめんとする。まさに幼児期と言われても致し方無かるう。

ワンゲル精神とは「大自然の中を遍歴する事によつて、失われた人間性の回復を計る事を目的とするものである」と言われているが、この事と関係なく我が部がスポーツワンデリングを目標として創設された小社会である以上、又この社会に参加するか否かは個人の自由である以上、この社会の目標に反するような個人の自由は、これが束縛されるのは明白である。スポーツは元来、厳格なる規律と資格とが要求されている。個人個人がその意志の赴くままに振舞えば、それはスポーツとしての意味を失つてしまふであろう。とりわけ、ワンゲルは個人競技でなく団体として行動するのであるから、厳しい統制が要求されるのは必然の理である。あくまで組織の中の一個人である事を忘れてもらつては困る。小さな(或る意味では窮屈な)人間関係の中で、常に協調性を有することが第一であり、その組織体の中にある自己を唯認識する時のみ、喜びを感じさえすれば良いのである。全部員がワンゲルの活動を通じて、その構成員たる事の強い自覚を持つべきである。スポーツとして、それが規律であり、資格である。我が部を自己の意志の赴くままに動かす等という考え方は、我がワンゲルを衰退への道を辿らせるなものでもない。これらの拘束が耐えられぬものなら、部をやめる以外に手はない。そうするだけの自由はまだ残存している。

以上に於てスポーツワンデリングがワンゲルの本質に反するものであるかどうかについては論じなかつた。あくまで所与の条件として取扱つた。スポーツワンデリングを採用することによる必然的結果について考えてみた\*である。

## 全日合ワシ

66期03 柴田正幸

全日連盟から合W招待を受け、それに私と松岡君が参加するように決定したのは五月の中旬頃だつた。その出発の夜、博多駅のプラットホームには三十余名からの部員が来てくれた。校歌斉唱とパンザイに感激と不安の交錯する私達は送られた。

翌六月四日の夜、大阪駅にて関西勢と共に集合。その数はおびただしく正直なところ、圧倒される思いだつた。また、以前に聞かされていた言葉を思い出し、福岡を出るときの意気どみはなくなつていた。「関西合Wは本当に親睦だが全日合Wの方は技術にしろ学校の自慢など虚栄心の競争だ」という言葉である。急行「千曲」が関西側の指定列車である。この列車で長野まで行き更に乗りかえるのである。成安女子短Wから菓子をもらつたり、B・Gからド

ロップをもらつたり車内は和気あいあいを呈していた。田口駅は妙高々原の拠点になるところである。列車から次々に降りる各大学W・Vの数は壮観という他はない。指定されたバスに乗り込んだのが十時。これより笹ヶ峰牧場に向うのである。黒姫、焼山の連山はまだ雪が白く輝いている。一時半、関東勢、関西勢が一同に会して開会式が行われた。何だか緊張してただ規模の大きさに感嘆するのみだつた。

私が編入されたのはGブロックの3班。P・Iは関大の四年生である。解散後各ブロックの1、2、3班はすぐ食当にかかると。カンロを使用していたがこれは我部でも使うと便利だろうと思われる。食後のミイティングは型のごとく自己紹介に始まり、各大学W・Vの運営方式に興味深く耳を傾けた。男性ばかりの方がやりやすいので女子の入口は認めず学年差も激しいという関大、釣りをやつてもいいし、いつも和気あいあいとしてやるという立命館、その他諸々の話にワンゲルにもいろいろな考え方があるものと思つた。私が思うに我が西南W・Vの姿は前記二校の間にあるようだ。私自身、妥当だと思ふ方法である。つまり合宿にあつては学年差が徹底し、部室に於いてはあまりそれを感じない我が部である。ある大学のワンデリングが山に傾きすぎるとか、ウチはロード（我が部で云うシャバ歩き）に重点をおいているとか合宿の方法についてもいろいろで

あるが、おおかたの結論はワンゲルの精神を基底におけばよいとのことだった。また、冬期合宿についてであるが殆どのW・Vがスキー合宿を行っている。近くにゲレンデももたない我が部であるが近い将来、これも考慮されるべき問題であると思つた。

二日目の六日、Gブロックはバーワンで三田原山に登つた。広々とした笹ヶ峰の牧場をつつきつて山に入る。倒木がいたるところにあり道は荒れていた。白樺が印象的である。後方には戸隠果ては白馬など北ア連峰が銀嶺をのぞかせている。ガスがうずまき、そのうちにとりとり突風にまじつて小雪がチラつきだした。六月の降雪にはただ驚くばかり。妙高の荒々しい姿を右に三田原山までヤブこぎの連続。頂上附近には深さ二米くらいの雪田があつた。雪合戦をやつて下山。夕食までカンケリとか色々な罰を作つたゲーム遊び。どこのワンゲルもこれは一緒らしい。七時、ファイヤーが行われる。設置校によるタイマツのおどりの後、点火される。荘厳な一瞬である。点火と同時におこる拍手は山々に木霊してやまない。寒気でガタガタふるえながら仮装行列、各格別のスタンツをみる、栄養大のスタンツは女子でもこんなにやれるのかと思うくらい、男子そのこのけのものであった。終了後は徹夜ですごすことになつた。ワンゲル論、若き世代論などでにぎわうが殆ど偶然という環境の中

に会し、フランクに活発に発言する。たまたま女性のごとが問題になつたのだが、我がW・Vの女性諸君もヨソに負けぬだけの実力をもちつつあると思つた。

解散の朝は快晴だった。式がある迄、わずかの暇を利用して記念撮影、リーダーの胴上げ。円陣をくみ"ファイト"を叫び、最後にこれでお別れか：というサヨウナラを歌う。心からの拍手と惜別。それは感動的な場面だった。数日前には全然未知の人としてギョチなく接したのだが、別れにあたつては心からそれを悲しんでいるように思えた。

またたく間に過ぎた三日間であつたが、私自身にしては貴重なものだった。いろいろ参考になることも多かつたし、私が一応の渡り鳥として巣立つ最初の合宿でもあつたから。私達にはまだ裏盤梯偵察という任務が残されていたのでその日のうちに着くよう先を急いだ。

#### 後記

これからも全日合ワンには参加して欲しいし、また私と松岡君の参加にあたつてカンバに協力してくれた全部員に感謝します。



## 九合ワンに参加して

68期 堀 田 勝 久

68期 井 上 須美子

九州合同ワンデリング、それは九州のほとんど全ての大学のワンゲルが一ヶ所に集り、短期間ではあるが、二百人近いワンダラーが各校の持ち味を出しながら他大学と入り混つて、いくつかバートに分れると言うのだから大変、ワングルのカーニバルのようなものです。それは六月四、五六日に阿蘇の鍋の平にて行われました。

さて、合Wの数日前にバンフレットをもらい、そろそろ興味を持ち始めました。中には我部は九州では名実共に第一位で合Wに行けば力の差はすぐ分ると言う先輩が多く安心させられる様を始末。それでも僕には始めてなのであれこれと期待した。

六月四日曾根本君の下宿を朝早く出て、博多駅に集合しそれから汽車にゆられながら熊本で乗り換え立野で又乗り換えて高森の駅に着いた。同じ汽車に乗っていた各大学の

ワンゲルが降り始めると駅の前の広場はたちまち一杯になつてしまつた。あの制服は何大学とかあの色はこのワンゲルとか話している間に出発の声がかかつた。鍋の平に向つて歩き始めると途中各大学と競争となり、ピッチはどんどん上つて行つた。予定の鍋の平近くまで来ると先がつかつているので一本となつたが実はその道は先がなくなつていることが分つた。こんなことなら連盟の人が駅まで迎えに来るのが当り前だと不平が出る始末となつた。それより少し戻り、涸れた川を少し行つて道へ出ると、そこは阿蘇の根子岳と高岳の見える鍋の平であつた。予定の二時間半に大学集合し開会式が始まつた。地元の話が始まり、ふと横をみるとサングラスをかけ、帽子をかぶつたまま冷かし半分の話聞いて居る奴が居るのには全くあきれてしまつた。開会式も終り各バートに別れた。我バートはバーリーが来てないのでサプリー予定の坂本さんがバーリーとなり、九工大の浜崎という人がサプリーとなつた。夕食の用意を全員で穏やかに作り、夕食にかかると、ここで驚いた事は官大の人は二、三人用のコップを食器として使い、それでおかわりをする事だつた。その夜は自己紹介や合唱やワンゲルについての話で消灯となつた。あくる五日は五時起床、体操、食事を済ませ、バート別で高岳、根子岳へ登ることとなつた。僕達のバートは根子岳西回りのコーネ



である。予定通り七時三十分出発、日ノ尾峠を越え、山頂に向つてガレ場を詰め、途中で一本取る。そこで飲んだ水のうまかつた事、何とも言えなかつた。ガレ場を詰める時間もなく根子岳の西峰に出た。途中少し危い所もあつたが無事通過した。下を見ると足がすくむような天狗岳を通り、東峰に出るとそこからはなだらかな尾根道が鍋の平へと下つている。東峰で昼食、歌を歌つて時間をつぶした後、鍋の平へと下り始めた。下つた所で一本取り、ファイヤーの薪を集め、ベースへと向う。予定の三時を少し過ぎ無事到着。全員で夕食の用意をし、大分仲良くなつたのでしゃべりながら楽しい夕食をとる。各校別のスタンツ練習をし、七時四十分、ファイヤー点火。その点火は珍しく、素晴しかつた。ファイヤーマスターの指揮で全員で合唱し各大学の大変工夫されたスタンツで楽しい時を過す。我校も合唱や讚美歌で他校をうならせる。ファイヤーの火が消えてテントに戻り、徹夜でゲーム、ミーティングが始まる。

途中寝てしまふ。次の朝は中西君の起床で目がさめた。合Wを惜しみながら閉会式へと移る。閉会式後、参加者全員を写真でとり解散。皆さようならと別れて行つた。只同じことはどのワンゲルも自然をこよなく愛し、皆で和気あいあいとやつている事である。大阿蘇の自然の中で行われた合Wは私の素晴らしい思い出の一つとして未永く残るであ

ろう。(堀田記)

九州合ワン。それは九州の各大学のワンダラーが一箇所に勢ぞろいし、それぞれの大学の特色を出しながらワンディングに、ミーティングに花を咲かせる。年に一度のワンダラーの集いである。私自身どんなにこの合ワンに参加出来る日を待つていたことか。そしていよいよ待ちに待つた合ワンに出発する時、果して他のワンダラーと同じような働きが出来らうかという不安と、今まで先輩から話に聞くだけだつた合ワンという未知のものに対する期待とが入り混つて複雑な心境であつた。それでも西南ワンゲル部の一員として誇りを持ち、恥ずべき行為はやるまいと心に決めて家から第一歩を踏み出したのである。駅に着くとそこは合ワンのムードでいっぱいであつた。薬大、九大、産大などの各ワンダラーがぞくぞくと駅に集まつているのである。高森駅に着くと、ブルーやオレンジ、赤、黒、紺などいろいろな色が私の目の中に飛び込んで来て、いよいよ合ワンだなあという実感がわいて来た。色とりどりのユニフォームの列が出来私達は集合地である鍋の平へと向つた。二年の女子は全員鍋持ちだが荷物が軽いのので皆の足どりも軽く、ガチャッ、ガチャッというリズムミカルな音と共に快調なペースで鍋の平へ着くことができた。閉会式の後、それぞれ班に分れる。私が入つた班には同じく西南のEさ

んが一緒だったので心強かった。リーダーが九大の方でサ  
ブリーが熊本商大の方であった。他に宮崎大、熊本大、産  
業大、大分大といういろいろである。テント設営の後夕食の準  
備。まだ班の人の顔もよく覚えていなかった。他の班  
の人と間違えて赤面した一幕もあった。夕食の後、歌を歌  
つたり、陣とりゲームをしたりして楽しく過し、開会式後  
の堅さがほぐれて、だんだんうちとけてきた。夜はテント  
の中でミーティング。最初の自己紹介の後、ワングル活動  
というものについてそれぞれ意見を交換し、各大学の現在の  
活動状況などを発表しあった。ついで話はいまわしき農  
大のワングルしごき事件へと発展した。農大の事件につい  
てはいきすぎであったと云うのが皆の一致した意見であつ  
たが各大学のワングル活動について話を聞くことが出来た  
のは唯一の収穫であった。トレーニング方法にしても、そ  
れぞれ特徴があり、運営方針にしてもある大学では何事を  
決めるにも全員が集まって決定するということであつた。  
大勢いることだから時には話の中心からそれて雑談になつ  
てしまうこともあるそうだけれども、とにかくそこで決ま  
つた事柄には誰も不平を言うものがないそうである。私が  
感心したのは、二年生の態度であつた。彼らが張切つてい  
て三年生にトレーニングをしましよと言つて連れ出すの  
だそうである。現在、上からの命令でトレーニングをする

ようになってきている我ワングルに於ては、私達下級部員は是  
非みならわねばと痛感した。そういうわけでその日のミー  
ティングはまことに有意義なものであつた。

あくる日は我々の班は高岳に登ることになつてゐた。合  
ワンの成功を祈るように太陽が美しく山々の斜面を照らし、  
素晴らしい天気であつた。高岳の中腹にはミヤマキリシマが  
咲き乱れ、その美しさに思わずきつことを忘れ、中岳か  
ら見た阿蘇の大火口は自然の造形の美しさをまざまざと私  
達に見せてくれた。その夜は七時からファイヤーを囲み、  
各大学趣好をこらしたスタンツに笑い興じ、満天、星をち  
りばめた下で私達若いワングラーの歌う声が大きくこだま  
した。その後各班テントに入り、色々を問題について前日  
と引きつづきミーティングをやりその後いろんなゲームで  
楽しく過した。あみだでやってくる人は可愛想に色々無理  
な注文に目を白黒させていた。が、誰もが心から楽しんで  
いるようだった。最後の夜だったので消灯時間が決まってお  
らず、どのテントでもあけ方近くまで歌声や笑い声が聞  
かれた。翌日はもう閉会式であつた。それぞれになごり惜  
しみ、来年又会うことを約束し、各大学はそれぞれ別れて  
いった。二泊三日と短い期間ではあつたけれども、今まで  
の井戸の中の蛙が井戸の外をのぞいたようであつた。な  
により他大学のワングル活動というものを知り、多くのワン

ドライバーと友達になれたことに大きな満足を覚え、鍋の平を後にしたのである。(井上記)

## 関西女子合ワシ

68期 八 尋 洋 子

初めての関西女子合ワシに参加を命じられた時、不安と希望が入り混つて全く自信がないにもかかわらず、西南W・Vの名を傷つけぬようと決心して参加しました。また関西の女性は凄く剛健だとか聞いたことがありましたから、どういふ人がW・Vに入っているかという興味が大いにあつたわけです。

八月三十日当日の汽車の時刻変更等で見送りに来られた人達には迷惑をかけましたが、激励の言葉を受けたり、差入れをいただいたりして一路姫路へ向いました。そして姫路到着。ここで姫路城まで散歩に行き買出し。途中九州合ワシで同じバートだつた宮崎大の人と会い江原駅まで同行。江原駅には各大学のワンドライバーが集結し、制服の色彩感があふれるばかりです。やがて開会式。そしてバート編成、テント設営を行い、雨に濡れながら食事用意。初めての献立の為か美味しく感じられた。その日のミーティングは自己紹介位で後は好きな歌を歌つたが、私の歌だけは他の人

のとは節が違い大笑いの種になつた。今迄未知の人であり話さえしたことのない人と一緒に食事をしたり、ミーティングしたり、同じテントに寝る。こういうことは学生生活でないとなかなか味わえぬものだらう。二日目は五時半起床。体操は部分的なものを回数を多くして行う。ここで私達はいつもラジオ体操ばかりしているから、ワンデリングに効果的・合理的な体操というものを皆んなで考えて実行出来たらいいだらうと感じた。小雨の為にワンデリングの出發が遅れたので、その間林の中でカンケリをやる。集合がかかつてはまだ隠れたまま出て来ない人がいて、困つた一幕もあつた。間もなく雨具を持って蘇武領中腹まで行き、各色の滝を見て帰營。昨晩の雨の為に、シュラフまで濡れてしまい、それ等を干したり、オシャレリしたので本当にのんびりしたもので、流石に合ワシでなければ味わえぬものでした。合宿のクライマックスであるファイヤーは女子だけでも多くのスタンツが飛び出す。私達は博多弁丸出しのスタンツを塩川さんから習つてやつたのですが、後で出来ばえを聞いてみますと、好評だつたそうです。しかしその時強く感じたのは、女子だけでも、ファイヤー・マスターをしている人達を見てみると頭の下る思いである。私は今迄、如何にワンゲルの事に無頓着であつたかよく判つた。この合ワシにふさわしいファイヤーで地元の人達までが、

浴衣を着て民謡を踊ってください。消灯なしのミーティングで色々他の大学の話を聞く。私のパートには女子短大の人が多かつたからトレーニングなど、私達より軽いようだ。しかし同志社大の人はとてもフアイト満々で、トレーニングにも力を入れているとか。しかし、まだ女子独立パートで行動したことがないと言つて、西南は羨ましいとのことだつた。彼女はS・L、ばかりでなく、フアイヤー・マスタールをしてもすごいハッスル振りである。またある大学では、学校ではキスリング・シユラフなど、ほとんどの用具を買つてくれるとか。羨ましい程の話である。また大いに取入れたいと思つた事はクッキングカードの作製である。これを使用することによつて、料理のコツも早く覚えられ、パンフレットに書く時も便利だし、是非作りたいと思つた。

岡山大のP・Lは、W・Vについてビクニック程度にしか考へてなく(?) 気楽にやつて面白い方が良いとのこと。羨ましい気持もないことはないが、今の私としては物足りないという感じもする。それに驚いたことには、S・Lばかりが、いつも動きまわっているという事である。西南では、P・Lが本部の主旨を伝えるが、関西の方では、それら全てを、S・Lがするそうである。話が進んで十二時を過ぎる頃には、皆シユラフに入つて、残る同志社の人と私だけとなつてしまふ。次に制服について話したが、制服は

何回か合宿、トレーニングに出て正会員になると、うやうやしくいたただく物だそうで、制服をはじめて着る時は、すごく嬉しかつたとおつしやつていました。『西南と大分違うなあ。』と思いつつ聞いていました。午前三時頃ダウン短時間のまどろみの内に、もう起床がかけられ、今日で別れと思うと、何だか淋しい気持がした。朝食を終えて、意気の合つたところで、おにぎりの作り比べをやつて、「今日で最後となつたわね。」と言ひ合つた。カンケリをした写真撮影、住所交換を行つて、別れの歌を歌い出す。これだけ合ワンを企画された本部の女性のしつかりした落着いた態度、どことなく優しさが漂ひ、とても感じが良い人達に心動かされました。合ワンの目的である親睦をはかるという点では満足しました。学年を忘れての関西女子合ワンには、来年こそ、多くの一年生を参加させたいと思ふ。

お名残り惜しいけれども、これを機会に、なおい層の努力をして、お互いに頑張ろうと、皆さんで誓ひあい、握手をして別れた。夢のように過ぎた三日間であつたが、ここで得た新しい経験をクラブに反映させていきたいと思ふ。

## 春 合 宿

A パート (台湾)

68期E3

曾 根 本 一 昭

(五号より)

福岡から五日と十一時間十九分を要し、基隆に着いたのは三月一日の午前九時二十五分だった。その日は薄曇りの日で日本と大差ない気温だった。台湾は予想していたより暑くないじゃないか、というのが第一印象であった。

我々が海外で合宿をしようと思いついたのは一年の時からであった。その理由は、北アルプス等主要な山々はあまりに俗化されすぎた、かと言って他の山には大体西南ワングルの足跡が残っている、未知の土地を歩きたいと言う願望。そして我部が発足して早や七年、ここいらで一つでかい事をやろうと思つたからだ。その海外の中で台湾を選んだ理由は、まず第一に費用の面で他の国より格安である。しかも手頃の近さである。その他交友国として渡航手続きが割と簡単であるという事などである。その中には我々より高い玉山(旧新高山)が存在するというのも我々を

引き着けた大きな魅力の一つであった。しかし、合宿を終つて思うことは台湾の山に入るのに、ほとんどの山がいちいち許可証を必要とし入山が困難である。しかもまだまだ未整備のままである。自然のままである。ワングルにとつて恰好の場であるが、それだけに高等な技術、体力を必要とする。だから勢い整備された山に向けられがちである。それが玉山など極く限られた山なのである。日本の山よりはましてあるが、登山者が集まり、観光化されつつある事はいなめない事実である。しかし台湾合宿は大きな夢であったし、また我々を励ます目標でもあったのだ。どうしてもワンデリングしてみたかった。本合宿が一応の成功をおさめた事は、西南ワンダーフォーゲルがどうやら本軌道に乗っている一つの立証であろうし、この事によつてさらに大きく飛躍した事は間違いない。二年三年部員はこの経験を生かしてワングルの視野をより広げ、そしてワングルをより成長させてくれることを期待したい。

二月二十三日、二十一時六分西南ワングル始まつて以来、最も盛大なかつ最も差し入れの多い見送りを受けて、我々台湾パートは博多駅を出発した。海外合宿という華やかな名文の割には乗り込んだ列車は何と鈍行である。しかしそれにもかゝらず皆喜色満面の面持ちである。一ヶ月の別れ

の感傷も味わり間もなく、やがて我々は久留米駅に降り立った。急行に乗り換える為である。その間待合室で待つのが面倒臭いというわけで差し入れの大半はたいらげてしまった。こういう二重手間をしたのは、ひとえに見送りの便宜を考えてであり、差し入れの量を期待してはなかつた。二時間後我々は急行「はやと」に乗り換え鹿児島に向つた。帰省客の為か車内は割と混んでいたので我々は分散せざるを得なかつた。

ここで我々のメンバーを紹介すると、バーリーは松延起士君、体格にも恵まれ男前でいい男である。惜しむらくは少しデッ尻である。サブリーは藤井宜雄君、体格には恵まれないが腹の大きさには恵まれている男である。彼は渉外も兼ねた。食料は二年の大桶薫、合宿になるととんに汚い恰好をしたがり、その点私と似ている。装備は二年吉田次郎、合宿佐賀の田舎弁丸出で、これが日本の標準語かと台湾の人に誤解され我々一同多いに迷惑した。一年生は大多和尚志、渉外補佐を受け持った。眼鏡をかけオールバックにするると以外と「山のあな、あな、あな……」に似ており、彼も末っ子の本領を発揮して皆を迷惑させた。利根孝一、常に最後の最後まで汗をかきかき飯にかじりついており、三キロも肥えて帰つて来た横着な男。彼は会計をした。波多江喜一郎、記録、菓子屋の御曹子でわずか一ヶ月

の合宿でホームシックにかかつた甘えん坊、平均的西南ポリーである。そして資料の私と総員八名である。

翌二十四日早朝「はやと」は鹿児島に着き、弁当の持ち合わせがなかつたので駅前の食堂で全員鍋焼うどんをとつた。百円である。鹿児島港はそこから歩いて二十分程である。我々は早めに港に行き十一時迄に手続きを全て完了させた。乗客には学生が目立ち船室はほぼ満員となり、席は二等の真中辺に陣取つた。十一時三十三分、新造船の「おとひめ丸」は出航した。私はこれで三度目であるが一年生は初めてなので珍しく眺めた事であろう。船は新造となつても食事はやはり去年と同じ、そまつな物であつた。生協の六十円定食よりまずし、と誰かが言つていた。船は少し揺れた。

那覇港に着いたのは八時である。例によつて長い検疫と手続きに長時間を要し上陸できたのは九時四十五分であつた。さつそく埠頭で私は女子高校生に歓迎され皆を羨しがらせた。さつそく琉球海運に今度は台湾行きに乗船切符などで手続きに行く。そこで翌日の船は一日延期されるとの事を知る。それがすむとバスでこの日の泊りである光の幼稚園に直行した。一年ぶりに見る幼稚園は懐しかった。昼食後、近くの守礼門や琉大の見物に出かけた。四時頃光の子幼稚園に帰つてくると、日曜日なので英会話があると

の事、一同そればかり出され、英語のレッスン、台湾に行くことと中国語のレッスンがあるのではないかと不安になる。日本料理ともしばらくお別れ、夕食はスキヤキを囲んだ。肉は豚肉であつた。

翌日、丸一日の余裕に我々は南部戦跡をワンデリングしてまわつた。途中から生憎の小雨の天気だつたが、かなり速いペースでまわつた。那覇から糸満までバス、それから歩いて赤比儀・幸地腹の墓、バックナー中将戦死の地、山形、白梅の塔、姫百合の塔、魂魄の塔、健児の塔、摩文仁の丘と去年とほぼ同じコースであつた。途中自衛隊の幹部候補生の団体バスと追いつ追われつの行動だつた。摩文仁の丘でも彼等と一緒になつたが、彼等の教師の弁では、「本土決戦をひかえて時間をかせいだけでも、この沖縄攻防戦は無駄ではなかつた。」何ということ云うのだろう。そのあげくが二つの原爆の悲劇である。春雨のけぶる黎明の塔の前に整列して歌う彼らの「海行かば」をむなししい気持ちで聞いた。この日の沖縄の海もどんよりと曇つた色をしていた。

翌二十七日、首里の山の上から那覇市の繁華を抜けて、泊港まで、丁度一本の時間で着いた。幼稚園は授業があるので早朝に出たのであるが、お陰で乗船まで六時間をターミナルの待合室でつぶすのに、えらい苦勞をした。午後三

時十五分の乗船、船はそれから一時間半して出航した。たくさんの方が見送りに来ているが、私達の見送り人は誰一人といない。ただ他人の送別を横で眺めているだけである。しかし船程別らしい別れをするものはなからう。ドラの音、汽笛、五色のテープ、そして螢の光、ゆつくりと船は岩壁を離れてゆく。だんだんと人の顔が小さくなつてゆく。いつもの事であるが、防波堤の突端まで幾人かの人が出ていて、盛んに手を振る。感動的な光景である。船名は「那覇丸」、トン数は千トン、まるで客の少ない時には倉庫に使う様を船室につめこまれた。春休みなのでほとんど学生達である。まだ見ぬ外国に胸をふくらませ、にぎやかなものである。しかしそれも外海に出るととたんに静かになり皆横になつてしまった。原因はひどい揺れである。「俺は酔わんぞ、俺は酔わんぞ」と皆必死に抵抗しているのだろう。

船は翌日午前十一時三十五分石垣島に着いた。積荷の関係で四時間の碇泊であつた。一応町の中を見物してまわつた。現在ユース・ホステルになつている旧家の庭園も見た。静かな平和郷の印象がした。その日の夕方石垣島を離れ、途中基隆港の潮の都合で四時間の仮泊をして三月一日午前九時二十五分(日本時間十時二十五分)基隆に着いた。狭い湾の奥の四方を山に囲まれた港町だつた。どこか長崎

に似た感じであるが、天氣が良くないせいかな町はくすんで見えた。一時間十分かかつて上陸手続をすませると、出迎えに來られていた先輩の張さんの家に案内され、昼食を御馳走になった。夫妻とも流暢な日本語を使うので外国に來たという感じはしない。しかし市内の漢字ばかりの看板や、歩道の上に乗りに出して來ている赤レンガの二階はまさしく中国の風である。松延と藤井が保証人である台北の藍さんに挨拶に行っている間、残りの者は基隆市内の見物に時を過した。夕方台北の松延より電話で、全員台北に出て來いと言つてきた。急ぎ台北に行くと、藍さんが晩飯を御馳走しようとの事で夜の街に出た。繁華街を通り円公園に、そこはロータリーの丸い場所が食堂街になつている所で、レコードが鳴るわ、店の人が呼びこむわ、まるで祭りの日の夜の店のにぎわいである。初めて見る珍しい食べ物、光景に我々は少なからず興奮していた。とにかく食べ物は珍しさのあまり四神猪腸小肚(この字は猪の内臓を意味するが実は豚の内臓)、当帰鴨、下水湯、うなぎ料理(どじょうの様)に小さい)、パイヤ、やしの汁、スイカ、とあたりかまわず遠慮もせず、ガツガツ食いまくつた。しまいにはさすが、皆腹をかかえる始末であつた。九時四十五分のバスで基隆に帰り、張さんが手配してくれていた旅社(旅館)で、まず合宿の第一報を日本に向けて書いた。まことに趣

のある旅社で、私はダブルベットの隣に寝る波多江を見て、思わずため息をついた事だつた。三月二日、七時四十五分我々は国際大旅社を出て、八時三十五分基隆站より蘇澳に向いて汽車にのつた。まず次の駅である八堵で、快車(快速)に乗りかえた。汽車からの眺めは、何から何まですべて珍しく、車窓に映る水牛の動く田園風景はすでに日本の五月頃であつた。終点の蘇澳に着いたのは十一時三十八分であつた。駅前の食堂でメシと野菜のための昼食をたべた。その時、新聞記者のインタビューを受けた。一時、この日の目的地花蓮行のバスに乗り込んだ。こゝより四時間半である。途中は天下の難蘇花公路である。その蘇澳、花蓮間は山が海に乗り出し、そのまま絶壁となり海に落ちていく。その崖の中腹に道路が通つているわけであるが、バスの窓から直下を見ると、はるか下、そこは太平洋の白波が打ち寄せているのが見える。バス一台がやつとの様な道を世にも恐ろしいスピードでトバしてゆく、しかもそのバスというのは、費用節約の為に安い方なのでポンコツもはなはだし、私の横の窓などはガラスが無く開いたままであつた。バスはまがりくねつた道を、ガタガタ震えながら走り、恐ろしいもの見たさで窓から顔を出すと、何百米という断崖に目がくらみ、皆もそうであろうが生きた心地はさらさら無かつた。花蓮に着いたのは午後五時三十七分であつた。そこ



で、旅館の客引きに連れられて「第一賓館」という宿に行つた。その昔、今上天皇が皇太子であられる頃、この旅館に泊られたといういわくを持つ旅館であつた。そしてその天皇陛下のお泊りになつた部屋に我々はリュックをおろした。ついに私達は天皇陛下と同じ部屋に寝たのである。万感胸にせまり私はその日の夕食がノドを通らなかつた。その宿泊料を書かねばならないが、邦貨百二十円であつた。ここ花蓮で我々は今後の行動にそなえて最初の買い出しをした。

明けて、三月三日、花蓮から太魯閣迄約四十五分、バスでもどつていよいよこの太魯閣からワンデリングが始まつた。十時二十分発ち、約三十五分程で長春爆怒である。ここは横貫公路建設の犠牲者を祀る長春祠があつた。我々は橋の上から眺めただけであつた。いよいよこの付近から太魯閣渓谷の醍醐味を味わい出す。兩岸の絶壁はいよいよ狭く、いよいよ高く、まるで巨大なクレバスの底を歩いている様なものだつた。空は頭上はるか細長く見えているだけである。対岸とは手の届きそりな近さで、その絶壁の中途をくり抜いて延々と舗装道路は続いている。そしていたる所にトンネルが掘られている。絶壁の高さは数百米に達している所もある。しかもそれは大理石という事である。確かに日本のどの渓谷よりも桁違いにスケールの大きなもの

であつた。私はもしこの時地震にあつたら、永久に岩の下で化石と化するのではないかと不安にしばしばとられた。何か写真をとつたが、スケールの大きさにどうしても一枚におさめることが出来ず、苦勞した。行動初日の為か、景観に魅せられたためか、ピッチはあまり上がらなかつた。太魯閣から七キロの寧安橋発電所の先で昼食をとり、暑さの中を斬圻橋を渡り、幾多のトンネルを抜けて、天祥も間近慈母橋の辺で利根が足をつつた。幸いしばらくの休憩で回復した様である。そこはタツキリ溪と老西溪の合流点で、松延君は合流蘭亭というあづまやに一人はり切つて登つた。二十分程大休止して天祥に向つた。そこからは三キロ弱であつた。天祥に着いたのは三時二十分。この日は約十九キロを五時間で歩いたわけである。初の幕営である。テントを広場に張り、休憩の時松延君が水と間違えてガソリンを飲む騒動があつた。夕食後夜空に浮かぶ中国特有の七重の塔が美しい寺に散歩に行つた。寺の住職と色々話合つた。もちろん日本語である。台湾の人で三十五才以上の人は、大概日本教育を受けているので、日本語が話せる。その点日本からの旅行者は日常に便利である。出された台湾茶がうまかつた事を覚えてゐる。

翌日、最初の計画では碧緑まで歩く事にしてゐたが、土地の人の話では、とても歩ける距離ではなく、また天祥か

ら先は溪谷美もなく、ごく平凡な道というので変更して、八時七分の花蓮発、台中行の一日一回の急行バス「金馬号」に乗り込んだ。これより先、天祥の便所は有料だったとか、前日ガソリンを飲んだ御仁が血便をしたとか、アイルランド人がバス代を値切った事とか、あわただし出発前だった。バスの中は客が多く、乗車口の床の上に腰かけていたが、エンジンの近くなのか尻が熱く、景色どころの騒ぎではなかつた。三時間かかつて一気に標高二四六四メートルの大馬嶺まで登った。バスを降りると日差しは強いが、さすが涼気が漂っていた。ここはバスの休憩所でもあり、野天の食堂が店を出していて、そこを使わしてもらって包丁おして、真正面に真白い雪をいたいた 萊主山（三五五九米）が晴天の下にそびえ立ち、その姿はまるでカレンダール等でよく見るアルプスの山をほうふつとさせるものがあった。そこで合歓山の下で陸軍寒地訓練所に戻るといふ呉さんと同行する事になった。彼は大学を出て陸軍に二年徴兵の為に来ているとの事である。家は台北郊外だと言っていた。我々より数等上手な英語を話していた。そこ大馬嶺より合歓山下の石門まで七キロ、十二時四十分発ち三時間着くだろうとタカをくくっていたら、さすが二五〇〇米の高度の為か、空気が薄く歩き出すとすぐ息切れがし、

三〇〇〇米を越すと二、三センチの雪に悩まされ、仲々思う様にピッチが上がらない。結局陸軍寒地訓練所に着いたのは日も傾きかけた五時半であつた。ここで一泊させてもらったが、この訓練所は台湾唯一のスキー場があり、その時分も五〇センチ近い積雪があり、非常な寒さだった。兵舎で蒲団を借りたり、兵隊たちに現地の歌を教えてもらったり、その夜は楽しい談話に時を忘れた。

翌五日、饅頭と油で揚げたビーナッツと大豆のスープの軍隊の朝食をよばれて、スキー場を抜けて一気に兵舎の上の車道に出た。最初の内は急な登りで、昨日と同様にひどく胸が苦しい。車道は合歓山山頂の下をまいて霧社の方に下つているので、山頂に登るには少し道からはいらなければならぬ。分岐点に一端キスを置いて山頂に向つた。車道から三十分、兵舎から一時間半で頂上の無線中継所に着く事ができた。そこにも軍事施設があり、写真撮影は禁止されている。熱い湯と饅頭の接待を受けて下つた。分岐まで戻つて、昨日から色々世話をしてもらつた「文ちゃん」（呉さんのニックネーム）と別れをつけて、目的地霧社まで三十二キロを下つて行つた。ゆるやかな下り坂である。付近は草地で見晴らしが良く、はるか前方の下の方の雲にかすんだあたりが霧社であろうか。左手を見上げれば優に三千米は越える中央山脈が続き、その重量感は素晴らしい。

とにかく歩け歩けである。天候はだんだん良くなっている様である暑くてたまらない。トップを歩く藤井君はコンバスの短かさを回転力でおぎない、しかも余りあるものがある。後から見ていると車輪が回輪している様である。途中、梅峯で昼食を食い、霧社の少し手前幼獅站で柑柑（タンカン）とカステラ、ソーダで空腹をおぎない、近道を通りグングン高度を下げて霧社に四時四十分に着いた。三十二キロを実動三二〇分で歩き、一キロ十分で歩いた勘定になる。高度は三四〇〇米から一一五〇米迄下つたのだから、いかにスケールが大きいかがわかるであろう。この日は誰もが豆に泣かされた一日であつたが、さすがエンタープライズだけはビクともしなかつたそりな。宿は「豊福旅社」一人一泊百円也。

翌六日は霧社で沈没した。霧社の社の字は部落を意味するという。字の如く霧の深い部落であつた。白暮にかすんだ、霧に濡れた風景などは全く幻想的であつた。この日は手紙と豆の治療に日を過し夕方、風呂にはいり沖繩以来のアカを落した。夜は旅社の娘の歌う「骨まで愛して」を子守歌として眠りについた。

七日、この日の行程は、霧社からさらに下つて 里までである。一キロを一〇分という昨日来の正確無比なピッチで二三キロ下つた。つまり二三〇分、三時間五〇分歩いた

事になる。霧社はまだ山の中の部落であつたが、埔里まで来るともう辺りは平野である。田すきの真最中で、歩きながらあちこちの水田に水牛による田すき風景を見るのは、のどかそのもので戦時体制という国情を忘れるものがあつた。それに台湾バナナは、この埔里付近のものが一番うまいという事だつた。埔里の国民学校の教室を借りて、教頭先生からいただいたバナナなどは、まさに日本では絶対味わえないものだつた。一昨日とこの日の行動で大楠が豆をこじらせ病院に行つた。国民学校では普段使つていない教室を借りたわけであるが、隣の教室では授業があつており、休み時間ともなると、まるで我々が火星人かのようにワンサと見物に集まつてくるのである。夕食の用意も仲々はかどらなかつた。夜は学校の先生に色々話を聞いたが、教育の問題にしても戦後の国語の転換、しかも古法を忠実に守る為ひどくややこしい事、それに台湾は義務教育が小学校の六年間だけなので、中学にはいる為には、小学校（国民学校）の五年生位から遅くまで補習授業をしなくてはならない事、など御苦労が多いらしかつた。

八日、一応前半のシャバ歩きは本日までである。朝、出発してから国民学校を紹介してくれた警察署に礼を述べ、埔里の市街地を抜けて日月潭に向う、松延君と私は忘れ物の為少し遅れ、町から三キロの愛蘭橋で先行の六人に追いつ

ついた。右に行くくと五七キロで台中、左の道は十七キロで日月潭、この辺から豆の治療の為に大楠が遅れがちとなり、私がつく事になった。日月潭まではゆるやかな登り坂になるが、他の者は快調なペースなので、自然距離が開く事になった。ひどく痛そうなので歩ける所まで歩くことにした。

愛蘭橋より五キロ位の所でやむなくバスに乗り、我々二人は先の六人を抜いて日月潭に九時半頃着いた。さつそく警察署に行き、日月潭国民学校を紹介してもらった。台湾をワンデリングする場合、町にはいると警察署に行きバスポイントを提出して、宿泊地を紹介してもらうのが一番便利である。宿泊の設備等は何もないが大概の国民学校なら泊めてくれるはずである。学校に行つて、教頭先生と交渉している頃残りの者が到着した。この国民学校の校長先生は女性であった。若く見える大柄な先生で、丁度この日は教育委員が視察に来ていたので、校長先生もオメカシをしていた。夕食まで時間があったので、一五〇〇円で舟を借切つて日月潭を周遊することにした。この観光地は宿泊施設が完備されていて、箱根の芦ノ湖に似ている。まず対岸の山地民族であるツォウ族の部落に行つた。部落といつても、日本の観光地で見られるのと同様に純然たる観光客向けに作られてあり、みやげ屋が軒を並べ、民族衣裳をつけた娘たちが写真撮影用に厚化粧をして盛んに客を呼んでいた。

全く、作られた観光地である。台湾随一の名所だと聞いていた我々は落胆した。次に玄光寺、光華島を廻つた。2時間の周遊の後、学校にもどつて給食を御馳走になった。表のおかゆだそうだったが独特の甘味があり、多くは食べられなかつた。

翌、三月九日、三日からの前半の横貫公路のワンデルングは終り、これからはいよいよ玉山(新高山)に向うわけである。早朝、七時三〇分のバスで十六キロ下の水里まで行き、八時五二分、水里より汽車に乗りかえて、玉山の起点である嘉義に一時三二分に着いた。暑い日差しの中を警察署に行き、入山を申し込むが不成功、日本の山岳協会からの紹介状を持って、台北の警務所に行き、そこで正式の入山許可証をもらわねばならないと言るのである。後で聞いた話であるが、大学の山岳部やまた山岳会などと違いワンダーフォーゲルには山岳協会から紹介状は出ないものである。玉山も目標の大きな一つであった。とにかく登りたかつた。わりにでもすがる気持ちで、警察署で教えてもらった医者の簡先生という人の家まで足を運び、説明すると同情して下さり、初対面ではあるが、簡先生や新聞記者の頼さんの御尽力でどうやら登れるメドがついたので、とにかく翌日は阿里山まで行く事にしたのである。宿は民族国民学校に決め、いざ夕食という時に簡先生と呼ばれ、先

生宅で記者会見した。翌日の新聞に載せるといっているのである。他方この日のニュースで我々の報がラジオに流れたという、しかも夕食は新聞社の人から、明故宮飯店という嘉義でも一流の豪華なレストランで御馳走になった。予期せぬ招待に恐縮してしまい、中華料理ものどに通らぬのであるが、そこは厚かましい山男達、その食う事といつたら、スイカの種のカラまで食つた奴もいたという。

翌十日、登山できるかどうかは判らないが、一応阿里山まで行く事にした。嘉義より阿里山までの鉄道は創設以来全々発達していない様な豆汽車にガタゴト揺られて六時間半あまりである。機関車はまるで、弁慶号、義経号といったクラスである。車内も座ると向いの人と膝がくつききうな狭さなのである。二千米以上も登るので時速は十二・三キロ位のものである。飛び降りて用を足して追つかけても十分間にあいそうな速度であつた。退屈な六時間半もの間ただただブリッジに無中になった。しかし登山列車は除々ではあるが高度をかせぎ、二萬平、神木を左に見て、午後三時四〇分阿里山站到たどり着いた。まさしく「たどり着いた」という感がした。阿里山で唯一の医者である余先生に出向えられて、阿里山森林招待所に案内された。日本でいう会社の山の家の様なもので、一泊二食つきで三百円という安さである。それでも貧乏者達の我々にはチトこ

たえた。部屋のすぐ前に桜に似た花が咲いていた。よく見ると幹に「吉野桜」と名札がついている。二千三百米という高さなのに既に五分咲き位である。その三字を見たとき、まだ日本を離れて二週間というのに非常に懐しく、又日本がはるか遠い国の様に思われた。前日、簡先生から連絡を受けていた余先生の御世話で、どうやら玉山は登頂できる様になつた。この報を受けた時、前日からわだかまっていた気持が晴れていく様だつた。夕方波多江が風邪の為に熱を出し、診療所に行つたが、大した事もないという診断だつた。彼もここまで来て登れなかつたらさぞくやしかりうが、しかし、あくまで慎重に行動せねばならず、翌日の具合を看てから、登らすかどうか決める事にした。夜、ポーターの祭さんが宿に來て、行動、道の状況などを話してくれた。目の辺りがやさしく、朴とつで小柄ではあるがいかにも山男らしい人だつた。

三月十一日、運良くこの日は二十キロ先の東埔林場招待所迄、不定期の森林鉄道が出るので、乗る事ができた。朝の光の中を豆汽車はのどかに進んでいくが、さすが肌を通る風は冷たかつた。八時三五分に終点東埔に着いた。阿里山から二時間だつた。さつそく体操をして祭さんに先頭に立つてもらい出発。四五分東埔から三・一キロの塔々加(タータカ)鞍部に着いた。これから排雲山荘までは九・

一キロである。旧道は新高前山に直接登って、西山を越えて行く道であつたが、現在は前山と西山の南側をまいて、除々に高度をかせぎ登っているので、相当楽なはずであつたが、高度に慣れていないせいも、最初の急な登りはシンドイものだつた。排雲山荘につづくその道を、山荘を改築する為に重いセメント袋を山地原住民の人達がボッカしていた。彼等のかつき方は変つていて、肩からかつかつぐのでなく、はばの広い紐を頭から下げ、額でかつかつぐのである。まねをすれば首の骨を折るかも知れない。彼等は近くの各部族の人達で部族間で言葉が違うのであろう、共通語が日本語だつたのが面白かつた。こういう奥地でまだ生きてゐる日本語の重要性を知つたわけである。彼等のボッカの為に、排雲山荘までの道は幅五十センチ位の立派なもので、所々にある断崖にも丸太の橋がかけていて、注意していれば別に危険な箇所もなく、タータカ鞍部から四時間で排雲山荘に着いた。それより先、山荘の少し手前から台湾檜の木立を通して、王山主峯が初めて望まれた時、南山を右に従え残雪に映えるその姿に我々は一瞬ほうふつとさせられた。大自然に囲まれ、心持ち左にかたむいたその主峯はさすが台湾の最高峯の貫録十分であつた。山荘は檜に囲まれた針面の中で、鉄筋コンクリート作りの基礎工事が進んでいて、旧来の木造は取りこわされ、作業員の飯場小屋が

あるだけだつた。作業員は小屋に泊りこみで働いてゐるのである。資材の為にテントを張る適当な場所もなかつたので、小屋の一部の納屋の様な所に泊めてもらう事になつた。三方はどうやら板で囲まれてゐるが、一方はまるで何も無い吹きさらしである。そこにグラウンドシートをカーテンがわりにぶら下げ、テントは引つかぶつて寝る事にした。夕食後、山荘からはるか下に眺められる、夕日に照り映える雲海が印象的だつた。

翌朝、ひどく冷えこむ中で朝食をとり、祭さんの話では山頂まで往復二時間半だといふので、空荷で出発した。林を抜け途中からガレ場をつめ、左に直接主峯に登る道をとどつた。祭さんは年に何回、いや何十回も登つてゐる人なので慣れたものである。道はだんだん急になり、そして土からひどくもろい岩にかわつて、四つんばいで登る。突然、黒褐色の偏平な岩群がされたと思つたら、そこが玉山の主峯であつた。ひどくあつけない感じがした。頂上には二米ほどの銅像が立つてゐたが、それはある高官の遺言によるものだそうだ。さぞかしこの高所から下界を眺めるのは良い気分であろう。天気も良いせいも、確かに山頂からの眺めは素晴らしく、東西南北に四つの支峯を従え、そのむこうに遠くには台湾五大岳の雪山(三八八四米)、南湖大山(三七四〇米)大霸尖山、大武山など代表的な山々が雄大

に広がっている。何重にも重なって続いている様は、まさに大海の波の様であった。標高三九九七米、日本のどの地点よりも高いのである。あるいは一生の内でもこれ以上に高い地点に立つ事はないかもしれない。素朴な感激が湧いてきた。写真や八ミリをとり、一時間程山頂で時を過し下つた。登りは一時間十五分であったが下りは三五分という超スピードで下つた。山荘に戻り、すぐにバックキングをして、この日の内に東埔まで下る事にする。極く一般的な日程だそうだが。中、二本の休みをとって五時間で登つた道を三時間で東埔に下つた。東埔には宿屋が一軒あるそうだが、付近の広場にテントを張つた。

夕食後、阿里山の方角に沈む夕日は、私が山で見た夕日の内でも最も美しい夕日ではなかつたろうか。ゆつくりと色を変えながら沈むそれは、映画のシーンを見ている様であつた。

三月十三日、この日は阿里山に下る汽車がなく、線路を歩かねばならない。阿里山まで四〇〇米の下りであるが、ほとんど勾配を感じない。単調な線路歩きもいやなものである。途中にいくつも木橋があつて、それだけが変化といえは変化である。うまい事調子をつけなければならず、踏み違えると谷川に転落か枕木にはさまれるのである。阿里山の少し手前から線路を離れて山道に近道をとリ、一〇時

二〇分に阿里山の少し手前から線路を離れて山道に近道をとリ、一〇時二〇分に阿里山の姉妹潭に着いた。サイダーとワイン罐でカンバイした後祭さんと別れた。そこは阿里山の名所の一つで、我々の側を初終観光客がもの珍しげに見ながら通る。その衆目の中で肌を焼くとはいいなから、裸になつてトランプに興じているのである。親や彼女には絶対見せられない光景であつたろう。夕食後、幽霊屋敷に風呂にはいりに行つた。そして余先生と祭さんに礼をすませ、夜はエアホース・アカデミーという空軍士官学校の学生達の訪問を受け、彼らと合同のキャンプファイヤーをした。英語で話すのであるが、陽気な連中でよくしゃべる。そういう時は、まず最初にSがきて、次にV、次にO……なんてことは言つちやおられないのである。ただただ知っている単語を並べるだけである。それに台湾と日本の英語では発音が違い仲々通じない。「サンドイッチ、サンドイッチ」というので、何かと思つたら座頭市であつたり、中には野菜の事をキャベツと混合したのか、キャジタブルと言ひ出す御仁まで現われ、とんだ恥をかいたりした。

翌十四日、駅で余先生の見送りを受けて、阿里山を八時四〇分の急行で下り、正午すぎに嘉義に着いた。下界はもう夏の暑さである。礼を述べに簡先生宅に行く。三時から救国団の招待にあずかり、その支部に行つた。救国団とい

うのは青少年の健全な活動を目的とするもので、スポーツ、レクリエーション、英語塾、日本語塾から華道まで活動も広範にわたっている。その組織も全国的なもので、いわゆる日本の青年団の様なものである。話を聞く前は思想的な団体ではないかと心配していたが、そういう懸念は一掃されてしまった。その席上で、学校の教師で嘉義山岳協会の会長である張さんを紹介され、この日はとうとう張さんの家にやつかいになる事になった。我々が家に行くと山岳協会の人達が集まっついて、台湾の山について夜遅くまで話しあつた。たつしやな日本語を話す愉快な人達ばかりだつた。

翌十五日、張さん宅で一泊した我々は、朝食までお世話になり高雄に向つた。十一時二〇分に高雄着。先輩で医者をされている楊先生に出迎えられて、先生宅に行つた。ここで日本からの手紙を受け取りむさぼり読んだ。他パートも順調な様子である。昼から市内の寿山公園、高雄港に見物に出かけた。そこの渡し舟にせよ、港の風景にせよ、ひどく中国的な情緒が印象的だつた。

十六日の沈澱日は一日を高雄の澄清湖で過した。澄清湖は高雄の貯水地であるが、付近一帯を手入れの行き届いた公園にし、南国の太陽の下の花や若葉や水の風景の全く美しいという一語につきた。広大な公園のあちこちにある、

中国風の建物は異国情緒を感じるに十分であり、素晴らしき一日だつた。

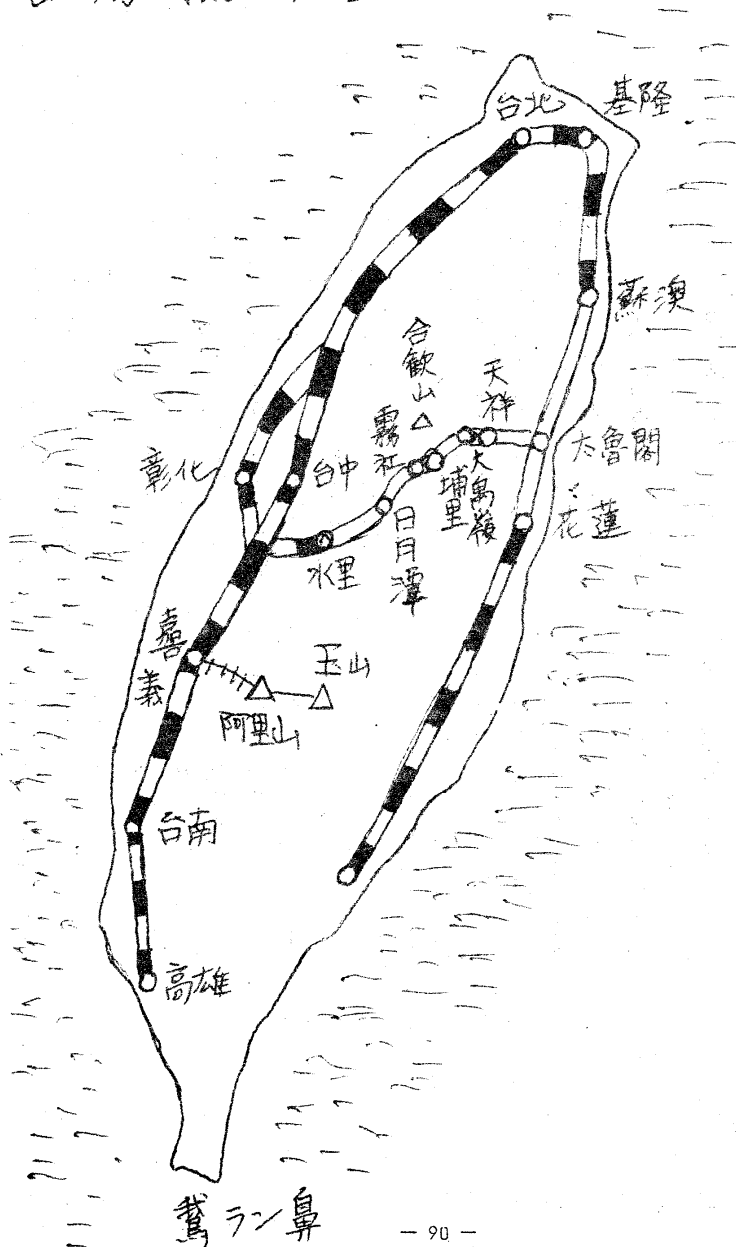
十七日、この日の行先は員林である。予定では立ち寄る事にはなつていなかったが、我々の事を新聞で知り、員林の鎮長(町長)である林さんが、氏の弟さんが西南出身であつたという関係で招待してくれたのである。員林は台中の近くの農産物の集荷地であつた。林さんは我々を員林からほど遠くない、少政府のある中興新村、省議会、そして台中公園、東海大学、彰化の大仏などと案内してくださつた。

三月十八日、員林を朝発ち、四時間程で台北に着いた。あちこち宿泊所を捜し、結局新生旅社という大きな安宿に決つた。着いて驚いた事に、日大のワングルヤら、横浜国立大のワングルがワンサと居るのである。外国で日本人に会えば、懐しさがこみ上げてくるものだそうだが、こう何人もいてはうるさいというのが先にたつてしまつた。

一応これが台湾に於ける行動というべきものは全て終つてしまい、いよいよ台湾を離れる日も近い。残すは台北で二日間の予備日を消化するだけとなつた。十九、二十の二日間有効に使うべく食欲にあちこち見て廻つたのである。そして二十一日午後四時二十分、二十日前基隆で初めて台湾の地に足を踏み出した時と同じ様な薄曇りの中で、台



# 台湾概略図



北の松山空港から、我々八名は一路那覇に、そして霧島の集結地に向うべく帰路にいたのである。

## 道 標 立 て

68 期 富 本 真

「筑紫山系に道標を立てんといかんなあ」と皆と話したのは、確か我々が一年の秋の強化合宿の時だったと思う。それが学院創立五十周年の記念行事の一つとして、我部も参加する事になり、この道標立てを行う事になったのである。

十坊山から背振山に至る約四十キロの筑紫山系は、西南ワングルにとつて自分達の庭の様なものである。入部して最初に行く野呂の新人歓迎、金山に於けるボッカ訓練、そして秋の強化合宿やリーダー合宿に我々を育て鍛えてくれた所である。この筑紫山系に先輩の協力と部員の努力によつて立派な道標を立てる事が出来たのである。この計画は、十坊山から背振山までの縦走路について、その道標を立て、コースタイムと水場を明示すること、特に羽金山く女岳の間のルートを明確にして、あまり利用されていないこの付

近を一般の人達にも歩いてもらおう、というのが目的であった。

計画の実行に当つて、まずこの山系のコースタイムや水場等の資料を求めたのであるが、我部においてあれ程よく歩くコースにしてはその資料が全然無いのに驚かされた。資料の整理保存の必要を痛感する次第である。資料不足の為、部員と一般の人の足の速さの違いや天候等の関係で実際に歩けなかつた所もあつて、ガイドブックなども参考にして、コースタイムは調整したつもりだったけれど、相当におかしな所があつたのは申し訳なく思っている。

道標用の材木については、松岡先輩から全部無料で提供していただいたので、これに我々でカンナをかけ、ペンキを塗り、字を書き入れて、約一ヶ月程かかつて作り上げる事が出来た。部員の協力のおかげで安い費用で思つたより立派な道標が出来上つた。

道標立ての期日は大学祭の休みを利用し、部員全員参加して二泊三日の予定で実行された。四つのバートを編成し、野呂小屋に集結した。四つのバートを編成し、野呂小屋に集結した。大きなスコップやカナヅチなどを持ち、道標をかついで歩く姿は、普段にも増して勇ましいものであつた。野呂ではファイヤーもやつて大いに楽しんだのである。

これでこの道標立てのワンデリングは終わったと思つていたところが古川先輩の紹介でライオンズクラブに提出していた筑紫山系道標立て計画書が認められて再びこの山系に道標を立てる事になったのである。今度の計画は非常にぜいたくとも言ふべきもので、費用は全てライオンズクラブから出ることになつており、前回より材料も大きく、本数も多く、登山口まで立てる事になった。試験前の部員が忙しい時だったので、ペンキ塗りから出来上つた道標を登山口に運ぶの迄、全てペンキ屋の方にやつてもらつた。材木は全てヒノキであり、ペンキ塗りから字の書き込みまで専門家にやつてもらつたので、さすがに立派なものが出来た。

設置の編成は春合宿のバート別で、区間を決めて行方事になり、二月の後期試験終了後すぐに実行された。春合宿の出発まで一週間も無いバートもあり大変忙しい中で、しかもまだ雪が多く残っている中で道標立てだつたし、しかも道標が相当大きなものだつた為にとどのバートも苦労したようだった。これで、中にはコースタイムが間違つているものもあるが（これは、今度行つた際訂正するつもりである）一応筑紫山系の全コースに立派な道標が設置出来たのである。これで筑紫山系も一層歩き易くなつたはずであるし、特に羽金山と女岳の間も、一般の人が大いに歩いて

ほしいものである。

今後、我部でも色々な所に道標を立ててほしいし、又実際にライオンズクラブでは、三郡にも道標を立てたいという様な話もあるので、今後も西南ワンゲルの名前の記入された道標が各地の山に、たくさん立つことであらう。それは、ワンゲルの存在を世に知らせるといふ意味でも、又、一般登山者の指標ともなる素晴らしい事である。

△五号より▽



## 新人 歡迎

70期 山 本 淳 一

ある春の日の昼さがり、一人の男が、失恋の痛手から何もわからないまま、ワンゲルに入部したいと申し出た。

先輩達は、彼の心もわからないまま、よく入ってくれたと喜んでいた。

そして、さも満足したというような顔をして、一週間たつと新人歓迎があるから必ずくるようにと彼にいった。

彼は、心の中で何が新人歓迎だと思いつながらも、無理に笑つて快よく「はい」と答えた。

それから一週間が、かけ足でやつてきた。

土曜の昼さがり、彼は個人装備だけをもつて、指定された所にゆくそれから、バートごとにバスに乗りこむ。

車内では、もう皆んなが騒いでいる。

彼は、一人、なんてやつらは、きたなくて騒しいやろうだろうと考えていた。

他の一年のガキはといえば、もうはやばやと先輩達と、よろしくやつているやつもいる。

彼らは、なんて期待と希望で満ちあふれているのだろうと彼は、うらやましげな目つきで彼らを見つめていた。

そうこうしているうちに突然どこからともなく美声が聞こえてくる。

彼もこのムードに負けてしまつて、楽しそうな集りに加わる。

こんなムードが一時間もたつと、もうバスは止まつていた。そこから、小雨の中をバートごとに一列に並んで目的地へと歩き出す。

彼もまただまつて歩き出す。

雨の中の歩きは、実にいやなものである。心のすみずみまで暗い影を投げかける。

彼は泣きたい気持ちで後をふり向くと、彼らもだまつて歩いている。彼はなんだか安心したような気持ちになつて、

彼はなんだか安心したような気持ちになつて、先輩の一人に「まだですか」と聞く。

その先輩は、笑つて目の前を指さす。彼には何も見えない。

それから急な登りに運する。十分間もすると小屋が見え出す。人が見える。

先発した二年生達だ。

上に目をやると変なものが、木に下がっている。彼らの拍手の中を抜けると一行は、やつと目的地へついた。

それから一斉に夕食の準備が始まる。

二年生が忙しく動き回る。

その中で一年が、ほきつと手もちぶさたの面もちで、何か手伝いましょうかと二年生に哀願している。

彼には何だか異様な光景のように見えた。

そのうち変な伴奏入りで食事が始まる。

皆んなの目がギラついている。

彼はなんてあさましいやつらだと彼らに冷たい視線を送る。

そんな事をものともせず彼らブタどもは口を忙しく動かせる。

彼も清水の舞台から飛び降りたつもりで何だかブタのえさのようなおかずをつつく。

それから彼は後かたづけ、etc。

太陽は、すでに自分の仕事を終え、カラスは、すでにねぐらに帰り、あたり一面のとばりがおりにいた。

彼ら、ワンゲル乞食は？といえ、広場に集つて、こしをかけて、黙つて何かを待つていた。

突然右手の山の方から火の手が三本、静かに山を下り始める。

何か神聖な儀式でも行なわれるのではないかというような気分一同をかりたてた。

そしていよいよ点火となつた。

火はあかあかと燃え天までがすように見えた。

どこからともなく歌声が、聞こえてくる。

そして一同歌い出す。

いよいよスタンツだ。

この時ばかりは、彼もバカ楽しみ、皆と一緒に笑い、一緒に演じる。

そして静かに春の夜が、若者の笑い声を包んで静かに深く暮れていった。

第二日目が始まる。

軽い朝食を早々に終わらせて時間通りバートごとに今日の目的である雷山に向けて出発する。

今日は非常にガスっている。

彼は何だか不安な面もちでついていく。

彼は歩きながら、又しても一人考える。

これがワンゲルか？

何だ、暇人の集りじゃなか！

ああ!! 人生は、すべて退屈なり。

急に前のバートも後のバートも見あたらなくなつた。

どうやら彼のバート、道に迷つたらしい。

三年生が、あわて出す。

他のやつらも落着かぬ目つきをしている。

彼はといえは、第三者的な立場で、この光景を雄々とした

目つきでみつめていた。

彼には、不思議に恐怖とかいうものが全くなかった。

しかたなくそこで、昼食をとって、やむなく下山した。

彼にとつては、目的地に着くより、この道に迷った経験の方

が、はるかにすばらしく、魅力的な思い出となった。

彼は、たび重なる苦難にもめげず数ヶ月後、二度目の恋

をした。

彼女はすばらしく、魅力的で、そして神秘的だった。

彼女は、いつも彼を苦しめた。時には、

時には、彼をバテさせるほどいじわるをする。

それでも彼は、彼女に会いに行く。

いや、登りに行く。

彼女が、呼んでいるから。



## ワングル雑感

65期 古川 洋

### ワングルの事

九州にワングル活動が始まり学生間に広まったのが十二年前、我々の先輩がクラブを結成した三十四年、九州では草わけである。その頃のワングル活動は、人間の素朴さに対するあこがれがにじみ出、自然を自由奔放に歩きまわつたが、その分に物見遊山の気心もあつた事は否めない、ともあれこの頃にワングル活動の卵がかえり、我々同好の士に集まる場が与えられた事は幸せであつた。

「西南ワングルの気質は、虚弱化された西南カラーに反発すべく野性味の有る、あくの強い人間になる事を目的として生れた。

### 現役の頃

クラブ発展の要素は、その根本となるものの気質（ワングルとは個人／＼の）の上に、その時代のクラブ員の、あくのある運営の仕方である。現役の頃、よく聞いた言葉に「俺たちが失敗したら次の時代はその悪い所をみならわな

し」と。

学生時代のクラブ活動は延々とメンバーは変われども、

続くもの、もし失敗を恐れれば、発展もそれだけ遅れるものと思う。ともかくこういう理念のもと、自分達で運営する事となつた。何せ卵はかえつたばかり、みなよちよち歩きで、ワングル中は早く歩くもの、だべりながら歩くもの……。

組織づくりの必要性に迫られた。自由、野性味を失う事なく、ある束縛をせねばならぬので頭を痛めた。毎日例会も、単なる意見の交換が激突し、口論近きに至る事しばしば、それだけ皆ワングルの意識に徹していた。対外的には全日本連盟、関西支部との連絡もひんぱん、あるいは本部校の中央大学迄出かけ、クラブ運営について参考になるものは何でも仕入れ、何でも試みた。抵抗も随分と強かつた。この頃やつとワングル活動が認識しはじめたもののおもしろい内容があつた。ワングル活動について友人からしばしば問われた。生来が口べたな私の事、訝えぬ頭をたたきながら、山岳部は自然をタテに、ワングルは横にかいろいろ説明を終えた後、友人曰く「ではワングルとワンダーフォーゲルとどう違うのか？」と、あいた口がふさがらないとは此の事であろうと説明する意欲も失せた。又、「ワンダーフォーゲルとはアソビ・ホオーケルだな」と蔭口もたかれた此の頃である。

卒業まぎわ

どうにか制服も汚れたし、一応のクラブ形態も整つた。同好会の悲哀も部になる事で、後輩には憂き目にあわず事が少しはなくなつた。勉学はカバンの中にしまひ込み、部屋と家との往復の終止符をうたねばならぬと思うとなんとなくさびしい。何せ大学で学んだ事は、全てクラブで学んだ事ばかり、当然OB会の結成への意向が強まつた。準備委員会なるものを結成し、西南ワンダーフォーゲル部とのきずなを切る事のない様、又OB同志のつながりも薄れぬ様にとの主旨により卒業時にOB会の結成に到り現役としてSWVへ完全にオサラバした。

OBとなり現生迄

OB会の集まりもおもしろくなく、又社会人としての不慣れた生活にも不満を感じ、過去へのあこがれが強かつた一年目クラブへの愛着心はつるばかりなのに自由に出来てしまわれぬ、二年目……そして現在、来年は十年目を迎える。早いもので何とか形のある、参加の出来る、そして飛躍への踏台となる催を行ないたいものである。

雑感の最後に

年々充実するクラブは、ともすれば形式上の充実のみに走り、諸先輩の意志である野性味のある、学生としての赤裸々な活動が薄れがちにみうけられる。我が部は九州の先駆者であるという誇りを忘れる事なくクラブ員一人一人が

アクの強い、他校ではみられぬ何かを身につけて、九州に君臨して欲しいものである。

〈六号より〉

## 女子ワンダラー

69期 富 沢 美樹子

夏の合宿中、女子の中にもワングル生活は二年間だけでそれもついで行くだけの合宿を望んだ意見を見出した時は実に悲しかった。女子の中に自らの存在を拒否しているようなものではないか。これが女子の限界だろうかと疑問を抱いた。皆なに女子独立を願う気持ちを持つてほしいと意気込んでいた私には大きなショックだった。しかし合宿も終わる頃には、私の考えを全く変えさせてしまった。

女子は女子なりに混合の中においての役目があるのではなからうか、無理に独立（自立といった方が適當かもしれぬ）を願うのは、私一人の意地に外ならないのではなからうか。今迄の考えはすべてが無駄に思われ、私の行動も全てが拒否される様に思われた。女子は男子についてゆくのが本当だとさえ思うようになった。そして皆のいう「女らしさ」にこだわりだしてきた、そして女子パートは無理であると、又皆を女子パートとして引きつれてきたのは私の

一人よがりだ、私の意を皆に押しつけて来たのではないかと。

バカな事を考えたものだと思う。こんな事は今迄さんざん思いすでに結論は出しては来なかったのに。混成は混成なりの楽しさはある、でもそれは甘えから来るものに外ならないのだ。ワングル活動、特に女子パートとなると「女らしさ」など皆無のように云われている、しかし女性である以上、その行動、行為は自ら女性らしさを表しているのではないかと思う。しかしこれは私だけの女性らしさの考えで一人／＼異なるのは当然だろうが。

ワングルの女姓諸志はまずワンダラーである事を自覚すべきだと思う。勿論、背のびをするなどを思い、思われる必要はないのだ、限界を思う事は、自らを小さな殻の中に閉じ込めてしまふ事ではなからうか。



二あなたのページ 二

## 山登りの本質と単独行

山登りは観客生のない

スポーツ

71期 杉原健次

現代の登山形式の流れは、組織された集団によつて成り立つ登山隊が行う登山、もう一つは岩登り、又は水壁登攀を主体とする登山との二つの流れがあり、その二つが併行して行なわれている。私は今までまったくかえり見られなかつた組織集団内における単独行というものについて話してみたい。

山に登る人間の登山経験をたどつてみると必ず二十才前後に、単独行の時代がある。それはその時期が精神的に不安定であり彼らは単独行を通じて精神的にも成長を遂げる。その山がたいした山であつても。私は単独行が現在の激動する世に於いて自己を見つめたり、友に對する、また異性に対する愛の自覚、未来への憧憬、孤独に對する初体験等が、かえりみられることの少ないこの頃、その青春の波とを静かに見つめるために必要な人間本来の欲求に應じこ

まれて来ても不思議ではないと思う。

大体、現在の組織集団（ワンゲル、その他）の登山形式というものが金魚のフンみたいに後から後からそろそろ並び、バ声みたいな「ファイト」のコールを何が入つていてか得体の知れぬ大きなキスリングを背負つて、キタナイ姿をして、まるで百姓の集団（少し言い過ぎかな）みたいな山登りではなからうか。私は思うけど一人で荷物を背負い自己の最適な速度でズンズン行けるならそれが一番楽であり、人との付き合ひ、和合というやっかいな仕事から解放され伸び伸びと山を歩ける気分のない山登りがやつてみたい。またパートを組む、みんなを山の中で語り合うことも楽しいことであらう。しかし話の内容が人間関係、学問のこと等、こんな事は山の中でなくても話せるだらう。つまり問題は何の為に山に登るかという事になるが、これを見つめたり、反省したりするのが好きで行つてゐる奴かも知れない。時々自分が存在する人間社会の線上よりはずれてみたいからである。本當に自然の中でたたずんでパート員の存在を忘れた時、自然に抱かれてゐる自分が最も美しく悲しく、幸福なことを感じる。こんな事はクラブ内の定期合宿内で味わうこともできるが、私はむしろ単独行の中での方が、よりその享受を受けることができる。だから私は

みんな合宿やパーワンで複数の人間でいくのも良いだろう。でもたまには一人で山に行ってみてほしい。その中で一人で色々と思考してほしい。また単独行に於ては大した山でもない山に行っても大袈裟に言うのと、頼れるのは自分の体力、意思、経験だけだ。そんな時に、自分の力量というものが見えてくるだろう。つまり他人に迷惑をかけない個人となった登山者は、人間社会においても高く評価されるだろうし、組織内に於ても立派な指導者になれるだろう。単独行をやった者しかわからない素晴らしさがある。みんなも繁雑な日程の間をぬって一人で山に行ってみよう。

〈7号より〉

## 関西合ワシ

71期 田 中 秀 哲

「楽しんでこいよ」「頑張ってこいよ」「適当にやってこい」「デタラメしてこい」等と色々な声を浴びながら汽車は博多を離れた。

二年になったばかりで合ワシと名の付くものに参加するのもこれが最初でどうしてよいものかと先輩諸氏に相談し色々心構えを聞いたが結局最後は、自分なりに西南ワンデリング方法と関西各大学のワンデリングの方法を比べて

見ようと思つて出かけた。そして、どうにか無事に大阪へ着き集合場所に行く。

居るわ居るわ各大学の色彩豊かな制服を着たワンダラーその数約四百三十名、しかしその中であつて九州からは西南一校だけなのである。その人数も三年生二人、二年生四人の計六名という心細さ、その集合場所からバスで合ワシ地ハチブセに向け出発。いよいよパーフト分けとなり自分一人になると不安と新しい物に対する期待とで…………。

しかしもうあとは、なる様になれと半分やけ気味になると不思議と落ち着いてきた。パーフトのメンバーは0大SさんK大Tさんとメッチェン二人に他四名の計八名、そこでいつもの如く自己紹介、学校の活動状況紹介等が始まつた。九州から来たという事で一種好奇心を起こさせた様だつた。それは遠い九州からごろうさん、全くここまで来るとは物好きだナァという事の様であつた。その時は自分も平静に戻つていたので少しも騒がず彼等の質問に応答した。一日目も終つた。

二日目、付近ワンデリングに出発。ワンデリングといつても実動二時間位のハイキングだつたが、この時初めてグリセードなるものをやつてみた。まだ四月初旬なのでテントサイト地でも雪だまりは一mの残雪があつた。この時のグリセードとぎたら登山靴の底は大理石の様にツルツルだ



# 忍 苦

72 期 増 永 憲 正

つい先日のことの様に懐しく思い出される。佐賀往復百十キロマラソンは、日本縦断寸前に開かれた。気が遠くなるような人事位に思っていたところ、自分も出なくちゃならなくなり二度びつくり。三人一組で佐賀県庁を折り返し、速さを競うゲーム内容で四バート参加、大学を13時出発、多大の声援を受けてまず西、北山、山口のバート、続いて中村、増永、浜口のバート、有田、野口、井上のバート、利根、高塚、石田のバートと続く。三瀬峠を上り始めて夕立にあう。中村、増永、浜口のバートは境内で、他のバートも適切に処理したようである。曲淵ダム付近で通称亀バート、利根さんバートをとらえる。三瀬峠をグングン登りトップに躍り出る。峠のすぐ近くで高丘のパーワングループがバスで我々を声援しながら通過、峠での差入れは感謝して戴く。西、北山、山口バート。有田バート、利根バートと次々に牛乳を飲み干す。まず中村、増永、浜口バートが峠を下る。舗装道路をグングン下る。ルートをまちがえて戻るうちに全バートといっしょになる。黄昏時、全バートいっしょになりメシを食う。外は車のライトに照らされて

いる。県庁まで10キロを各バート耐える。中村バート着、新野、平田、学、高丘(兄)さんの歓迎をうけ、じつくり休憩、蚊の来襲にたまらずシユラフにくるまり、四年生方々の紅茶をすする。体調は自分でもはつきりしない。折り返し55キロ、夜の11時、折り返し間もなく有田、浜口足を痛める、中村、西、北山、山口、増永、合流。腹が減っては戦ができネエとラーメンを掻き込み、夜更けの道を駄弁り犬に吠えられ、兎に角歩く。ひっそり寝静まった車道に我々の足音と虫の音がピツタリ調和する。走り着いた中継点で四年のコーラの差入れて喉を潤した。この時利根、野口、石田の合流バートは一時間前に一路三瀬峠へ近づいていた。我々も車と別れて歩き始める。一人で歩くには勇気のいる山道を進む。夜明けは近い。一面にたちこめる霧、今日も天気がいいぞ。霧の間からなにか出て来るのでは。小鳥のさえずりが我々を元気づけた。夜が明けた。夜明けだと内心絶叫した。小雨煙る中を歩く。舗装道路を進むもの憂い朝という感じ。空腹。やがて中村、増永は、西、北山、山口を後に三瀬峠へ走り始める。平田さんから牛乳の差し入れて元気を取り戻し、いよいよ三瀬の登り。ベース変らず。雨足しだいに激しくなる。全身ビッショリ。江島の黄色いヤッケに嬉しさがこみあがる。峠は近い、そう思った。かなり走った。峠で高丘(弟)パーワンのテントへ

利根さん等はすでに到着済み。濡れそぼった姿でスープを作る食糧係にというよりパーワン組に感謝して、冷えきった体に暖いエネルギーが流れ込む。峠を後に中村、増永出発。峠を下り始めるや否や、この世の末期を思わせるような雨に全身を嫌という程打たれる。ロードは川のように流れる。増永が足の筋を痛める前後に、空はカラリと晴れ上る。中村さんに励まされながらポツポツ下る。太陽は容赦無く照りつける。兎に角、半歩でも一歩でも進まんことは大学には着かない。そう思ううちにかなりのスピードで走っていた自分に気付く。筋は痛む。喉は喝く、腹は減る。喉を潤し、患部を冷やし、大学へ近づく。菊竹さんの牛乳で元氣百倍。

ひたすら走った。来た、ついに来た、西新交叉点が見えた時、言葉になつた。ゴールして裸足の砂ざわりが印象的で、時は10時頃であつたらうか。21時間の愚にもつかぬ忍苦に別れを告げ、ビールが喉を抵抗なく通つた。

完走者、利根、中村、増永、野口、石田

尚、これは有田重則の発表により、当時四年の方々の協力パーワン組、往路交叉点近くの見送り、部室での待期組、車の協力と、部員相互の気持から無事終りました。

暑かつた、きつかつた、嬉しかつた

— 十周年記録 日本縦断 —

73期 中 島 倫 子

とにかくきつかつた。真夏の九州南部をテクテクと歩いて三週間、自分で、よくやれたものだと感じている。しかしきつかつただけに思い出もたくさんある。その中から強く印象に残っていることを幾つか書いてみようと思う。

七月十五日に博多を出発、昼過ぎに鹿児島に着いて、その日は薩摩半島の南端にある開聞岳の見える松林に一泊。十六日、フェリーで大隅半島へ渡り、出発点の佐多岬へ到着。佐多岬の印象は強烈だった。エメラルドグリーン海の色、緑の島の上に立つ白いお城のような燈台、ハイビスカスやブルーゲンピリアなど熱帯植物の赤い花の色など、色彩が鮮かで原色ばかり、いかにも南国らしい感じだった。さて午後二時、いよいよ歩き始める。けれども非常に暑くアスファルトの照り返しに参ってしまい、さつそくバテてしまった。それから後も暑さに悩まされ、どうして南部に

なんか来てしまったんだらう。北部に行けば少しは涼しかったんじゃないかと後悔したりした。

歩き始めて二、三日もすると次第に合宿というものにも慣れてきて、時間的にも気分的にも少し余裕が出てきたのか自由時間にはトランプなどをしたりして楽しんだ。しかしハートやダイヤはいつのまにか、牡丹や月やたんざくに変わり、P.L.の指導で私達四人はめきめきと腕を上げていった。ある日、P.L.が就寝と起床の時間を七・三にしようか八・四にしようかと決めておられた時に、Kさんは何を感違いされたのか「手七の場六でいきましよう。」と言われたのには大笑いしました。

七月二十四日、国分から10Km程南の福山という所で小林さんが来られた。次の日は沈殿で一人で海岸へ行き、秘島を眺めながら家に手紙を書いているうちに、センチメンタルな気持ちになり家に帰りたくなってしまった。翌日国分駅から小林さんが帰られるのを見送りながら、私もこの汽車に飛び乗って帰ってしまおうかなと本気で考えていた。

七月二十七日、高千穂河原着。高千穂峰へは一年二人でビストンし、次の日は中岳、新燃、韓国岳を縦走してえびの高原へ降りた。ところが、ここは非常に俗っぽく、人がうようよしているバス待合所のベンチに座っている薄汚れた私達をチラチラともの珍らしそうに見ていく。しかし涼

しいのは涼しくて、今度来る時はいいかつこうして避暑にでもやって来ようと思ったりした。(この時は九合ワンで再びキスリングを負ってやって来るような事など夢にも思わなかつた。

合宿二週間頃になると皆疲れが目立ってきた。私もイライラしたり、ブスツとしたり、自分の感情を押さえられなくなった。今考えてみるとどうしてあんなことを言ったりしたのだらうかと思うようなことがある。しかしそれを過ぎるとイライラもしくなくなり、思考能力ゼロの状態で、ただ目的地へと歩いていくだけになってしまった。八月四日、よいよ最後の日。前日に電話連絡しておいた北部パートと会えると思うと胸がワクワクした。しかしやぶこぎなどで時間がかかり、最後の山、白岩山を越して本屋敷に着いたときには予定時間よりずい分遅れていた。誰も迎えに出て来ない。体調が終わっても、いつものトレーニングが終わったみたいなきもちだった。もう帰ってしまったんだらうな。。。。。。そう思ってたがつかかりしていたところへ、突然「ギャーッ」という叫び声が聞えた。皆が走りよる。やっぱり待っていてくれたんだ。無我無中でブチに抱きついた。この時、終わつたという実感が湧いてきた。

最後に一つ書き加えておきたいことがあります。暑さでヒイヒイ言っていた私達にコーラとアイスクリームを買っ

てくださったやさしいPLI様、本當にありがとうございました。  
— 完 —

〈八号より〉

## 移動パート報告書

— 南アルプス南部 —

71期 中 村 慎 一  
72期 三 苦 達 久

7月23日 博多—静岡駅泊り

7月24日 静岡駅—畑雑ダム—ウソッコ沢

蚊が多く蒸し暑い。静岡駅で寝不足と旅行疲れで不快な朝を迎える。バスにて畑雑ダムに向う、約3時間にてダム着、カッと照りつける太陽、青空しかし空気にはよどみない。すがすがしいその主稜線が支尾根に囲まれはつきり見える。まさに夏山である。昼食をとりいよいよ出発約20m程もある畑雑第一ダムの吊橋は面白い。二人は荷が軽いため快調、ウソッコ沢にテントを張る。

7月25日 晴れ、ウソッコ沢 横窪沢

5時Bパートと伴に出発、道は非常によく整備されており

り所々新道に変わっており、合理的に考えて作られた道であると思う。Bパート調子悪く横窪小屋にて天張る。このテントサイトは狭く10張位、午前中に着かないと場所がない。(サイト料50円)10時頃から昼寝、行水して時間をつぶす。沢のそばにツェルトを張る。

三苦が食糧計画を軽量に重点をおいてたためたため中村と趣味が合わず、中村は苦勞しているようである。

7月26日 晴 横窪沢 聖平

4時20分出発、茶臼岳まで一方的に登りである、茶臼に近づくにつれて予想以上の大きさと富士がはつきりと背後に見え出す。いよいよ待望の主稜線に上る。中央アルプス富士が美しい。茶臼ピネトン。上河内、聖平に向う、午後の照りつける太陽はさすがに疲れる。重荷のBパートは苦勞している様である。聖平まで西ア縦走にはいや気がさす登り下りの多い変化の少ないでかいばかりの山容は見ただけでいやになってくる。何の魅力もない、縦走パートでなくてよかったと思う。

果してこれで楽しいのかとし、2年を見て思う。3年はリーダー気取りで少しはおもしろいかもしれないがこんなことを言うと反論されるだろうが、あの皆で苦勞して味わった感激を素晴らしい連帯感を、それはあるだろう、しかしそういったセンチメンタリズムを言っているのではない。



2年生の無氣力さを3年にしても仕方ないという感じを受ける。合宿前からの事を考えてみればわかる。やる気を出して主体的に喜々として動いた奴は1人でもいたのか、単なる義務感に過ぎなかったのじゃないのか、その義務感を追払おうとしていただけではないのか。

1, 2年の主体的に行動している姿を、本当に喜びに輝いている姿を一度も見ることがない。自然が好きだ、何かをやりたい、そして希望を持って入って来た一年を功妙にだまし彼らの個性を取り上げ、それがあたかも一人前のワンダラーとなる道であるかのように彼等にとつて何の意味も目的もない合宿を、意味、目的があるごとく仕立て上げ、まがいのもののセンチメンタリズムで従わせる。一つの型に作られた人間それをもって一人前のワンダラーといい始めて3年になれる。何ら主体性はなく、伝統以外に頼るものがない無能な奴等それが、4年の姿である。

故に伝統の手かせ、足かせは増々重く、1, 2年をそれでしぼろうとする。没個性の集団、本当の目的を持たない集団、団体登山のみしかできない集団それが現在の伝統高きS W Vの姿である。

1, 2年がそして我々自身がみじめだと思ふ。

聖平には西沢渡より登ったCパートが先についていた。Cパートより平岡に預けたサポート品の受け取り証を受け

る。Cパートの食事の豪華さと荷物の重さを見ると気がめいる。聖平は幕营地として申し分ない。今日Bパートともお別れなので好意で食事とテントを提供してもらおう。

7月27日 聖平 西沢渡 平岡

Bパートより朝食を提供してもらいCパートより差し入れを受ける全く申し訳ない。3時頃Bパートのテントを追い出され5時までツェルトをかぶつて寝る。5時30分発、西沢渡まで一気に下る。ルートは良い。南ア南部のルートは良く整備されており技術的な面は心配ない。西沢渡からなし元まで2Kmの軌道歩きが始まる西沢渡から25Km〜3Km地点に近道があり大分助かる。南アはアプローチが魅力的だと思ふ、谷を左右にながめながら、花を鳥を見ながら軌道歩きは仲々面白い、これが南アの魅力なのか。

三苦ブヨにさされた跡が化膿しリンパ腺がはれ歩きつらい。なし元よりバスで平岡に向い、山川(現地本部)と連絡を取り、公民館に泊めてもらう。

7月28日 晴 平岡 飯田 カンバ沢小屋

飯田市に買い出しに出かける。町は暑いしそして(端下山してホッととして、又登るのかと思うといや気がさす、それとあいまつてCパートの買い出しはより不快指数を増すサポートはもつと考えねば無駄だと思ふ。

夕方伊那大島よりバスで鹿塩に向う、バスがないので塩

川まで歩こうとするとバス停近くの雑貨屋のオヤジが奥まで行く車を世話してくれた、この親切に感激したが、おつとどっこい世の中せちがなくイタクシー代と同額の金を請求された。こちらの方は登山者からは金を取ろうもうけようにかかっているようだ。カンバ沢小屋から先は今年の梅雨で道が寸断され復旧の見込みは立っていない、バスも入沢江までしか入れない。この荒れ様に川原にツェルトも張れず塩川まで歩きにくそうなのでカンバ沢小屋に泊る。

7月29日 晴 カンバ沢小屋 三伏小屋

調子は二人ともたいして良くないが整備された道を三伏峠小屋までのんびりと登る。峠小屋には無線電話があるが十数時間のみしか使用できない。

三伏峠小屋にもサイト地があるが水がなく張っている。サイトはなかった。三伏小屋はサイト地も広く水もありほとんどここに張るようだ。三伏小屋でCパートと会いサポート品を渡す。

5時頃山川と連絡を取りに行った増永が帰って来、福大の遭難で緊急下山せよとの山川の命令を伝えた。山川の真意を計りかねたが多分感情的なことと思ひ、ともかく命令なのでCパートと下山の手はずを打ち合せる。くれぐれも下山は注意して行なわねばならないと思う、しかし緊急下山は少しおかしいと思う、緊急下山ならば急がねばならな

いので多少無理してもという意味があると思うが、藤には悪いが農鳥の移動本部が一番心配だった、夕方の空模様はどうもおかしい台風の影響だろうか？

7月30日 雨

朝天気が悪く一年がかなり疲れている様なのでCパートは下山を延す。中村、三苦はBパートに連絡すべく、又Bパートが沈する可能性もあるので全装備を持って出る。小河内避難小屋にてBパートと会い、落雷の恐怖につきまといわれる雨天の稜線歩きは充分の注意がいる。できれば沈殿が良いと思われる。

入沢江発4時のバスにて伊那大島に向う。Cパートは来てなかった。明日に出発をのびたのだから、伊那大島より汽車で甲府に行きステーション・ピバークとなる。

7月31日 曇り

奈良田にバスで向う。

△9号より▽



## 訓練合宿回想録

九重

74期 才田啓子

書けと言われても、一年も前の事をそうそう簡単に書けるものではない。忘れてしまったのではない。非常によく覚えていたけれど、何から書き始めたらいいのだろうか。四月の中ば頃「訓練合宿」とガリ刷りで書かれた四枚ぐらいのペラペラしたものをもらった。キジごはんの由来というのが中に小さい字で書いてあったが、何しろ印刷が悪くて読めず「キジごはんちゃ、何やるうか」と思っていた。合宿は一年から三年までが一緒に行くということだった。行ってみると、全てが予想と違っていた。

初めて見た時はただその大きさに驚かされただけのザックは、自分一人で背負うこと能わず、ようやくにして背負うと、当り前の事ながら重く、一日目は四十分たらずの行動で完全にまいってしまった。のんびりと楽しいキャンプではなかったのだ。三年、四年は威張っている。どこが偉

いか私にはちっともわからぬのに、ともかく偉そうにしている。サイト地に着くと一番にその辺に寝ころがる。そしてごろんと横になったまんまでテントを立てる、やりなおせと命令するのである。呆れ、それから腹が立った。「ばかちんめ」と思つて、それでも仕方がないので、二度か三度立て直しをやった。何故、屋根に斜めのシワができるのかわからなかった。

浅はかにも、予想違いで苦しんだのはこれだけではない。あんな大きいザックを背負つて一五〇〇メートルもある山に登らされた。

山に登るのにファイトと叫ぶ。何もまたぬは四年である。四年にもなつて（私達より当然年上で大きい男の子が）ザックらしいザックも持たず心に咎めないのだろうか。

「ファイト、ファイト」と叫ぶ三、四年生を見て、ばかちんめ、ばかちんめ、と言いながら登る。陽に照らされ、水も与えられず、汗を落して登る山道の、そのわきにピールの缶が捨てられてあつたりするとイライラした。

思い出すのは地蔵原に着いた時の喜び、明日の行動がないというのは無上の嬉しさであった。それからファイヤー。暗い空へ無い上がる火の粉の印象は心に強く刻まれ、陽と火への憧憬を生じた。

私は多くの人がそうであつたように、大学に入ってワン

ゲルを知り、汚ない部屋のドアをたたいた。そして、おそらく先輩の多くが驚いたような事に驚き呆れ、腹を立て、また感動し、喜んだ。一年最初の合宿の回想である。

終り

△ 9号より▽

## 私の試験期ワンデリング

77期(商3)

宮 川 和 彦

私の試験明けワンデリングは新しい試みであるサイクリングでありました。パート名(ドロボウパート) 親分増田女子、局長草島女氏、ドロボウその(一)中野チビ太、その(二)木下ムツリ助<sup>三</sup>郎、チンピラ島戸氏、そして善良なるお目付役宮川足長おじさんです。第一日目は博多を出発して日田までえものを捜してドロバー(ドロボウパート略)

は出発したのです。道々、親分と局長はえものはないかと目をギョロギョロチカチカ、そのためかなぜかおくれがちだったのです。要するにケツが重くて前になかなか進まないのです「やれやれどうなることか」と足長おじさんは言うのです。どうこうするうちにスムーズに進む4人と、なぜかおくれがちの二人は日田へと向かうのであります。日田までは目ほしいえものもなく着いたのですが、親分と局

長は、人のいる所では仕事がやりにくいと思つたのかテント場を、人里はなれた山の中のひなびたキャンプ場にきめたのです。「なんでこんな山奥に目転車を押しつけていかなければならないの」という助三郎をキッとにらみつけ親分は命令するのです。しかしそのキャンプ場はあれはてその夜の神秘的なでき事、一大おほけ騒動がある事をだれも気づかなかつたのです。テント場についてしばらくして散歩していますといきなり「キャ」と稱をひきさくような島戸氏の声がしたのでした。それはへびが二匹私たちの前を通りすぎたのです。よく見るとほかにもたくさんいたのです。そのへびは私たちをジットにらんでいたのです。「話はかわりませんが私はへび年です」、そのへびが前ふれのように怪しい事件がその夜次々とおこつたのです。食事がおわり親分が明日の話をしていました「明日はかせぎまわろうぜ」とかなんとか言っている時、回りで足音がするのです。足長おじさんは長早に外に出て確かめて見たのですがだれもいません、しかししばらくすると又足音がするのです。それはしだいに近くテントの回りで行っている所ではじめました。パサ・パサと近づいてくるのです。風もなく、近くのかれた池は、すこしの水にキラキラと月を反射させ、神秘さはますます増すばかりです。一番大きな局長が一番こわがりです。テントのまん中に少しづつかつ騒々しく移動してゆくので

す。親分は、いげんもそっちのけでおそろしさを顔いつばいで表現していました。「キヤこっちの方がもつとこわい」と足長おじさんは親分から目をそらしました。しかしその音は一向にやまず、ますますはつきりきこえてくるのです。助三郎は「ボクチャンこわい」と親分のにじりよつてゆくのです。そして親分とハッンとだきあい深い契りで結ばれるのです。チビ太はいたつてのんきでしらけています「ムム、こやつできるな」と足長おじさんは言うのです。あそりそう島戸氏はこわいもの知らずというか、チョットにぶいと言うかテントから頭を出して星などがめて文学的思索にふけつていゝのです。その時パタッとだれもいるはずのないトイレがしまる音がしたのです。風はありません。ひとりでにしまるはずはないのです。しばらくするとまたパタッという音が不規則になりはじめたのです。そしてついに人の声らしきものがしはじめた時は恐怖も最高潮に達したのです。親分と助三郎の顔はひきつり局長は小ささみにかつテントをゆるがすようにふるえていたのです。チビ太と島戸氏とあいかわらずで、足長おじさんはぶせんと我れ動ぜずといった感じだったのです。その時島戸氏がいたづらっぽくトイレに行こうと提案したのです男の人はずぐ賛成し外に出ようとすると、親分と局長が私たちもつれていってと哀がゐるのです。私は自然の方則からいって

いっしょにするのはむずかしいのではないかと思ひました。しかし二人はいっしょに出てきたのです。私はこんなに近くで男女が、自然の方則をしたのは初めてでした。私たちがチョロチョロとやつていますと後でジャーという音が雨でもないのにしたのです。カイ電でてらそうとすると親分が「ギャー！」とおこつたのです。いったい何だつたんでしよう。その夜は恐さをこらえてそのままねたのですが例の音はまだ続いていました。第2日目こそいよいよドロボーの本格的仕事が始まつたのです。2日目の行程は日田から耶馬溪までの山コースであります親分の目がキラッと光るのです。まず出くわしたのはクリの山であつた。しかし人家に近く足長おじさんはこれはムリだと思つたのですが親分は欲に目がくらんだのか配下に「かかれ」と命じたのです。チビ太はケケケと笑いあたかも小猿のようにドテを登りクリの木にすがりついたのです。又助三郎も昨夜深いちぎりで結ばれた親分のためだと一心にクリをとつていたのです。親分はそれを満足そうにながめていたのです。しばらくするとドッサリとクリをかかえたチビ太と助三郎がかえつてくると、それを足長おじさんにもたせ一目散に山奥へ山奥へとにげたのです。パチがあたつたのか坂道は激しさを増し、親分は景色を見ているのかわかりませんが一人ゆつくりと登つてくるのです。顔を見ると汗がびっしょりで

そのかわゆい顔がまっ赤になつていました。しかしそれをしり目に局長は、それ私の出番だと、体力にものをいわせユッサユッサと大きなおしりをゆらしながらトップがズンズン進んでゆくのです。一回あせんとし「あれは足の重さでペダルをこいでゆくのだ」といつていたのです。やっと頂上につき、まちにまつた下り坂であります。スイスイと下り坂を下つてゆく途中に、シイタケがある親分が言うのですが、気持の良い下り坂が続くので配下はだれ一人耳をかそうとしません。親分の声はむなしく谷間にこだまするのです。親分はムスッと私たちをにらみつけたのです。下り坂においてゆくと、耶馬溪サイクリングロードに出ました。整備されたこの道はすばらしく車もなく自転車だけのすばらしい道でした。途中田んぼにダイコンやナスビ、ピーマンがありました。親分と局長は話し合つて「これは自然にできたピーマンだ、これはうれすぎだからちぎらな」といけないうナスビだ」と自分かつてな理由をつけてとつてしまつたのです。そしてこれもまたまた足長おじさんにもたせたのです。おかげで足長おじさんのリュックは、クリ、ナスビ、ピーマンでいっぱいです。このロードは専用のトンネルや鉄橋があり、カワイコちゃんがいっぱいいましたせひどうぞ、レンタサイクルもあります。その日は羅漢寺、青の洞門を見て洞門キャンプ場につきました。そし

て今度も別の事件でよくねむれませんでした。それは防騒族です。一晚中ギャギャ走り回るので。「死ねばいいのにそしたら見に行くのに」と足長おじさんは言うのです。第三日目は青の洞門から行橋までです。今日のユースは町の中で目ぼしいものは何もなくて一回がっかりです。おまけに朝からの雨で、またまたションボリです。しかしそこはドロボーです。ただではころばず道路ぞいのカキを取つてたべました。しかしついでないときはこんなもので「シブッ」と助三郎がなげきました。しかし局長だけはうまいうまいとたべていました。行橋では長井海水浴場では潮ひがりをして、またまた大成果を上げました。よくよく盗み運がよいのでしょう。島戸氏と助三郎は指のおや指で、とてもうまくクイクイと穴をはつては貝をとっていました。向こうでは親分と局長が大きなおしりを向けてひっしとつていました。時々白いものがチラリチラリと見えています。あれは何だったんでしょう。その夜は貝のバタいため貝汁と大麥ごうかな食卓でした。ただ一つ失敗は貝を手にいっばいもつてひきあげてかえつてくる途中、貝に気をとられ簡尾道具であるエンピツをなくした事です。ひきかえしてみましたが潮がみちでだめでした大失敗。最終日は行橋から博多まで一路かえつてきました。今度のサイクリングは新しい試みで種々失敗もありましたが大変素晴らしいも

のでした。体力に合ったコースをつくり無理のない時間作成をもつて、道路条件、景観など事前準備さえしっかりやれば山とはちがつた新しいものが生まれて来ると思っています。最後にいろいろかぎましたが各氏に一言「すみません」と足長おじさんがあやまつておきます。

△十号より▽

## 頼りなげなモノローグ

78期(商2)

長 野 律 子

山が見える

そのずっと向うに続いている青い空

そして まっ白い雲

すべては想い出の風景

然し 私がいらない 私は何処に行つたのだ?

ときとして、いやむしろたいいてい私の中のワンゲルへ聞いてみる、あなたはいつたい何なのか?と  
まず私がワンゲルに入つた動機を考えてみよう、事実はなくとなく入つて今までいすわつているのであるが、とにかく、クラブに入つて、その中で友達をみつけない、大学生

活の中で同じ課題を持った人間に接することで、孤独とか、不安とかをのりこえたいという片想的なものからである。

キャンパスで「われわれのちー学校側体制のうー」なんてわけのわからぬシュプレヒコールをあげているK君だつて、「おれはどうせ、もてない男やけんかー」なんていって、カルトンをひつさげて、ふらふらしているU君だつてみんなみんな寂しがりやで、けれども一生懸命生きているんだ。

U君、将来どうするの?

おれ、友人と二人でアメリカに勉強しにゆきたい、あいつはカメラマンで、おれは芸術家で!

いいわねエ 夢があつて

けど 何年先になるかわからんけど

青春の喜びと悲しみの中で、三無主義、五無主義といわれている現象の中で、やはり、自分なりの「生」をかみしめる人間でありたい、ふんつけられても、けつとばされても、バカといわれても、変り者といわれても、それでも信じきつていられるほど自分にとつてホントウのものをみつけない、誤りを誤りと、正しいことを正しいとはつきりいえる人間でありたい。当り前のことが当り前でなくなつた今、このコーヒーは、とてもおいしく入つたなあと、嬉しがらる

人間はいったい何人いるのやら——。

今でもなつかしく想いだす、小さなやせた体で登ったアルプスの峰々を、あたり一面銀白色の雪山を、雪と岩、風と光、流れと青空、お花畑、トカゲが、雷鳥が今でもやさしく呼びかけるような気がする。

ワングルの活動を思考する時、一、サークルの構成要素を自己にどう位置づけるのか？ 二、そのためにはいかなるサークルの形態、組織が必要なのか？ これらのことが皆、未知の課題として現われてくるはずだ。そこにおいて先輩からささずかった既成のサークルの据え方、運営の仕方は、役に立たないし、むしろ逆に現サークルの活動を束縛するものとして現われてくるのである。すべて自分達で新しく思考してゆかねばならない。わたしたちの活動は、わたしたちで決定するものだ。これは果して理想主義なのか？ いいや、むしろ個人の切実なる課題となってくるはずだ。

K君、最近がんばっているわね。

あんなのちがう、おれは信念のないだめな男さ、もっとももっと勉強したい。

みんな自分なりの環境の中で、「生きる」ことを限界のギリギリのところまで、真剣になりたいと思っているんだ。いろいろなることを思考しよう、そうして行動しよう、苦悩

しよう。人生においてはつかのまの青春時代を。

偉大なる自然の中の非力な私、小さな自分、重荷に耐えたい心は、人生のどこかで支えとなるであろうか？

今だに私の中のワングルは、体裁と、習慣と、信頼と、苦悩と愛とをもって、影響し続けている。

然し、私は何処へ？

まだ永遠の課題は残されている。

△ 十号より▽

## スキー合宿

79期 椎葉 ゆう子

2月18日「さんべろ号」でキスリングとスキーと、持ちきれないほどの差し入れをかかえて大山へ向けて出発した。駅のホームにはOBの方々や四年生の方々が見送りにきこおられ雪山の寒さ、というよりは冷たさを熱弁された。

その話を聞いて持ってきただけの衣類では心配になり、増田さんと2人でOBの原田さんが着ておられたセーターと厚手のシャツをホームで脱いで貸してもらう事にした。

2月19日、7時05分に米子駅に到着。ちょうど混雑しているところであったが朝食を取ることになった。何故か、そのような時になると女子の方が度胸がつくようで、男子は



人の視線を気にしてあまり食がすすまなかつたようであった。バスに乗り市内を見渡すと一面真白で大山のスキー場には2m50cmくらいの積雪があつた。バスから降りると目の前に真青な空をバックに雄大な大山が見えた。

予定していた豪円山にはテントは張れないということで、国民宿舎近くのキャンプ場に設営することとなつた。

ここでスキーのコーチをしてもらうこととなつていた中村さんと合流し、サア、始めるぞノという段階になつて私は大チョンボをやつてしまつた。テント設営中、ひもを切ろうとして包丁を持っていて、ひもを切らずになんと、自分の指を切つてしまつたのである。かなり深く切つていたらしく左手の人差指、中指、薬指の3本から肉が見えていた。衛生箱では治療できなかつたので、スキー場の診療所へ行つたところ、八針も縫うことになつた。診療所の人達には「スキー場に来てまでけがをしたのか。」と大笑いされてしまふし、悲惨な合宿の始まりとなつた。

この日は自分でスキーもはけず、普通の手袋もできなかつたのでオーバーミトンを借りて練習することになつた。

最初は雪に慣れるために、ほとんど平らな所で歩行、階段登行、直滑降を練習し、左手の大事さを知らされた。

20日、ブルーク・ファレレンの練習をやる。我がバートの男子のスキーウェアは実に素晴らしく人目を引くには十

分であつた。いつもの山の姿にヤッケを着ているのである。ある人などはカッパを着ていた。要はスキーウェアではなく、いかにうまく滑べれるかである。気にしないことにした。21日、この日は斜滑降を練習した。初めてスキーで滑べつてゐるんだという実感がわいた。みんな上達が早い。私が一番の劣等生であつた。この合宿が始まる前までは運動神経には人一倍の自信があつたのであるが、この合宿が進むにつれて、その自信がもろくもくずれ去つていった。

22日はシュテム・ボーゲンの練習をする。この日は一番傾斜が急な上の原につれていかれ、斜滑降で滑つては止まり、キックタインをして向きを変え、又同じ事を繰り返して練習した。この上の原の一番上から下を見おろすと人間が豆つぶみたに見えない。無事に下まで帰ることができるだろうかと不安になつた。途中で中村さんが生理的欲求をおさえきれず、ここでみんなと別れて一目散に下つて行かれた。みんなは水を得た魚のように自由に滑つて降り始めた。ここはコブが多くてなかなか進みにくく途中スピードが出すぎて、自分で止めることができず結局は倒れて止めるしかなかつた。下に降りるまで何回ころんだであろうか。見当がつかない。わかつてゐることは、私ほどころんだ人は他にいないということである。

23日、念願の大山寺ツアーを行なつた。ゲレンデと違つ

て新雪を滑べるのは難しい。普通に滑べれる人で10分とかからない所を私達は1時間以上もかかってしまった。恐怖の連続で坂を滑るというのではなく、ころけ落ちるというような感じなのである。何故か人より倍以上こころんでしまつて時間がかかった。

しかし雪におおわれた大山がすぐうしろにせまつてきていて、ただ「きれい」の一言以外に言葉がなかった。あつと言う間に終つたスキー合宿であつたが、残つたものは八針も縫つた左手の傷と、おしりのアザと、すこしばかりの技術と、初めてのスキーの思い出であつた。

△ 十一号より ▽



## 秋の強化で得たもの

80期 松下克他

秋の強化合宿。それが私にとってワンゲルに入部して初の山行であつた。私の入部が強化の十日前であつたからで出発時においてもまだワンダー・フォーゲル活動の何たるかも知らず、クラブ内には見知らぬ人ばかり。わずかに同じ苦しみを味わう同輩の顔と名前が一致するようになつた程度。また、それまでに合トレは二回のみ、ボッカ練習をなしてあり、初めて三〇kgをかつぐのであるから、先行きどうなることかと思つたことしきり。

一日目、炎天下の長い長いロード。二日目、山頂が近い浮岳の登り、三日目、昨夜の不始末のおしおきによる早朝三時間ノンストップ歩行におけるセカンド争い、やぶこぎの雷山の登り、井原から三瀬までの長い長い坂（ここは、たいしたことないと言いう人も多いが、私は非常にきつかつた）、四日目、最後のロード、と毎日シビアだった。考へたことと言へば、何故今ごろになつて、こんなにくつてはかばかしいクラブに入部したんだらう。山に登るんならもつと楽しく行きゃあいいのに。そうだったのか、二年のメッチェンが、入部のあいさつの時、私に向けたあの異

様な目はこれを予期してのことだったのか、とか、山に砂持っていつてどうするのか、横を国鉄やバスが通るのに、どうして歩かなきゃいけないのか、とか情けないことばかりであった。

それでも、まあまあ何とか、私も含めて一年生全員が、足にいっぱい豆を残しながらも、無事に学校に帰りつくことができた。もちろん、ワングルというものがいかにかきびしいものか、しかしそれだけにやりがいのあるものであるということがよくわかったのだ。

一つの行事を消化したことでやっと、ワングルの一員になれたような気がしたが、やはりまだまだ、遅く入部したから、という気おくれがあった。春の強化や夏合宿に参加してなくて、皆と一緒に涙を流したことがなかったのだからと私自身あきらめていた。しかし、それは私の考え過ぎであつたようだ。皆は、秋の強化と一緒に行った私も仲間として何のへだたりもなく受けとめてくれたのだ。それを知った時、私はうれしかった。私はこれでほんとうのワングル部員になつたのだと感じ、ガラス越しで見えていた同輩が、急に親しい仲間に見えた。「なんだ、あたりまえの話じやないか、秋の強化に行った者は皆一緒だ。」と先輩にも言われたのだが、そのあたりまえのことが私には大きな意味を持っていたのだ。

初の山行、しかもシビアな合宿をやり遂げた充実感、親しい仲間を得ることのできた喜び、私にとってこの秋の強化は大きな意義があつた。

〈十一号より〉

## 冬山の旅

79期 荒巻忠史

二月の山は初冬や春先とはちがつた容相を見せる。そこに吹きつけられる雪は銀の針のようだ。厳冬の山は、山自身で深く埋もれて冬眠し、雪と氷と風が狂つたように、また一切の生物を嘲笑するように、一つの生命を創り出している。

それから山々を、山麓の村から晴れた日に眺めることができれば、それは一つの殿堂のように見えるだろう。大きな伽藍とも思えるだろう。しかし、多くの日には、昼といわず夜といわず、灰色のあつい雲にかくれ、姿を見せない。

荷を背負つたままではどうしてワカンをはくことができなほどの、血を吸つた大きなダニのようなザックを担いで、山麓の林の小径を歩いてゆく時、私達は山で当然異常な変化を起こすにちがいない自分自身の精神に対して、準

備を整えようと思う。しかしそれは、わくわくとして、胸の内側をやわらかな羽毛で撫でられているような、私たちに落着きを失わせているような、そんな焦躁のためにうまくゆかない。考えてみれば、準備はもう整えられているのだ。

真冬のこんな林の中に鳥がいる。なにを求めて鳴いているのだろうか。

どんよりした朝からの曇った空から雪が降りはじめ。細かい、灰のような雪だ。そして時には木々の枝に音を立てて降る永の微小な粒だ。

重たい荷が肩にめりこみ、息が切れ、山の深さを想って不安になる。しかし、たとえ不安になっても、私たちはその不安を打消し、追いやる自信がある。なぜなら、幾度かのこうした山行で、同じように不安を最初は抱きながらも、上へ上へと雪の続くかぎり、山の続くかぎり登って行って、ついには山頂に到達した経験があるからだ。

その時、私たちの体のうちに蓄えられている力が、なんと豊富なものに思われるだろう。そしてそれらの力を最も立派に使わせる大きな、晴ればれとした意欲を感じながら、だんだん深まる雪にラッセルのあとを残して行く。

小屋の夜。その小屋には誰もいなかった。少しばかりの

ウイスキーがあつたので、私たちはそこから幸福のほてりを味わって、歌をうたった。風の唸りが速く近く、木々の枯枝が折れる音もした。私たちは、その幸福のほてりの冷え切らないうちに、寝袋にもぐりこんだが、そこで顔をうずめて抱いていたのは、渦を巻く銀の烈風の中での緊張だった。

そして幾日かのちに、私たちは雪庇が大きくできている瘦尾根を一步一步進んでいた。雪に閉ざされた山小屋から、早朝出発した私たちは、アイゼンをつけた足が時々こごえそうになり、ピッケルを持つ手は、二重にはめた手袋の中で感覚を失う。

露出した岩があるかと思えば、青白い水があり、雪の吹きだまりがある。雪をふくんだ雲が盛んに往き来する。そして時々薄日があたり、雲を透してみえる赤い太陽がすぐその尾根の上にある。

氷片が落ちる。ガラスを踏むように氷をくぐると、それがかからず音をたててそぎ落とす谷へ落ちて行く。それらの音や、氷の光や間歇的に吹いて来るはげしい風に、私たちの顔に浮ぼうとする想念は崩れる。

私たちからあらゆる想いを奪う風は、山頂に近づくにつ

れていよいよ強まり、踏み出す足を思うようには進ませない。そしてある時、私たちの視界に入っているものは、自分の腕と膝と、お互いのぼんやりとした姿だけだ。

だが私たちは、なぜこのような痛い苦しみのうちに自分を連れて行くこうとするのだろう。それはわからない。なんと言つても本当ではないように思われる。

私たちにはこの突きささるような痛さが必要なのである。この世界の中で、最も清らかなものによつて、最も苦しい試験を受けようとする心が凍る山へ誘つて行く。

私はみずから鞭をもつて自分の肌を打ち、血が流れてもなお打ち続ける苦行僧の心を知らない。しかしそれを考える時に、山の上での、あの雪と氷と風による試験は、より高い、より深い、一つの恍惚のような気もして来る。

山の木々も今は雪の下にある。そして雪がそれを埋めつくすことのできなかった木々は樹氷となつて、夏のあの緑のそよぎからはおよそ遠い、全く別の表情をしている。

やわらかに

積もれる雪に

ほてる頬を

埋むる如き

恋をしてみたし



元谷小屋にて  
十二号より

# 雑記帳より

一月十日

昨夜、神様と夢の中で会話をしました。

アイ「神様、アイは一年の時31単位しかとることができませんでした。アイは後期試験をうまく乗り越えてる年生になれるでしょうか？」

神様「わく「アイよ、おまえの心がけしだい。」

アイと神様の会話 Part II

アイ「私は3年になれるでしょうか？」

神様「贈り物は？」

アイ「私の純潔を差し上げます。」

神様「ちやーらん。おまえは3年になれるん。」

アイ「では片山の純潔も一緒にどうぞ。」

神様「ちやーらん。」

アイ「では二年の野郎全部の純潔を差し上げます。」

神様「アカン」

アイ「俺は主将じゃノワングルみんなの純潔ではどうでしょう。」

神様「よし大安売りじゃノおまえは3年じゃ。」  
こうしてワングルには純潔を保つ人はいなくなってしまうとしたとさ。

七月六日

何故、こうも悩みながらも、クラブを続けているのだろうか。完全燃焼できぬこの情熱のやり場を求めて……

クラブにつき込むべきかor別の世界を追求すべきか、要するに問題は、自分のペンミストぶりにある。アー・ドンキホーテに私はなりたいたい。この勿体振った態度は自分でも嫌悪感を覚える。楽道家を夢見てもかなわぬことは知れている。今、山に登りたい。あの満足感を味わいたい。抜群の展望……爽やかな空気……いっそのこと狂い死にしようか。

※時間が経てば今、悩んでいることがアホらしくなってきます。時間を待ちましょう。でも、これが青春だと感じませんか？

7月22日

出発の日に部屋にやって来ました。ただ今俺一人です。教会へ行っておいのりをして来ました。お説教の中で自然の偉大さとは何かを説かれました。命あるものみなこの自然の中で生きているものではなく生かされているのである。

それを教えてくれるのが自然であり、それは自分の知らない自分を写しだす鏡でもある。し・せん人間も動物である。自然の中に入れば、本能的な所も出てくるし、人間の汚なさも目につく。それを理性で押えるところに万物の霊長たる人間になり得るのである。余裕のある者にとっては分らぬことが、余裕がなくなると本能が出てくるのである。夏合宿後初めて経験する者は本当の自分を見つめてみる事だ。人間とは何かを考えてみる事だ。人恋しさに負けぬよう夏合宿成功を祈る。

5月19日 5月生まれは賢い人が多いようである。とくに双子座生まれはしぶい人が多いようである。

5月19日 いえいえ8月生まれの人の方が賢いのだ。

5月19日 いえいえ12月生まれの人が賢いのだ。

5月19日 ウンニヤ9月生まれにあらざれば人にあらざるのだ。

5月19日 そうではない。一月生まれの人でなければ話にならないのだ。

49年7月2日

結団式がバート別だなんて、本当におもしろくない。マネージャーは何をしていたんだ。もつと働け働け!! キャブテンは何をしていたんだ、もつと楽しくやれ!! トレーナーは何をしていたんだ、少しはさわげ!! わあ、先輩の悪口いっちゃった。今のはウソウソ!

昭和四三年三月四日

太宰府の梅も五分咲きとか、春も本格的に来たようだ。そこで、先日、博多に通う汽車の中で詩を一つヒロウしうと思う。

藤村調に

萌え出する若葉の香り  
我が胸に淡くにおえば  
去りし日の夢をば想い  
去りし日の君をば想う

目をやれば低き山見ゆ  
かの山の雪も溶けずも  
山里のかげろう立ちて  
春は今、ここにありけん

種をまく農夫の一人

その春を足にとれども

我もまた はや春を知る

日の光 雪を溶かせば

足音も聞えぬまゝに

故郷に春は来るらし

K i s s

3月6日

宇宙があり、地球があるのか？ 地球があり、宇宙があるのか？ 人があり、社会があるのか？ 社会があり、人があるのか？ 死があり、生があるのか？ 生があり、死があるのか？ 人の存在とは何か？ 存在の本質とは？ 人が動けば、社会が動く。行動なくして存在の意義はない。行動のない社会は死に等しい。行動のない人間は死んぢまへ。人が動き、社会が動くか。社会が動き、人が動くにしても、行動のない存在はない。

ダイナミック・ソサイアティ。

ダイナミック・ヒューマニティ。

ワングルよ、行動しろ。行動なくして、創造はない。

ワングルよ、行動しろ。

S · K

3月19日

現役です。無事、帰福しました。四国の空は、あまりにも青すぎて、青に見えませんでした。

Dパートを除いて他のパートは、一m近くもある雪の中を歩くという雪山の醍醐味の一片を味わった。石鎚・剣は今なお、雪深く秀麗なる姿を見せていた。

今まで山歩きを中心に活動したが、今度の春合宿では、行き詰まった活動の打開ともいえるべき方向を見せつけられたような気がしてならない。数年来、S W Vは壁にぶつかっているという事を言われてきたが、この辺で何か新しい方向に進まないと何の魅力もないクラブになってしまいそうだ。十年目を前にして、S W Vは、大きく姿を変える必然性に迫られているのではなからうか。

現役 T · T

ここ数年来、転換期とか壁にぶつかっていると、先輩諸氏から言われてきたが、私はその転換期云々ということこそ転換期以外のなにものではないと思う。

クラブというものは、その指導者が自分たちの思うままに活動し、一年から四年までが十分に楽しんでこそ本当のものと思う。したがって、特別変わったことをやったりすることが転換期を打開するとは思えない。

現役 Y · T



4月16日

一人部屋に入り、このノートを読む。

昨日までの汽車の旅も、自分とつて何ら感じる所がない。

残雪に姿を隠し、春をまだ知らない山に入り、故郷にいる友人は何を思い何をしているかと歩きながら独り思った。あの気持は今はない。

ただじっとノートの紙を見つめ、自分の書く鉛筆の黒さだけが存在している自分を現わす。

明日からの講義・合宿・合ワンスべてが遠く、ただここに在る。

何もしない。何もしたくない。何をやっていいのか、何を求めるのか、全てが霧に隠れた存在である。

自分は待っている。待っている。何かが起る事を。

人は言うだろう、「自分から進め」と。何を求めて歩き、何を求めて行動するのか教えてほしい。教えてほしい。私は一切分らない。私は一切分らない。

T・O

4月22日

今日は、社会人になって二度目のスランプらしい。どうすればこのスランプから這い出せるだろうか。社会に出て一般的サラリーマンとなりつつ、一方では勉強しようなど

甘い考えではとてもやっていけない事に一年目にして気付くとは俺もつまらない男だ。アゝなさげない。

ここで心気一転。自分自身の一生の方向を決めるため、会社を退職することに決めた。この一週間、いろいろ考え、友人、先輩の意見を聞き、やっと結論を出した。なんだかスーとした気分になった。

明日から新しい職を探そう。出来れば会計士、税理士の事務が最上なんだけど、そう簡単にあるまい。幸い、67会（ロクデナシ会）の会長吉田氏もハッスルして勉強しているようだから、俺も負けずにやろう。

これからもいろいろ迷いが出ることがあるだろうから、その時は先輩諸氏の御助言を待っています。

M・N

4月23日

つれづれ思うまま、

久し振りのワングルノート。各人それぞれ己の道を進み、逞しい人格を感じる。これもワングルが生んだ、ワングルのワングルたるユエンだろう。この心意気を俺も己の物として行きたい。

社会に出、山に遠ざかる日々。ワングル時代の想い出、協同生活は忘れがたい。必ずや、社会に於いてその生活は

無視出来ないものを悟るだろう。

毎日暇なし。忙しい時程、又充実を感じるが、たまには息抜きにと思いここを尋ねた。時間もなし。只今より退出する。

K・Y

5月2日

WANDER VOGEL CLUB

自然界に於いて、自己を錬磨し、思考を深め、身心共に活動せしめるもの。

6月4日

学生時代に思った。知らない町を歩いてみたいと

社会人一年生の時 愛する人にめぐりあいたいと

めぐり会えた時 愛するという事を知らなかった。

結婚した今思う。 あれが愛だったんだなあーと。

10時頃まで時間をつぶさなくてはならぬ。ブラーと来たのは2回目。PACHINKOは負けるし、思いどおりにはならないし、気はくさくさ。

求めるものが何かは知らぬ。でも何かを求めている。そりゃゼニも欲しい。心の苦悩はそんなもんじやどうにも出来なく。

何もかも捨てる勇気があれば……と思う事も多い。そろ

そろ逃避したくなる病気が出て来た。いつも思う。「でもこれが現実だなあ」と。

もうやめ。

Z・Z

7月28日

速い昔、山に登ったような気がする。

青い空に白い雪溪の映える。

速い昔、長い道を歩いたような気がする。

黒いアスファルトの道に無情なガードレールの続く。

速い昔、飯盒の飯を食ったような気がする。

ひどいゴチ飯を無理して口に含むようになった。

速い昔、雨の島で泳いだような気がする。

ブッソウゲの花が俺の裸を黙って見ていた。

速い昔、キャンプファイヤーの炎を見たような気がする。

信濃の草原の空を焦がす真赤な炎を。

速い昔、皆経験したような気がする。

夢の中で……

K・S

8月2日

房屋に入つて見ると、夏合宿のパンフレットが目に入る。  
ワングル時代の生活が思い出されてくる。

夏山の雪溪ノ 夏山の草花ノ  
: : : o t c

あゝ早く山に行きたいなノ 無性に山に行きたくなつた。

T・I

8月9日

ああ、山へ行きたいノ

残雪に輝く高原へノ

花咲き競う高原へノ

雲海に輝く夕陽を見に

ああ、山に行きたいノ

M・T

9月23日

登つたゾーノ 山に登つたゾーノ

でも九重じやないゾーノ 宝満だゾーノ

朝起きたら天気が悪くて、雨が降りそうかどうか  
と思つた。でも、どうしても行きたかつた。社会人になる  
ととたんに、雨に濡れて歩くのがいやで、荷物かついで登  
るのがおっくうで、すぐ、いろいろ計算してしまふんです  
ナ。でも欲求の方が強くて、山仕度してフラリとあてもな

く出て来ると、無性に歩きたくなつて……。

今 壮快です。

宝満から大根地山ノ英彦山が見えました。もうススキが穂  
をつけていました。良かったです。

昔、縦断をしました。宝満から英彦山を見て遠いなあと  
思いました。そしてそれよりまだ遠い、この山から見えな  
い国分の海岸まで歩いたんです。そんな事を思いながら、  
寝そべてタバコをふかしていました。私は現役の頃、山  
では絶対にタバコをすいませんでした。今日、タバコの味  
がうまいと思えました。そして、ススキがすごく美しいも  
のだと思えました。単独行には独特の味があります。今、  
房屋でタバコをふかしていると、その火が妙にファイヤー  
の火と結びつきました。いつか、もう一度あのファイヤー  
の残り火の赤さを見たいです。

(御存知イナダでした)

11月20日

身も顔も知らぬ死者に唱う。

砂の城が波にさらわれる。

大きな波がいままでの努力を消してしまつた。

美しく、立派だった砂のお城。

誰も住めないけれど、大きく築かれた。

白くはないけれど何物も寄せつけないと思つていた。

私の城は波にさらわれた。

私は雨の降る浜べに一人ですわっていた。  
もうあれほどの城は作れない。

君も私もあの城は戻って来てはくれない。

波はどこにつれて行ったの

深い海の底でお城をつくるの

美しい魚達が住める城を海の底に作るの。

それともあの城はまぼろしだったの。

水に濡った茶色のはだのお城

私の手形がくつきりとうかんでいたお城

誰にも君にもさわらせなかつた。

私だけのお城。

遠い波音と一緒に消えてしまった。

霧の中の雨音の中に消えてしまった。

私は彼の父を見たこともありません。彼の話の中でしか  
聞いたことはありません。しかし、いいお父さんだったん  
でしょう。涙を見せてはいけません。君はまだここにいて  
のだから、嘆いてはいけません。お母さんや妹さんが悲し  
むだけです。

大和多



# 活 動 報 告

1960年 ◁ 主将 松岡博之 ▷

- |           |               |
|-----------|---------------|
| 5月14日     | 創立総会          |
| 6月5日      | 野北牧場ハイク       |
| 7月3日      | 三郡・宝満山縦走      |
| 8月17日～24日 | 夏期ワンデリング(南九州) |
| 10月2日～5日  | 祖母山・傾山縦走      |
| 11月3日     | 夜須高原ハイク       |
| 11月20日    | 志賀島サイクリング     |
| 12月?日     | 三郡縦走          |
- 

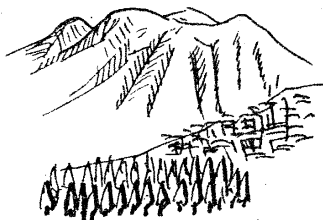
1961年

- |             |                                     |
|-------------|-------------------------------------|
| 3月31日～4月8日  | 春期ワンデリング(南紀)                        |
| 4月26日       | 新入生歓迎コンパ                            |
| 4月29日       | 野北牧場新人歓迎ハイク                         |
| 5月28日       | 野河内溪谷ハイク                            |
| 6月6日        | 例会                                  |
|             | 夏期ワンデリング対馬・椎葉IC決定                   |
| 6月28日       | 例会                                  |
|             | 合宿・夏期ワンデリングの件                       |
| 7月8日～10日    | 夏期ワンデリングの為の強化合宿<br>(日向神峽・釈迦岳・御前岳縦走) |
| 8月3日～12日    | 夏期ワンデリング 椎葉班(5名)                    |
| 8月4日～9日     | “ 対馬班(11名)                          |
| 9月29日～10月2日 | 高千穂峽ワンデリング(11名)                     |
| 10月?日       | 親睦コンパ(警固神社)                         |
|             | 次期主将決定(坂田芳徳)                        |
| 10月?日       | 三郡縦走(16名)                           |
| 11月3日～5日    | 祖母登山(3名)                            |
| 12月31日～1月1日 | 迎春 三郡・宝満夜間縦走(15名)                   |

1962年 ◁ 主将 坂田芳徳 ▷

2月27日～29日	九重登山(11名)
3月25日～4月2日	春期ワンデリング(四国 15名)
4月22日	新入生歓迎コンパ
4月29日	新入生歓迎ハイク(志賀島一周)
5月3日～6日	日南・霧島ワンデリング(7名)
6月17日	十防山ハイク(20名)
7月8日～12日	夏期合宿 九重山(45名)
8月16日～27日	夏期ワンデリング(山陰路)
9月29日～10月2日	国東半島班(14名)
9月29日～10月2日	筑紫山系班(7名)
9月30日～10月2日	由布・鶴見岳班(16名)
11月23日～25日	合同ワンデリング

場 所 筑紫山系・野呂高原  
参加大学 第一薬大, 九州商大, 西南大, 九大



## 63年度 活 動 報 告

◁ 主将 古川 洋 ▷

- |             |   |
|-------------|---|
| 3月18日～24日   | 春合宿 Aパート 天草(9名)   |
| 3月10日～22日   | Bパート 屋久島(7名)  |
| 2月23日～3月22日 | Cパート 九州縦断(5名)   |
| 3月22日～24日   | Dパート 日南海岸(6名)   |
| 4月28日～29日   | 新人歓迎合宿(野呂高原)  |
| 5月26日       | 九千部登山(22名)  |
| 6月22日～23日   | 英彦山登山   |
| 7月19日～30日   | 夏合宿 Aパート 蓼科・霧が峰・美ヶ原(7名)<br>Bパート 八ヶ岳及びその周辺(10名)<br>Cパート 八ヶ岳縦走(4名)<br>Dパート 白馬三山(8名) |
| 10月 1日～ 5日  | 九重登山(10名)   |
| 10月 1日～ 6日  | リーダー合宿<br>祖母・傾・五葉・大崩縦走(9名)  |
| 11月22日～24日  | 九州合ワソ(耳納山系平原)<br>参加大学 西南大・九大・第一薬科大・宮大・<br>九 九産大・大分大学                              |
| 1月18日       | 総会 新役員承認  |
| 1月26日       | 四大学交歓会(於九大)   |
| 2月15日       | 追い出しコンパ<br>機関誌第二号発行   |
| 2月27日～3月16日 | 春合宿<br>Aパート 沖繩(7名)<br>Bパート 四国(11名)<br>Cパート 九州横断パート(11名)<br>Dパート 天草(5名)            |

1963年度 夏 合 宿

	メンバー		行程
A （信州路） パート	P・L S・L	山田 進 松岡 正満 柴田 正幸 篠原 義幸 小田部 鎮康 江口 洋子 田中 郁代	茅野—蓼科山—八子ヶ峰—白樺湖 —霧ヶ峰—和田峠—三峰山—鼻 峠—茶臼山—美しの塔—山本小屋 —築地原—真田—菅平—長野
B （八ヶ岳およびその周辺） パート	P・L S・L	松井 泉 徳永 健治 古海 百二 高木 千歳 橋本 節子 永原 伸雄 金納 胖 上野 与史矩 脇田 正一 塩川 照子	茅野—農場—赤岳鉱泉↔赤岳↔ 横岳↔硫黄岳—オーレン小屋—夏 沢峠—天狗岳—黒百合平—高見石 —白駒池—稲子湯—松原湖—白 田—小諸—真田—菅平
C 八ヶ岳縦走 パート	P・L S・L	吉村 忠 竹本 是 柳田 尚信 中村 麿三	小淵沢—青年小屋—ギボン—権現 山—キレット小屋—赤岳—横岳 硫黄岳—夏沢峠—黒百合平—茶臼 山—横岳—大岳—双子池—野沢 小諸—真田—菅平
D （白馬三山） パート	P・L S・L	池永 昌弘 石田 勝彦 黒岩 毅 身深 嘉男 川添 晴男 星 馨 吉田 保之 坂本 昭彦	禰平—祖母谷温泉—清水小屋跡— 白馬岳—鏈ガ岳—天狗山荘—不帰 ノ嶮—唐松岳—丸山—八方山— 四谷—長野—菅平



## 64年度 活 動 報 告

◁ 主将      竹 本      是      ▷

- |            |  |
|------------|--|
| 4月18日～19日  | 新入生歓迎合宿（野呂高原）                                |
| 4月22日      | 総 会  |
| 5月 3日      | 三郡縦走   |
| 5月 9日～12日  | 九重強化合宿（5班）                                   |
| 5月17日      | 連盟主催講習会                                      |
| 5月20日      | 連盟主催映写会（電気ホール）                               |
| 5月30日      | カナン寮へ部室引越す                                   |
| 6月 5日～7日   | 九州合ワソ（九重）                                    |
| 6月20日      | 部 昇 格  |
| 6月27日      | 部昇格ぜんざい会                                     |
| 7月 5日      | 金山ポ ッカ                                       |
| 7月12日～29日  | 夏合宿（飯豊連峰・裏磐梯高原・月山朝日連峰・蔵王・<br>吾妻越後山系・尾瀬・南会津）  |
| 9月 9日      | 総 会  |
| 10月 1日～4日  | リーダー養成合宿（祖母・傾）<br>男子強化合宿（筑紫山系）<br>女子強化合宿（九重） |
| 10月17日     | ダンスパーティ（月世界）                                 |
| 10月24日     | コンパ（千里十里）                                    |
| 11月10日     | 大学祭参加（ロードレース・仮装行列）                           |
| 11月21日～23日 | 多良岳ワンデリング（32名中女10名）                          |
| 12月13日     | 四大学交歓会（於 九大）                                 |
| 2月18日      | 追い出しコンパ 機関誌第3号発行                             |
| 3月15日～25日  | 春合宿（屋久島）                                     |

1964年度 夏 合 宿

	メンバ－	行 程
A (飯豊連峰)	P・L・C・L S・L 記録 会計・食料 渉外・装備 松浦小田上柴西池渡 岡崎部野田原田渡 正福鎮与史雅知周 満夫康矩浩守行雄 (3) (3) (3) (2)	東赤谷 — 湯の平 — 中峰 — 北股岳 — 烏帽子岳 — 御西岳 — 飯豊山 — 三国岳 — 地藏山 — 飯豊鉦泉
B (朝日連峰)	P . L S・L 装備 会計・食料 柴川平藤鹿稲 田添井島田 正晴宣秀正 幸男稔雄一信	手向 — 羽黒山 — 月山 — 大井沢 — 寒江山 — 西朝日岳 — 大朝日岳 — 平岩山 — 葉山 — 長井
C (裏磐梯・安達太良)	P・L・C・L S . L L 会 計 装 備 ・ 記 録 食 料 杉籬橋中坂富後白原井辻 野原本村本藤川上 茂義節慶昭和牧郁須美保子 登幸子三彦真生子子美子	不動沢出合 — 名号峰 — 熊野岳 刈田岳 — 杉ヶ峰 — 屏風岳 — 不忘山 — 安達太良山 — 鉄山 — 東吾妻山 — 吾妻小富士 — 一切経山 — 冢形山 — 烏帽子岳 — 東大嶺 — 人形石 — 西吾妻 — 西大嶺 — 雄国山 — 雄国沼
D (尾瀬・南会津)	P・L・C・L S . L 食料・会計 装 備 平身清柳長塩太浜八 田深水田川田島尋 征士郎 嘉提尚英照浩洋 男夫信俊子子隆子 則二代馨一士侃子子是	富士見下 — 富士見峠 — 至仏山 — 燧岳 — 御池 — 大杉山 — 駒ヶ岳 — 檜枝岐 — 木賊 — 帝釈山 — 湯の花
E (越後山脈)	C・L・渉外 S . L 会 計 ・ 衛 生 食 料 装 備 ・ 記 録 岡古田星脇松池 部海中田延水島美金本 秩百郁正赴陽千淳 則二代馨一士侃子子是	土合 — ノ倉沢出合 — 清水 — 魚止滝 — 駒ヶ岳 — 小倉山 — 小沢平 — 御池 — 檜枝岐 — 内川

## 65年度 活 動 報 告

◁ 主将 上野 与史矩 ▷

- |             |                                |
|-------------|--------------------------------|
| 4月16日～18日   | 関西合同ワンデリング(蒜山高原)               |
| 4月24日       | 総 会                            |
| 4月24日～25日   | 新人歓迎合宿(野呂高原)                   |
| 5月 8日～11日   | 強化合宿(九重山系)                     |
| 5月29日       | 例 会                            |
| 6月 4日～5日    | 九州合ワソ(阿蘇)                      |
| 6月10日       | 例 会                            |
| 7月 3日       | 例 会                            |
| 7月13日～27日   | 夏合宿(八ヶ岳・筑城三山・木曾Ⅰ・Ⅱ・奥秩父)        |
| 8月10日       | 夏合宿反省会                         |
| 8月30日～9月3日  | 関西女子合ワソ(神鍋高原)                  |
| 9月11日       | 例 会                            |
| 9月30日～10月3日 | 女子リーダー合宿(筑紫山系)<br>一年強化合宿(筑紫山系) |
| 10月 1日～5日   | 男子リーダー合宿(作礼-雷山)                |
| 10月13日      | 例 会                            |
| 10月24日      | 50kmロード(学院-北山ダム往復)             |
| 11月 8日      | 大学祭参加(ロードレース・仮装行列)             |
| 11月12日～13日  | 学内公開ワンデリング(野呂高原)               |
| 11月21日～23日  | 秋期合宿 沢迎御前                      |
| 12月14日      | 連盟主催交歓会(於 九大)                  |
| 1月12日       | 臨時総会(次期主将決定)                   |
| 2月27日       | 春 合 宿                          |
|             | A 辺土名ワークキャンプ                   |
|             | B 北部ワンデリング                     |
|             | C 名護ワークキャンプ                    |

1965年度 夏 合 宿

	メ ン バ ー		行 程
A (八ヶ岳)	P・L S・L	上野与史矩 星 馨 長田 英俊 堀田 勝久 富本 真 宮原 照男 七田 学 大楠 薫 広渡	鏡音平—編笠山—権現山— キレット—赤岳—横岳—硫黄 岳—夏沢峠—天狗岳—中山峠 —中山—丸山—白駒池—茶 臼峠—縞栢山—横岳—蓼科山 —車山—強清水
B (雞城三山)	P・L S・L	吉田 欽治 平 稔 脇田 正一 西原 守 藤井 宣雄 高丘 欣生 伊佐	笹倉—泊岩—焼山—キレット —火打山—高谷池—妙高山ピ ストン—笹ヶ峰—大ダルミー —戸隠牧場—戸隠山—中社 飯綱山—大座法師池—善光寺 —長野—上田—和円峠— 強清水
C (木曾Ⅰ)	PL・CL S・L	柳田 尚信 坂本 昭彦 西田 治之 鹿児島秀一 稲田 正信 白川 牧子 青木美照子 今林 隆雄 樋口 恩 山本 裕弥 福山 藻子 大津留教子	恩田ガ原—御嶽山—王滝— 三笠山—八海山—御岳牧場— 上松—駒ヶ岳—伊那
D (木曾Ⅱ)	PL・CL S・L	塩川 照子 太田 浩子 中島 公子 大谷 一枝 篠田 邦子 辻 美保子 八尋 洋子 富沢美樹子 真栄田美奈子	御厩野—滝越—八海山—剣ヶ 峰—把ノ沢—木曾福島—玉ノ 窪—駒ノ岳—伊那
E (奥秩父)	P・L S・L	川添 晴男 中村 慶三 松延 赳士 渡 周雄 曾根本一昭 藤 松崎 佃 泰祐 大櫛 秀毅 鈴木 弘子 中岡 敏江	鶴沢—雲取小屋—雲取山—白 岩山—三峰神社—二瀬—栃木 —川又—雁坂小屋—雁坂— 甲武信小屋—甲武信岳—国師岳 —大弛小屋—金峰山—黒平 —矢神森—甲府

## 66年度 活 動 報 告

主将      松 延 越 士

- |             |   |
|-------------|---|
| 4月14日～17日   | 関西合ワンの(鉢高原)                                 |
| 4月23日～24日   | 新人歓迎合宿(野呂高原)                                |
| 5月7日～11日    | 春期新人強化合宿(久住・阿蘇)                             |
| 5月29日～6月1日  | 学内オープン(坊ケツル)                                |
| 6月2日～4日     | 全日本合ワンの(湯ノ丸高原)                              |
| 6月3日～5日     | 九州合ワンの(海老野高原)                               |
| 6月11日～13日   | 祖母・傾パーワン                                    |
| 6月18日～19日   | 福岡地区2年合ワンの(野呂高原)                            |
| 6月24日～26日   | 衛生講習会                                       |
| 6月29日～7月1日  | 気象講習会                                       |
| 7月3日        | 合同ボツカ                                       |
| 7月16日～8月1日  | 夏合宿   |
| 9月2日～3日     | 関西女子合ワンの                                    |
| 10月1日～4日    | 秋期パーワン・リーダー合宿<br>(多良A・B・英彦山・犬ヶ岳・由布・鶴見・祖母・傾) |
| 11月3日～5日    | 連盟オープン(鍋ノ平)                                 |
| 11月10日～13日  | 筑紫山系道標整備合宿                                  |
| 11月19日～23日  | 秋期1年強化合宿 筑紫山系<br>リーダー合宿(作礼・天山)              |
| 12月4日       | 市内四大学交歓会                                    |
| 1月3日        | OB交歓会                                       |
| 1月3日～7日     | スキーパーワン(大山)                                 |
| 1月5日～7日     | 正月祖母・傾パーワン                                  |
| 2月15日～3月10日 | 第2次道標整備合宿                                   |
| 2月20日       | 追い出しコンパ                                     |
| 2月23日～3月24日 | 春合宿<br>(台湾・九州縦断・九州横断・屋久島・五島・天草)             |

1966年度 夏 合 宿

	メンバー		行程
A (谷川連峰縦走)	P・L S・L	松延 赳士 富本 真 稲田 正信 高丘 欣生 伊藤 肇 松元 徳丸 大楠 薫 松尾 信也 大多和尚志	枝折峠 — 駒ヶ岳 — 中ノ岳 — 大日岳 — 清水峠 — 茂倉岳 — 万太郎山 — 赤倉山 — 白砂山 — 野反湖
B (飯豊連峰)	P・L S・L	西原 守 堀田 勝久 今林 隆雄 七田 学 山本 学 宮崎 久 佃 泰祐 上西 悠史 鮫島 弘美	大熊小屋 — 頼母木山 — 北股岳 — 門内岳 — 鳥帽子岳 — 大日岳 — 飯豊本山 — 三国岳 — 御沢小屋
C (南了白峰三山)	P・L S・L	鹿兒島秀一 曾根本一昭 池田 友行 宮原 照男 染井隆一郎 波多江嘉一郎 樋口 恩 小林 達男 山本 淳一	塩川 — 本谷山 — 塩見岳 — 北荒川岳 — 安倍荒倉岳 — 間ノ岳 — 農鳥岳 — 北岳 — 伊那荒倉岳 — 大仙丈岳 — 駒ヶ岳 — 伊那北
D (南了鳳凰三山)	P・L S・L	中西 治之 浜島 隆 藤井 宣雄 山本 裕弥 新野 和幸 淵上 秀典 大楠 秀毅 吉田 次郎 利根 孝一 平田 隆美	芦安 — 夜叉神峠 — 薬師岳 — 観音岳 — 地藏岳 — 広河原峠 — 甲斐駒ヶ岳 — 仙丈岳 — 伊那荒倉岳 — 北岳 — 広河原 — 夜叉神荘 芦 — 芦安
E (戸隠・妙高)	P・L S・L	中島 公子 白川 牧子 富沢美樹子 大津留教子 梅津 節子 鈴木 弘子 大田住世子	大座法師池 — 飯縄山 — 戸隠牧場 — 笹ヶ峰牧場 — 火打山 — 妙高山 — 斑尾山 — 古間
F (志賀高原)	P・L S・L	大谷 一枝 八尋 洋子 井上須美子 江頭美智子 坪井千代子 中岡 敏江 水口 博子 竹本 明子	見玉 — 金城山 — 苗場山 — 和山 — 清水小屋 — 高天ヶ原 — 岩菅山 — 裏岩菅山 — 鳥帽子岳 — 本百根山 — 赤白山 — 大高山 — 野反湖

## 67年度 活 動 報 告

4月 1日	役員改選
4月19日	総会(年間計画報告・新役員紹介)
4月22日～23日	新人歓迎合宿(野呂・雷山)
4月28日～30日	公開ワンデリング(阿蘇・鍋平)
5月31日	臨時総会
6月 2日～5日	九州合ワシ(九住・沢水)
6月 2日～4日	関西合ワシ(蒜山)
6月17日	例会(夏合宿の件)
7月15日～31日	夏合宿(南アルプス:4Part,本部移動本部)
9月29日～31日	関西女子合ワシ(花背)
9月30日	例 会
10月 5日～10日	第一次リーダー養成合宿 (祖母・多良・阿蘇外輪・万年山・英彦山)
10月28日	総会(春合宿計画・前期決算報告)
11月 6日	大学祭仮装行列
11月 8日	体 育 祭
11月23日～26日	1年強化合宿(筑紫山系) 第二次リーダー養成合宿(作 礼一天山一羽金山) 女子リーダー養成合宿(古湯一唐津)
11月29日	総会(部規約改正)
12月17日	四大学交歓会(於 大濠)
1月20日	総会(春合宿の件・次期主将任命)
2月20日	四年生追い出しコンパ
2月28日～3月15日	春合宿 四国横断 (A:滑床溪谷一日乃浦 B:徳島一日乃浦・ C:貞光一高知・D:宿毛一中土佐)

1967年度 夏 合 宿

	メンバー		行程
A (南南ア部)	P・L S・L	高丘 欣生 樋口 恩 上西 悠史 小林 達男 新野 和幸 熊本 勝安 杉原 健次 有田 重則	畑羅第一ダム — 茶臼岳 — 聖岳 免岳 — 赤石岳 — 塩見岳 — 農 鳥岳 — 間ノ岳 — 北岳 — 広河 原 — 奈良田
B (白鳳峰三三山)	P・L S・L	山本 裕弥 七田 学 大楠 秀毅 大和田尚志 宮崎 久 山下 孝一 田中 秀哲 中村 慎一 井上 攻	芦安 — 夜叉神荘 — 南御室小屋 — 北沢登山小屋 — 駒ヶ岳 仙丈岳 — 両俣小屋 — 北岳 — 間の岳 — 農鳥小屋 — 大門沢 — 奈良田
C (南縦ア走)	P・L S・L	宮原 照男 吉田 次郎 大楠 薫 山本 学 利根 孝一 谷口 正志 前畑 光伸 菊竹 礼三	小渋湯 — 広河原 — 荒川小屋 — 赤石岳 — 荒川三山 — 三伏峠 — 熊の平 — 三峰山 — 間の岳 — 農鳥岳 — 北岳 — 白根池 — 広 河原 — 大門沢 — 奈良田
D (八金ヶ峰岳山)	P・L S・L	富沢美樹子 鈴木 弘子 土井美弥子 水口 博子 竹本 明子 坪井千代子 野田 友子	波の湯 — 黒百合平 — 天狗岳 — 根石岳 — 硫黄 — 赤岳(ピストン) — 松原湖 — 富見平 — 金峰山 — 朝日岳(ピストン) — 黒平 — 甲府 — 夜叉神峠 — 荒川 — 奈 良田



## 68年度 活 動 報 告

4月 1日	役員交替
4月17日	新入生歓迎合宿（野呂高原～雷山）
4月27日～29日	学内オープンワンデリング（沢水キャンプ場）
5月 3日～7日	春季強化合宿（九重～阿蘇）
5月14日～15日	フレッシュマンキャンプ（1年生のみ社会教育会館）
5月31日～6月3日	九州合ワン（鍋の平）
6月15日	第1回コンバ（鶏自慢）
7月 3日	例会（夏合宿の件）
7月 9日～11日	各パート別予備合宿
8月 1日～19日	夏合宿（北海道 集結地 能取湖キャンプ場）
9月14日	例会（パーワンの件）
10月 5日～10日	パートワンデリング
10月19日～21日	リーダー合宿（筑紫山系）
11月 9日	総 会
11月12日	体 育 祭
11月16日	クラブ対抗駅伝（第3位）
11月21日～24日	秋季強化合宿（筑紫山系） 2年リーダー養成合宿（酒香皇子・八方岳周辺） 女子リーダー養成合宿（釈迦・御前岳周辺）
11月30日	第2回コンバ（幾永）
12月 7日	体育会送別会（4年生）
12月 8日	福岡地区ワンゲル交歓会（大濠公園）
12月14日～15日	1年野呂ミーティング合宿
12月21日	部室移転
1月18日	臨時総会（春合宿の件）
2月20日	追い出しコンバ
2月24日～30日	春合宿（奄美大島・屋久島：2・瓶島）

1968年度 夏 合 宿

	メ ン バ ー		行 程
A (大雪山系)	P・L S・L	小林 達男 山本 学 田中 秀哲 中村 慎一 上田 成昭 野口 光男 高丘 素行 高塚 健一	層雲峡 — 黒岳 — 化雲岳 — 十勝岳 — 富良野岳 — 上富良野
B (利尻・北礼文島)	P・L S・L	宮崎 久 新野 和幸 前畑 光伸 有田 重則 山内 英二 三苦 達久 藤 直幸 江島 栄二郎 北山 憲一 西村 和夫	利尻島オン泊港 — 利尻岳 (ピストン) — 礼文島香深港 — 礼文島 (ピストン) — 稚内 — 宗谷岬 — 鬼志別
C (大雪山縦走)	P・L S・L	山本 学 平田 隆美 杉原 健次 帆足 義光 西 利正 木塚 孝晴 原 昭博 山川 信夫 原田 真澄	富良野 — 旭野 — 十勝岳温泉 — 富良野岳 — 十勝岳 — 化雲岳 石狩岳 — 十勝三股 — 糖平 — 帯広 — 釧路 — 浜小清水 — 能取湖テントサイト
D (道東縦走)	P・L S・L	土井美弥子 利根 孝一 野田 友子 谷口 正志 熊本 勝安 吉田 潤子 木下 節子 米田 照子 島田 章子 寒竹 幸子	納沙布岬 — 根室 — 西別 — 高丘 — 計根別 — 養老牛温泉 — 標津岳 (ピストン) — 麻周湖 — 札鶴 — 清里 — 斜里岳 (ピストン) — 浜小清水 — 綱走 — 北見平和 — 能取湖テントサイト

## 69年度 活 動 報 告

### 主将

4月1日	役員改選
4月16日	クラブ総会
4月18日～19日	新人歓迎合宿(若杉楽園)
5月3日～6日	新人強化合宿(万年山-涌蓋山-筋湯-九重)
5月17日～19日	九州合同ワンデリング(沢山-九住山-坊ヶツル)
5月17日～18日	一年四年合宿(犬ヶ岳)
6月4日	臨時総会(日本縦断の件)
6月14日	第1回コンバ(幾永)
6月22日	宝満ボッカ(雨天のため宝満より若杉の縦走中止)
7月15～8月17日	10周年記念 日本縦断
9月10日	例 会
10月16日～20日	1年強化合宿(学院-椎原-背振-十坊-原-学院)
10月17日～20日	第1回2年リーダー合宿(阿蘇外輪)
	女子合宿(筑紫山系)
11月1日～3日	連盟オープン(九重山系)
11月7日	体育祭クラブ対抗駅伝(第3位)
11月21日～24日	第2回リーダー合宿(阿蘇・九重・多良・筑紫)
12月3日	福岡地区ワンゲル交歓会(大濠)
12月18日	忘年コンバ
1月10日	総会(春合宿の件)
2月12日	追い出しコンバ(幾永)
2月29日～3月11日	春合宿(大崩-傾-祖母-背梁-四国)
	集結地(志高湖高原)

# 1969年度 夏 合 宿

ブ ロ ック	パ ー ト	メ ン バ ー	終 了 日	区 間
北 海 道	北部	P・L 田中秀哲, 増永憲正, 浜口雅博	8月4日	稚内→旭川
	中部	P・L 山内英二, 藤崎忠夫, 山崎裕二	8月5日	旭川→丸駒
	南部	P・L 中村慎一, 江島栄一郎	8月5日	丸駒→函館
東 北	北部	P・L 有田重則, 野口光男, 井上修一	8月3日	青森→湯田
	中部	P・L 利根孝一, 高塚健一, 石田守幸	8月3日	湯田→赤湯
	南部	P・L 帆足義光, 山本学, 西利正, 山口博幸	8月5日	赤湯→日光
関東	関東	P・L 上田成昭, 原田真澄, 仁田原	8月2日	日光→松本
中 部	山岳	P・L 菊竹礼三, 山川信夫, 木塚孝晴 三苫達久, 高屋修二	8月1日	松本→古川
	山地	P・L 熊本勝安, 西村和夫, 藤直幸	8月10日	古川→比良
関西	関西	P・L 谷口正志, 高丘素行, 波多江正洋	7月23日	比良→津山
中 国	東部	P・L 前畑光伸, 北山憲一	7月27日	津山→八重
	西部	P・L 大多和尚志, 原昭博	7月24日	八重→門司
九 州	北部	P・L 杉原健次, 吉田潤子, 島田章子 寒竹幸子, 塚本洋子, 二神孝子	8月6日	門司→馬見原
	南部	P・L 新野和幸, 米田昭子, 木下節子 井上加代子, 中島倫子	8月4日	馬見原→佐多岬

出 発 7月5日(全パート)博多駅

集 結 8月15日~16日(糸島・野呂高原)

5ブ  
ロ  
ック 14パ  
ー  
ト

合 計 日 数 234日(遊行日, 沈黙日含む)

参 加 人 数 47人

稚内↔佐多岬 約3,200km

## 70年度 活 動 報 告

### 主 将

5月 3日～4日	オープンワンデリング(沢水)
5月 9日～13日	新人訓練合宿(九重山系)
5月29日～6月1日	九州合同ワンデリング(霧島)
	一・四パーワン(古処山)
6月13日～14日	宝満歩荷
7月23日～8月3日	夏合宿(南アルプス)
10月17日～18日	佐賀ロードレース
11月 1日～3日	連盟オープン(九重山系)
12月20日～23日	一年強化合宿(筑紫山系)
	二年男子(英彦山～古処)
	女子リーダー養成合宿(阿蘇)
12月 1日	福岡地区ワンデリング
2月21日～3月5日	春合宿(屋久島・沖ノ永良部島・大山スキー・奄美大島・与呂島)

## 71年度 活 動 報 告

4月19日～20日	新人歓迎合宿(若杉山楽園)
5月 2日～5日	春季強化合宿(九重山系 男子3パート)
5月27日～28日	1・4パーワン(古処山)
5月29日～6月1日	九州学生合同ワンデリング(九重山系)
6月 中 旬	宝満歩荷(宝満～若杉)
7月27日～8月12日	夏合宿(北海道)
10月 下 旬	佐賀ロードレース
10月29日～30日	オープンワンデリング(霧島えびの高原)
12月 4日～7日	秋の強化合宿(筑紫山系)
2月下旬～3月上旬	春合宿(背梁・祖母・大崩・屋久島)

7 1 年 度 夏 合 宿

	メ	ン	バ	ー	学年	行	程
A (大雪山系)	P・L	石	田	守 幸	Ⅲ	札幌 — 富良野 — 布礼別 — 原始 ケ原 — 富良野岳 — 十勝岳 — 美瑛岳 — オプタテシク山 — 双子 池 — コマヌスプリ — 黄金ケ原 — トウラウシ — ヒサゴ沼 — 化 雲岳 — 夫人峽	
	C・L 装	武	川	敏 治	Ⅱ		
	備	清	原	秀 則	Ⅱ		
	C・L 食	藤	井	高 志	Ⅰ		
	医	岩	永	好 生	Ⅰ		
B (大雪山系)	P・L	山	口	博 行	Ⅲ	帯広 — 幌加 — 幌加川 — ニベツ ツ山 — 三服 — 音更山 — 石狩岳 川上岳 — 沼の原 — 五色岳 — 高 根ガ原 — 北海岳 — 熊ガ岳 — 旭岳 — 沼の原 — 愛山溪	
	S・L	山	川	信 夫	Ⅳ		
	記録・気	田	中	敏 夫	Ⅱ		
	象	寺	山	雄 一	Ⅱ		
	食・会・医	山	永	泰 孝	Ⅰ		
	装	山	野	田 英	Ⅰ		
備							
C (利 暑寒別)	P・L	山	崎	裕 二	Ⅲ	稚内 — 鷺泊 — 姫沼 — 鬼脇 — ヤムナイ沢 — 利尻山 — 鷺泊 — 香深 — 船泊 — 増毛 — 暑寒別岳 登山口 — 暑寒別岳 — 雨竜沼 — 暑寒ダム — 雨竜駅	
	S・L	波	多	江 正	Ⅲ		
		伊	藤	信 利	Ⅱ		
		才	田	俊 輔	Ⅰ		
		今	村	英 登	Ⅰ		
D (道 北 ロ ー ド)	P・L	二	神	孝 子	Ⅲ	天塩 — 幌延 — 豊富温泉 — 豊徳 — かぶと沼 — 抜海岬 — 稚内 — 宗谷岬 — 鬼志別	
	S・L	井	上	加代子	Ⅲ		
	装	平	岡	洋 子	Ⅱ		
	備	才	田	啓 子	Ⅱ		
	食	松	尾	和 子	Ⅱ		
	料	松	宮	鷹 子	Ⅱ		
	象	古	閑	馨	Ⅰ		
	・会	井	口	由美子	Ⅰ		
	計	牧	洋	子	Ⅰ		
	衛						
生							
松							
宮							
鷹							
子							
馨							
子							
由							
美							
子							
牧							
洋							
子							

## 7 2 年 度 活 動 報 告

- 5月 新人訓練合宿・歓迎合宿（九重3パート）
- 6月 宝満歩荷中止  
地区合ワンの（雷山・井原）
- 7月 夏合宿（男 南アルプス 3パート，女 八ヶ岳 2パート，  
集結地 夜叉神峠）
- 10月 試験明けパーワン（北ア・祖母・傾・石鎚・阿蘇）  
佐賀ロードレース
- 11月 新人強化合宿（筑紫山系）  
オープンワンデリング（九重）
- 2月 春合宿（屋久島 2パート，セキリョウ 1パート，トカラ列  
島 1パート）

## 7 3 年 度 活 動 報 告

- 4月10日 入学式
- 5月 2日～6日 春期強化合宿（万年山～九重）
- 5月11日～13日 学内オープン（地藏原）
- 5月26日～29日 九州学生合同ワンデリング（九重山系）
- 6月 9日～11日 地区合ワンの（雷山）
- 7月上旬 宝満歩荷
- 7月 7日 福岡地区大学連盟講習会
- 7月26日～8月9日 夏合宿
- 10月 4日～6日 試験明けパーワン（大崩・その他）
- 10月20日～21日 佐賀ロードレース
- 11月29日～12月2日 秋の強化合宿（1・3年筑紫山系）  
リーダーズ合宿（2年）
- 2月17日～28日 春合宿（背梁・屋久島・祖母・傾・トカラ列島）

## 73年度 夏合宿メンバー表

<p><b>A 飯豊 朝日連峰</b></p> <p>野田英作 (Ⅲ)</p> <p>山永泰孝 (Ⅲ)</p> <p>阿部和昭 (Ⅱ)</p> <p>川嶋藤雄 (Ⅱ)</p> <p>山本隆 (Ⅰ)</p> <p>中村和史 (Ⅰ)</p> <p>近藤伸哉 (Ⅰ)</p>	<p><b>B 飯豊 朝日連峰</b></p> <p>梅田栄一郎 (Ⅲ)</p> <p>小河滋宏 (Ⅱ)</p> <p>中村満 (Ⅱ)</p> <p>山本隆一 (Ⅰ)</p> <p>井本剛史 (Ⅰ)</p> <p>水城忠明 (Ⅰ)</p> <p>島戸豊 (Ⅰ)</p>
<p><b>C 飯豊連峰</b></p> <p>徳永博明 (Ⅲ)</p> <p>花田尚子 (Ⅱ)</p> <p>梅津幸子 (Ⅱ)</p> <p>中山昌子 (Ⅰ)</p> <p>大津留佐智子 (Ⅰ)</p> <p>井上和子 (Ⅰ)</p> <p>村上保子 (Ⅰ)</p>	<p><b>D 飯豊連峰</b></p> <p>岩永好生 (Ⅲ)</p> <p>富安絹子 (Ⅱ)</p> <p>安武和代 (Ⅱ)</p> <p>木原文子 (Ⅱ)</p> <p>篠崎則子 (Ⅰ)</p> <p>阿部真知子 (Ⅰ)</p> <p>藤村律子 (Ⅰ)</p>

## 74年度 活動報告

- 5月 新人強化合宿(九重山系)
- 5月 九州学生合同ワンデリング(九重山系)
- 6月 清掃合宿(筑紫山系)
- 7月 宝満～若杉縦走
- 7月 夏合宿(北アルプス2 南アルプス2)
- 9月 試験明P.W(祖母・傾・大崩)
- 10月 地区合ワン(英彦山)
- 10月 佐賀ロード
- 11月 秋季強化合宿(筑紫山系)
- 2月 春合宿(石鎚・背梁・屋久島)
- 3月 送別ファイヤー(白糸の滝)



## 7 5 年 度 活 動 報 告

4月 1日	役員交代
4月25日	総 会
5月 2日～6日	春期強化合宿(九重)
5月24日～26日	九州学生合同ワンデリング(阿蘇) 1・4パーワン(古処山)
5月28日～29日	フレッシュマンキャンプ(1年社会教育会館)
5月31日	新人歓迎コンパ(ピオネ装)
6月14日～15日	清掃合宿(筑紫山系)
6月21日	地区講習会(九大)
7月 5日～6日	宝満歩荷(宝満一若杉)
7月12日	夏合宿結団コンパ(ピオネ荘)
7月24日～8月9日	夏合宿(大雪山系・道東・道北・5パート)
10月 2日～6日	(祖母・傾・由布・鶴見・サイクリング・菊地溪谷・ 大崩)
10月10日～12日	体育会リーダーズキャンプ(志賀島)
10月18日～21日	地区合同ワンデリング(九重)
10月25日～26日	佐賀ロードレース
11月21日～24日	秋期強化合宿(筑紫山系)
12月 7日	福岡地区大学WV連盟交歓会(福工大)
12月20日	総会・忘年コンパ(源蔵)
2月10日	追い出しコンパ(大仙)
2月20日～28日	春合宿(祖母・傾・屋久島・南紀・奄美大島)

75年度 夏 合 宿

	メンバー		学年	行程表
A (大雪山系)	P . L	島 戸 豊	Ⅲ	上川駅…愛山溪温泉—姿見ノ池 —旭岳—間宮岳—忠別岳— 沼ノ平—五色岳—トムラウシ岳 —黄金ヶ原—コスヌブリ— オブタテシク山—美瑛岳—十勝 岳—富良野岳—原始ヶ原— 布礼別…富良野駅
	S . L	井 本 剛 史	Ⅲ	
	気象・医療	檀 雅 之	Ⅱ	
	食料・会計	林 雄 二	Ⅱ	
	装 備	片 山 光 弘	Ⅰ	
	"	木 下 雅 彦	Ⅰ	
B (大雪山系)	P . L	山 本 隆 一	Ⅲ	富良野駅…布礼別—原始ヶ原 —富良野岳—十勝岳—美瑛岳 —コスヌブリ—黄金ヶ原— トムラウシ山—五色岳—忠別岳 高根ヶ原—白雲山—間宮岳— 旭岳—姿見ノ池—勇駒別温泉
	S . L	近 藤 伸 哉	Ⅲ	
	食料・会計	宮 川 和 彦	Ⅲ	
	装 備	柴 田 敬 二	Ⅰ	
	"	荒 卷 忠 史	Ⅰ	
	"	原 田 博 幸	Ⅱ	
C (暑寒別・礼文)	P . L	水 城 忠 明	Ⅲ	稚内—鴛泊—姫沼—鬼脇— 利尻山—登形—鴛泊—香深— 礼文岳—船泊—稚内—増毛— 暑寒別岳—郡別岳—南暑寒別基 部—南暑寒別岳—雨竜沼—暑 寒ダム…滝川駅
	S . . . L	中 村 和 史	Ⅲ	
		黒 木 村 聡	Ⅱ	
		木 村 聡	Ⅰ	
		中 野 本 永	Ⅰ	
		藤 永	Ⅰ	
D (利尻・礼文)				札幌—浜頓別—大沼—浜猿払 芦野—稚内—香深—元地— 起登白—内路—久種湖—船泊 —香深—鴛泊—利尻山— 鴛泊—稚内
E (道東)	P . L	藤 村 律 子	Ⅲ	根室—納沙布岬—風蓮湖— 尾袋沼—根室標津—養老牛温泉 —摩周湖—摩周岳—札弦— 藻琴—網走湖—網走
	S . L	草 島 多美子	Ⅱ	
	食料・会計	長 野 律 子	Ⅱ	
	装 備	椎 葉 ゆう子	Ⅰ	
	"	赤 星 喜美子	Ⅰ	

## 76年度 活 動 報 告

4月 1日	役員交替
4月24日	クラブ総会
5月 2日～5日	新人歓迎合宿（九重山系）
5月22日～24日	九合ワン（九重）・一・四パーワン（能古島）
6月 2日	歩荷練習開始
6月 5日	新人歓迎コンバ（ピオネ荘）
6月18日～20日	強化合宿（犬ヶ岳～英彦山）
7月 3日～4日	夏合宿パート別予備合宿（筑紫山系・宝満～若杉）
7月10日	結団コンバ（ピオネ荘）
7月21日～8月10日	夏合宿（南北アルプス・三城牧場）
10月 3日～6日	試験明けパーワン（霧島・大崩・多良・阿蘇）
10月23日～24日	佐賀ロードレース
11月 上旬	大学祭（模擬店出店）
11月20日～23日	秋の強化（筑紫山系）
	リーダーズ合宿
12月18日	クラブ総会・忘年コンバ
2月11日	追い出しコンバ
2月 下旬	春合宿（祖母・傾・石鎚・南紀・大山）

7.6年度 夏 合 宿

	メンバー		学年	行程表
A (南アルプス)	P・L	檀 雅 之	Ⅲ	井川 — 畑籬第一ダム — 茶臼山 — 聖岳 — 赤石岳 — 荒川三山 — 塩見岳 — 池ノ沢 — 農鳥岳 — 北岳 — 鳳凰 三山 — 夜叉神峠
	S・L	黒 本 聡	Ⅲ	
	食 料	荒 巻 忠 史	Ⅱ	
	気 象	柴 田 敬 二	Ⅱ	
	装 備	東 亮 一	I	
	"	植 弘 靖 彦	I	
"	泰 常 裕	I		
B (北アルプス)	P・L	林 雄 二	Ⅲ	雷鳥平 — 五色ヶ原 — 薬師岳 — 雲ノ 平 — 三俣蓮華岳 — 双六池 — 槍ヶ岳 — 北穂高岳 — 奥穂高岳 — 上高地
	S・L	宮 川 和 彦	Ⅳ	
	気 象	原 田 博 幸	Ⅲ	
	食 料	片 山 光 弘	Ⅱ	
	装 備	久保田 浩	I	
	"	沖 本 聡	I	
C (北アルプス)	P・L	山 崎 千 晴	Ⅲ	有明 — 中房温泉 — 燕岳 — 大天井岳 — 槍ヶ岳 — 横尾山荘 — 酒沢 — 奥穂高岳 — 上高地
	S・L	長 野 律 子	Ⅲ	
	気 象	椎 葉 ゆう子	Ⅱ	
	食 料	関 祥 子	Ⅱ	
	装 備	池 浦 みゆき	I	
	"	森 実 久美子	I	
食 補	山 田 茂 子	I		
D (南アルプス)	P・L	草 島 多美子	Ⅲ	戸台 — 北沢峠 — 甲斐駒ヶ岳 — 広河 原 — 北岳 — 熊ノ平 — 塩見岳 — 三伏峠 — 塩川
	S・L	増 田 厚 子	Ⅲ	
	食 料	大 石 恭 子	Ⅱ	
	記 録	赤 星 喜美子	Ⅱ	
	気 象	坂 本 章 子	Ⅱ	
	食 補	安河内 道 子	I	

## 77年度活動報告

- |             |  |
|-------------|--|
| 3月 5日～6日    | 送別ファイヤー(金山山麓)                                |
| 4月 1日       | 役員交代(78期より79期へ)                              |
| 4月20日       | 総 会  |
| 4月29日～5月1日  | 学内オープン(九重山系・参加者70名)                          |
| 5月 8日～11日   | 春季強化合宿(九重山系)                                 |
| 5月14日       | 新人歓迎コンパ(ピオネ荘)                                |
| 5月28日～30日   | 九州学生W・V連盟合同ワンデリング(霧島山系・えびの高原)                |
| 6月 2日～3日    | 一・四パーワン(雷山)<br>体育会フレッツ ユマンキャンプ(一年生 今宿野外センター) |
| 6月12日       | 福岡地区大学W・V連盟講習会(福岡大学)<br>同 連盟コンパ(ピオネ荘)        |
| 6月18日～19日   | 清掃合宿(筑紫山系5パート)                               |
| 7月 2日～3日    | 宝満歩荷合宿(宝満山～若杉・男37kg・女27kg)                   |
| 7月18日～8月11日 | 夏合宿(南北アルプス・5パート・蓼科湖畔)                        |
| 9月 4日       | 福岡地区大学W・V連盟合同登山<br>(宝満山・筑紫山系・立花山・福智山)        |
| 9月30日～10月3日 | 試験明けパーワン<br>(4パート・祖母・傾・多良岳・大山・大崩)            |
| 10月13日～14日  | 体育会リーダーズキャンプ(芥屋国民宿舎)                         |
| 10月15日～17日  | 福岡地区大学W・V連盟合同ワンデリング(九重山系)                    |
| 10月21日～22日  | 佐賀ロードレース中止                                   |
| 11月 2日～3日   | 体育会 スフォーモアキャンプ(国民宿舎仙石荘)                      |
| 11月 5日～6日   | 秋合宿(雷山・井原・5パート)                              |
| 11月20日～23日  | 秋期強化合宿(1・3年筑紫山系)<br>リーダーズ合宿(2年福智山)           |
| 12月 4日      | 福岡地区大学W・V連盟交歓会(福工大グラウンド)<br>同 連盟コンパ(ピオネ荘)    |
| 12月17日      | クラブ総会・忘年コンパ(鳥自慢)                             |
| 2月10日       | 追へしコンパ(三国屋)                                  |
| 2月 下旬       | 春合宿(4パート・祖母・傾・屋久島・大山・石鎚)                     |

77年度 夏 合 宿

	メンバ－	学年	行 程 表	
A (北アルプス)	P . L	柴 田 敬 二	Ⅲ	雷鳥平 — 剣岳 — 五色ヶ原 — 薬師 岳 — 黒部五郎岳 — 双六池 — 槍ヶ 岳 — 常念岳 — 横尾 — 穂高岳 — 上高地
	S . L 気象	植 弘 靖 彦	Ⅱ	
	食 料	東 亮 一	Ⅱ	
	医 療	尾 崎 照 男	Ⅰ	
	装 備	加 藤 淳	Ⅰ	
気 象 補	都 原 誠 一	Ⅰ		
B (北アルプス)	P . L	荒 卷 忠 史	Ⅲ	親不知 — 朝日岳 — 白馬岳 — 唐松 岳 — 鹿島槍ヶ岳 — 針ノ木岳 — 野 口五郎岳 — 双六池 — 槍ヶ岳 — 常 念岳 — 横尾 — 奥穂高岳 — 前穂高 岳 — 上高地
	S . L 気象	泰 常 裕	Ⅱ	
	装 備	松 下 克 也	Ⅱ	
	食 料	沖 本 聡	Ⅱ	
		古 賀 栄 一	Ⅰ	
	岩 本 一 郎	Ⅰ		
C (南アルプス)	P . L	片 山 光 弘	Ⅲ	戸台 — 甲斐駒ヶ岳 — 北岳 — 農鳥 岳 — 塩見岳 — 荒川三山 — 赤石温 泉
	S . L 食料	久保田 浩	Ⅱ	
	気 象	吉 田 久 志	Ⅱ	
	装 備	宝 蔵 隆 一	Ⅰ	
	会 計	渡 辺 博 文	Ⅰ	
D (北アルプス)	P . . L	坂 本 章 子	Ⅲ	新穂高 — 槍ヶ岳 — 双六池 — 雲の 平 — 薬師岳 — 折立平
	S . L	関 祥 子	Ⅲ	
	食 料	山 田 茂 子	Ⅱ	
	装 備	荒 木 邦 子	Ⅰ	
	気 象	永 井 智 子	Ⅰ	
会 計	岩 野 敏 子	Ⅰ		
E (北アルプス)	P . L	椎 葉 ゆう子	Ⅲ	折立平 — 薬師岳 — 雲の平 — 双六 池 — 槍ヶ岳 — 薬ヶ岳 — 上高地
	S . L	大 石 恭 子	Ⅲ	
	食 料	池 浦 みゆき	Ⅱ	
	気 象	大 麻 説 子	Ⅱ	
	装 備	栗 塚 五 鈴	Ⅰ	
気 補	村 田 恵 美子	Ⅰ		
食 補	田 中 由 記子	Ⅰ		

## 7 8 年 度 活 動 報 告

- |             |   |
|-------------|---|
| 3月 4日～5日    | 送別フェイヤー（坊主滝）                            |
| 4月 1日       | 役員交代                                    |
| 4月28日～30日   | 新人歓迎合宿（筑紫山系6パート）                        |
| 5月11日～14日   | 春季強化合宿（九重山系3パート）                        |
| 5月27日～29日   | 九州学生W・V連盟合同ワンデリング（九重山系）<br>一・四パーワン（古処山） |
| 6月 上旬       | 部内講習会                                   |
| 6月11日       | 福岡地区大学W・V連盟講習会（福工大）<br>同連盟合同コンパ（ピオネ荘）   |
| 6月17日～18日   | 清掃合宿（宝満・筑紫山系5パート）                       |
| 7月 1日～2日    | 宝満歩荷合宿                                  |
| 7月22日～8月10日 | （南北アルプス・奥秩父・八ヶ岳）                        |
| 9月 3日       | 福岡地区大学W・V連盟合同清掃登山                       |
| 9月29日～10月1日 | 試験明けパーワン（祖母・傾・大崩・大山・青海島・<br>多良）         |
| 10月14日～16日  | 福岡地区大学W・V連盟合同ワンデリング（阿蘇・<br>鍋の平）         |
| 11月 2日～10日  | 秋合宿（南紀・八ヶ岳・石鎚・背りょう）                     |
| 11月23日～26日  | 秋期強化合宿（筑紫山系）<br>リーダーズ合宿（古処山）            |
| 12月 3日      | 福岡地区大学W・V連盟交歓会（駅伝・大濠公園）<br>同連盟コンパ（ピオネ荘） |
| 12月16日      | 忘年コンパ（幾永）                               |
| 1月 3日       | OB総会（山海）                                |
| 2月10日       | 追い出しコンパ（源蔵）                             |
| 2月中～下旬      | 春合宿（西表島・大山・屋久島・大山スキー・九重）                |

78年度 夏 合 宿

	メンバー		学年	行 程 表
A (奥八ヶ岳 秩父)	P・L	久保田 浩	Ⅲ	雲取山 — 甲武信山 — 国師岳 — 金峰山 — 瑞牆山 — 阿弥陀岳 — 赤岳 — 横岳 — 硫黄岳 — 天狗岳 — 北横岳 — 蓼科山
	S・L 食料	岩本 一郎	Ⅱ	
	気象	佐田 立彦	Ⅱ	
	医療・装備	金水 紀代司	I	
B (北アルプス)	P・L	沖本 聡	Ⅲ	室堂 — 剣岳 — 立山 — 越中沢岳 — 薬師岳 — 黒部五郎岳 — 三俣蓮華 岳 — 鷲羽岳 — 槍ヶ岳 — 奥穂高 岳 — 屏風の頭 — 上高地
	S・L	泰 常裕	Ⅲ	
	食料・会計	宝蔵 涉	Ⅱ	
	気象	川野 昭	I	
	医療	久保山 豪	I	
装 備	久保田 恭	I		
C (北アルプス)	P・L	吉田 久志	Ⅲ	楯池 — 白馬岳 — 唐松岳 — 五竜 岳 — 鹿島槍ヶ岳 — 針ノ木岳 — 鳥帽子岳 — 鷲羽岳 — 槍ヶ岳 — 奥穂高岳 — 屏風の頭 — 上高地
	S・L	東 亮一	Ⅲ	
	食料・会計	渡辺 隆一	Ⅱ	
	気象	加藤 淳	Ⅱ	
	医療	久保山 和彦	I	
装 備	早崎 善宏	I		
D (南アルプス)	E・L	植弘 靖彦	Ⅲ	茶白山 — 光岳 — 聖岳 — 赤石岳 — 悪沢岳 — 三伏峠 — 塩見岳 — 農 鳥岳 — 間の岳 — 北岳 — 仙丈岳 — 甲斐駒ヶ岳 — 地蔵岳 — 観音 岳 — 薬師岳 — 夜叉神峠
	S・L	松下 克也	Ⅲ	
	食料・会計	都原 誠一	Ⅱ	
	気象	古賀 栄一	Ⅱ	
	装 備	安武 真吾	I	
	医療	宮岡 淳二	I	
記 録	後藤 敏	I		
E (南アルプス)	P・L	山田 茂子	Ⅲ	農鳥岳 — 間の岳 — 北岳 — 広河 甲斐駒ヶ岳 — 戸台
	S・L	池浦 みゆき	Ⅲ	
	食料・会計	田中 由起子	Ⅱ	
	気象・医療	栗塚 五鈴	Ⅱ	
	装 備	森 綾乃	I	
"	宮本 敬子	I		



## 79年度活動報告

- |             |   |
|-------------|---|
| 3月 3日～4日    | 送別ファイヤー(坊主滝)                                |
| 4月 1日       | 役員交代  |
| 4月28日～30日   | 新人歓迎合宿(筑紫山系)<br>20周年記念オープンファイヤー(今宿野外活動センター) |
| 5月15日～18日   | 春期強化合宿(九重山系)                                |
| 6月 2日～6月4日  | 九州学生W・V連盟合同ワンデリング(阿蘇)<br>一・四パーワン(古処山)       |
| 6月 上旬       | 部内講習会                                       |
| 6月 9日       | 福岡地区大学W・V連盟講習会<br>同連盟コンパ(ピオネ荘)              |
| 6月16日～17日   | 清掃合宿(筑紫山系)                                  |
| 6月30日～7月1日  | 宝満歩荷合宿(宝満-若杉)                               |
| 7月20日～8月10日 | 夏合宿(北アルプス3パート・南アルプス1パート)                    |
| 9月 4日       | 福岡地区大学W・V連盟清掃登山                             |
| 9月28日～10月1日 | 試験明けパーワン(祖母・傾・霧島)                           |
| 10月13日～15日  | 福岡地区大学W・V連盟合同ワンデリング(九重山系)                   |
| 11月 3日～10日  | 秋合宿(屋久島)                                    |
| 11月22日～25日  | 秋期強化合宿(筑紫山系)<br>リーダーズ合宿(岳蔵鬼)                |
| 12月 1日      | 福岡地区大学W・V連盟交歓会(西南)<br>同連盟コンパ(ピオネ荘)          |
| 12月15日      | 忘年コンパ(鳥まさ)                                  |
| 1月 3日       | OB総会(山海)                                    |

79年度 夏 合 宿

	メ ン バ ー			行 程
A (北アルプス)	P . L S . L 食 料 装 備 気 象	岩 本 一 郎	Ⅲ	ケヤキ平 — 阿曾原小屋 — 仙人峠 — 真砂沢山荘 — 剣岳 — 別山乗 越 — 五色ヶ原 — 薬師岳 — 三俣 蓮華岳 — 槍ヶ岳 — 横尾 — 涸沢 — 奥穂高岳 — 上高地
		古 賀 栄 一	Ⅲ	
		宮 岡 淳 二	Ⅱ	
		安 武 真 吾	Ⅱ	
		久保山 和 彦	Ⅱ	
		北 川 邦 光	Ⅰ	
B (北アルプス)	P . L S . L 食 料 装 備 気 象	渡 辺 隆 一	Ⅲ	蓮華温泉 — 白馬岳 — 針ノ木岳 — 鳥帽子 — 三俣蓮華岳 — 槍ヶ 岳 — 横尾 — 涸沢 — 奥穂高岳 — 上高地
		宝 蔵 涉	Ⅲ	
		後 藤 敏	Ⅱ	
		金 水 紀代司	Ⅱ	
		川 野 昭	Ⅱ	
		池 田 正 男	Ⅰ	
永 光 俊 治	Ⅰ			
C (南アルプス)	P . L S . L 食 料 装 備 気 象	都 原 誠 一	Ⅲ	戸台 — 北沢峠 — 甲斐駒ヶ岳 — 仙丈岳 — 北岳 — 荒川三山 — 聖岳 — 茶臼岳 — 赤石温泉
		加 藤 淳	Ⅲ	
		久保田 恭	Ⅱ	
		早 崎 善 宏	Ⅱ	
		久保山 豪	Ⅱ	
		田 中 教 典	Ⅰ	
D (北アルプス)	P . L S . L 気 象 食 料 会 計・医 療 装 備 気 象 補 食 料 補 備	荒 木 邦 子	Ⅲ	有明 — 燕岳 — 大天井岳 — 槍ヶ 岳 — 横尾 — 涸沢 — 奥穂高岳 — 上高地
		栗 塚 五 鈴	Ⅲ	
		桑 野 喜代美	Ⅱ	
		森 綾 乃	Ⅱ	
		前 田 久 子	Ⅱ	
		早 苗 千賀代	Ⅰ	
		大 野 圭 子	Ⅰ	
		藤 田 淑 子	Ⅰ	
		立 花 智恵子	Ⅰ	
		広 地 理 恵	Ⅰ	

# 西南学院大学 ワンダーフォーゲル部規約

## 第一章 総 則

第一条 本部は西南学院大学体育会ワンダーフォーゲル部と称する。

第二条 本部は西南学院体育会に所属し本学構内に部室を置く。

第三条 本部は自然に接し、心身の練磨、規律あるサークル活動、部員相互の親睦を図ると共に内外の見聞を広め悔いなき学生生活を送る事を目的とする。

第四条 本部は目的達成の為、左記活動を行う。

一、ワンデリング

(イ) 合宿、定期ワンデリング

(ロ) パートワンデリング

二、ワンデリングに関する諸研究

三、練習

四、機関紙「路」の発行

## 第二章 組 織

第五条 本部は運営機関として総会、例会を設置する。

## 第三章 総 会

第六条 総会は年二回（四月と十月）に之を開催する。又

緊急を要する場合、主将は之を臨時に招集する事ができる。

第七条 総会の議題は原則として事前に掲示しなければならぬ。

第八条 総会は全部員の過半数の出席をもつて成立する。但し委任状を認める。

第九条 総会の決議は出席者過半数をもつて成立する。  
第十条 総会は左記事項を行う。

一、年間計画の発行及び報告

二、その他

## 第四章 例 会

第十一条 例会は毎月一回、又は必要に応じて主将がこれを招集し成立する。

第十二条 例会の決議は出席者の多数決をもつて成立する。

第十三条 例会は左記事項を行う。

一、年間計画詳細発表及び報告

二、運営の基本方針についての意見その他の流通を計る。

## 第五章 役 員

第十四条 本部は次の役員を置く、役員は必要に応じて、正式又は臨時に任命され兼任する事もできる。

部長、顧問、主将、副主将、主務、会計、装備、

食料、記録、編集、気象、衛生、トレーナ、フア  
イヤーマスター。

第二十四条 部員が左記の事項に該当する場合、除名勸告

第十五条 部長は本学教授中より推薦し、部を総括し、事  
務を総覧する。

の対象者となり、主将はその権限を持つて除名  
することができる。

第十六条 顧問は本学教授、その他関係者中より部長が之  
を委嘱する。

一、体育会の他の部、又は同好会に所属する者。  
二、部の面目を損じ又は公の秩序を乱した者。  
三、部費四ヶ月以上滞納せる者。

第十七条 主将は前主将の推薦の下に総会の承認を得た者  
とする。

四、合宿、定期ワンデリング無届欠席の者。  
五、総会及び例会において連続三回以上の無届  
欠席をなしたる者。

第十八条 主将は部の責任者として諸般の事務を総括し、  
総会、例会の招集を行い、且つ部内に於る最高決  
定権をもつ。

六、無届で練習に参加せぬ者。  
七、その他部員たる自覚なき者。

第十九条 諸役員は必要に応じて主将が任命し総会の承認  
を得る。

#### 第七章 会 計

第二十条 役員は任期は一年とし、其の期間を四月一日よ  
り翌年三月三十一日までとする。

第二十五条 本部の経費は部員の納入せる部費、その他を  
もつて之に充当し会計がこれを管理する。

第二十一条 役員は総会に於て出席者の過半数の不信任が  
あつた場合、その資格を喪失する。

第二十六条 本部の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌  
年三月三十一日に終る。

#### 第六章 部 員

第二十二条 部員は本学学生にして本部規約を遵守し、部  
の目的達成に寄与する者とする。

第二十七条 年度末決算は翌年会計に繰越すものとする。  
第二十八条 会計報告は毎年総会に行うものとする。  
第二十九条 部員は入部に際し入部金を納入し、又毎月部  
費を納入する義務を負う。但し既納金について

第二十三条 部員が退部もしくは休部する時には書面にて  
主将に届け出る事を要する。

は理由の如何を問はず返却しない。  
第三十条 部費及び入部金は年度末総会に於て決定される。

第八章 ワンデリング

第三十一条 合宿、定期ワンデリング（原則として月一回）は全部員参加する権利を有し義務を負う。

第三十二条 パートワンデリングは部員二名以上の構成で主将の認可を得て成立する。

第三十三条 パートワンデリングは全部員が参加する権利を有する。

第九章 事故対策に於る。

第三十四条 事故対策費は本部の活動諸事故の費用補助にあてるものとする。

第三十五条 部員は定期的な事故対策費を納入する義務を負う。

第三十六条 事故に対する補助金額は原則として総費用の半額とする。

第三十七条 事故の判定は主将がこれに当たり、事故対策費は主将の下に置くものとする。

第三十八条 年度末残金は翌年度の事故対策費に繰越すものとする。

第十章 O B 会

第三十九条 本部の重要事項の実施決定についてはO B 会と事前にこれを協議し、実施後はすみやかに報告する義務を負う。

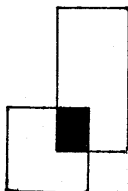
第四十条 第三十九条に該当しない事項についてはO B 会の要請ある時は、これを報告する義務を負う。

第十一章 附 則

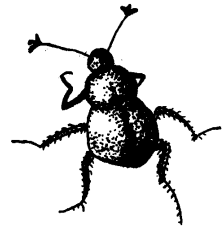
第四十一条 本規約の改正又は補足のある時は総会に於て出席者の三分の二以上の下に決定される。

第四十二条 本規約は昭和三十八年四月一日より実施する。

第四十三条 第十章に関する規約の改正及び補足についてはO B 会の了承の下に行なわなければならない。



# 編集後記



我がワンダーフォーゲル部も同好会として発足して以来20年が経過致しました。その間、特に目立った事故もなくやってこれたのも一重に先輩方の御努力の賜物であると深く感謝しております。

そこで私達81期生一同は、部創設の頃から現在に到るまでの間に先輩方が何を考え、どう行動されたかという事の資料を集め一冊の本にして、私達以後の後輩がワンゲル活動を行なっていくための参考に少しでも役立てばと思ひこの「20周年記念誌」を編纂致しました。

作成にあたりましてOB会並び諸先輩方の多大なる御協力に対し深くお礼申し上げます。

この「20周年記念誌」は、この記念誌一冊で終わるものとは思っておりません。後輩がさらに地道な活動を続け、一層詳しい資料を加えより完全なものに作り上げる

べきものだと思ひます。何故なら過去から現在に至る活動の考え方の推移を知れば、自ずと今後の活動の指針も明らかになってくるものと考えます。また先輩方におかれましても、この記念誌を通して、現役の考え、方針に少しだけでも御理解の一助になれば幸いに存じます。

今後共現役の活動に御協力の程よろしくお願ひします。最後に、20周年記念誌編集に際し、吉松タイプ印刷の方々に多大なる御協力をいただきまして心から原く御礼申し上げます。

## 編集委員

加	宝	古	都	荒	栗
藤	蔵	賀	原	木	塚
淳	渉	一	一	邦	五
		鈴	子		

路 (二〇周年記念号)

発行日 一九八〇・一〇・一

発行所 西南学院大学  
ワンダーフォーゲル部

編集責任者 古賀 栄 一

印刷所 福岡市中央区今泉二丁目

吉松タイフ印刷所  
電話 七五二一九五四〇